



| | |
|--------------|---|
| Title | Communication-Design 14 全文 |
| Author(s) | |
| Citation | Communication-Design. 2016, 14 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/55642 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

目次

【実践報告】

| | |
|------------------------------------|---|
| まち・みちづくりを通じた“公”の形成…………… | 1 |
| 板倉信一郎（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD） | |
| 森栗茂一（大阪大学 CSCD） | |
| 土井勉（大阪大学 CSCD） | |
| 辻寛（大阪大学 CSCD） | |
| 武知俊輔（大阪大学 CSCD） | |

【研究ノート】

| | |
|---|----|
| 踊りだす場の記述…………… | 19 |
| 菊竹智之（大阪大学大学院文学研究科（院生）） | |
| 演劇鑑賞者の地方劇場に対する価値評価——「鳥の劇場」来場者に対する仮想評価法を用いた定量的調査—— …… | 33 |
| 鈴木星良（大阪大学大学院国際公共政策研究科（院生）） | |
| 蓮行（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD） | |
| 木ノ下智恵子（大阪大学 CSCD） | |
| サウンド・オブ・ミュージックという名前の授業について彼らはこう語った…………… | 43 |
| 本間直樹（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD） | |
| 久保田テツ（大阪大学 CSCD） | |
| ハンセン病短歌の形成：内田守の熱情をめぐって…………… | 67 |
| 松岡秀明（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD 招へい教授） | |
| “From Where does our Health Come?: The Sociology of Antonovsky’s Salutogenesis” …… | 83 |
| Mitsuho Ikeda and Sookja Suh （Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University; Visiting Scholar of CSCD, Niigata Collage of Nursing） | |
| 投稿規程…………… | 95 |

まち・みちづくりを通した“公”の形成

板倉信一郎（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）

森栗茂一（大阪大学CSCD）

土井勉（大阪大学CSCD）

辻寛（大阪大学CSCD）

武知俊輔（大阪大学CSCD）

Encouragement of “Public Mind” by communicative activities in community and its roads

Shinichiro Itakura (Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University)

Shigekazu Morikuri (CSCD, Osaka University)

Tsutomu Doi (CSCD, Osaka University)

Hiroshi Tsuji (CSCD, Osaka University)

Shunsuke Takechi (CSCD, Osaka University)

CSCD「市民協働による道路空間コミュニケーション・マネジメント」寄附研究部門（設置期間：平成25年10月～28年9月）の平成27年時点までの研究とそれに基づく実践の途中経過について報告するとともに、今後の方向性について述べる。

Our laboratory, who is a time-limited organization, has been established in order to aim at improving the quality of community and road environment while communicating with people. It is reported progress of our two year practices and our future direction.

キーワード

社会学連携、政策形成、公共心

socio-academic collaboration, policy making, public mind

1. はじめに

「市民協働による道路空間コミュニケーション・マネジメント」寄附研究部門がコミュニケーションデザイン・センター内に設置されて約2年が経過した。ここでは、本部門の設立経緯、平成27年9月末時点までの研究・実践の状況等について報告したい。

2. 寄附研究部門設立の経緯

明治以降、21世紀に至るまで、わが国の社会基盤整備は、常に先進国追随、かつ経済成長

による需要増への追従のため、量の充足を重視して進められて来た。特に道路整備については、第二次世界大戦後、世界銀行のワトキンス調査団報告書において「日本の道路はしんじがたいほど悪い。工業国にして、これ程完全にその道路網を無視してきた国は、日本のほかにない。」¹⁾とされた状態を出発点としており、その後、自動車の爆発的増加による渋滞緩和、交通事故対策、大気汚染・騒音対策などクルマ社会への対応に忙殺されてきた感が否めない。

しかし、21世紀になり、人口増や経済成長の鈍化の中で漸くクルマのための車線供給が需要に追いついてきており、今後は自動車交通処理だけでなく、歩行者、自転車、公共交通への配慮や、本来「みち」²⁾が持っていた他の機能、すなわちコミュニティ形成機能、ライフライン収容機能、防災機能、都市景観機能等に力を入れることが可能になってきた。一方、国民の価値観の多様化、高齢化等に対応するため、高質化、使い勝手の良さを考えつつ質的改良を考えて行くことが求められている。また、戦後急速に整備した施設の経年変化への対応や、近年激甚化している災害への対応等を限られた財源・人員の中で適切に行っていくためには、社会基盤の運営管理を全て専門家に任せきりにするのではなく、可能な範囲で地域住民が自発的にインフラの維持・活用に参画していくことが重要となってくる。

このような問題意識に基づき、(財)道路環境・道路空間研究所(現(財)日本みち研究所)の寄附により、平成25年10月に大阪大学コミュニケーションデザイン・センター(CSCD)内に「市民協働による道路空間コミュニケーション・マネジメント」寄附研究部門(通称「まちみちコミュニケーション研究室」)が開設された。当初は、CSCD常勤教員の森栗・榎本を中心に、辻、武知らが特任助教として任にあっていたが、平成26年4月には国土交通省から板倉が寄附研究部門教授として着任、27年4月には榎本の離任後、土井が特任教授として着任している。この他、招へい教員・研究員、及び大学内の兼務教員が存在する。なお、寄附研究部門の存続期間は平成25年10月1日から3年間とされている。

3. 現時点までの成果

寄附研究部門としての性格上、研究・社学連携活動が主となっているが、全学共通の高等教育機関でもあるCSCD内に設置されたメリットを活かして、教育活動を通じた研究成果の反映及び、教育活動における受講生との対話の研究成果への反映も行っている。

研究は、インフラ整備やコミュニティ交通維持の観点からの活動事例の分析、関係者との意見交換、非専門家としての講義受講生やカフェ参加者との対話、研究室メンバーによる討議等を通して進められており、その成果を、土木学会等を主に発表している。得られた知見については、概ね以下のようにまとめられるものと考えている。

- a) 今後のまちづくり、みちづくりにおいて、施設の質や使い勝手を重視していくべきで

ある。その際、地区計画や地域内道路の質的改良には、地域内の利用者（住民）の意向を十分に把握することが必要である。

- b) 地域内の課題である交通安全、景観整備、災害対応等は、ハード整備だけでは不十分で、制度等のソフト施策との総合化や住民との協働が課題解決の成否につながる。
- c) 行政機構内部の専門化・細分化が進む一方で、住民の（オルテガの言うところの）「大衆」³⁾化やコミュニティの消失により「公」について住民が話し考える機会と場が失われてきている。このため、行政と住民の対話や合意形成はより困難になりつつある。
- d) 地域住民のニーズにあったまちづくりやみちづくりのための総合的施策を、行政・地域住民の協働で実現するには、以下①～④の機能（文末の〈参考〉参照）を担う「地域公共人材」及び公的議論に参加できる資質を持つ（アレントの言うところの）「市民」⁴⁾の育成が望まれる。
 - ①高度に専門化、分業化された行政施策について市民に分かりやすく話すことのできる者（モデレーター）
 - ②個別分節化した市民の意見を大きくとりまとめ、かつ、大筋で合意可能なイメージとして集約することができる者（ファシリテーター）
 - ③合意可能なイメージの施策化に向け関係者を組織化する者（コーディネーター）
 - ④施策が具体的になるにつれて発生する利害関係者同士の対立を調整する者（メディエーター）
- e) 一方c)の裏返しとして、まちづくりやみちづくりは地域住民すべてに関わることであり、これをコミュニケーションしながら行うことが、「公」の再形成につながる。

4. 寄附研究部門の活動

前章に述べた知見、特にd)を意識し、「地域公共人材」、公的議論に参加できる資質を持つ「市民」の育成及び、それに向けた行政内における気運醸成を目指し、大きくは講義、カフェ、研究会、行政との懇談会の4つに大別される活動を行っている。

4.1 講義

4.1.1 CSCDにおける講義の特徴

CSCDが大学内で提供している講義は主として全学の大学院生向けに行っており、それぞれの専門課程での研究以外とのコミュニケーション能力を高めるものである。受講生は、工学、経済学、法学などの公共政策に関連の深い研究科のみならず、文学、社会学、医学などに所属している者もいる。一方、中には社会経験豊かな受講生もおり、まちづくりやみちづ

くりに関して保有する知識の度合いに大きなばらつきがある。また、選択科目であり、負担の多寡や、達成感が得られることへの期待の持たれ方が受講者数に大きく影響する。

4.1.2 まち・みちづくりデザイン講義群の概要・ねらい

4.1.1に述べたようなことを考慮し、入門から専門的技術、その活用などを個人の経験や知識、興味の度合いに応じて選択できるよう、

- a) 概論：まちづくりやみちづくりに関する制度、施策、課題等を概観、
- b) 演習：第3章d) ①②のような多人数とのコミュニケーションに必要な技術を修得、
- c) 特論：b) で得た技術を活用し、現場で関係者と議論しながら具体的施策を提案
- d) 体験：狭い自我に捉われないコミュニケーション能力を培う

の4種を設定した。

表1 2015年度まち・みちづくりデザイン講義群

| | |
|----|------------------------|
| 概論 | まち・みちづくり概論 |
| 演習 | 〃 演習Ⅰ（ファシリテーション等の対話技法） |
| | 〃 演習Ⅱ（データリテラシー・データ表現法） |
| 特論 | 〃 特論Ⅰ（鉄道沿線の地域活性化） |
| | 〃 特論Ⅱ（協働のみちづくり） |
| | 〃 特論Ⅲ（総合交通、まちづくり） |
| 体験 | 〃 交流実践論（お遍路による共感能力涵養） |

これにより、演習Ⅰでファシリテーション技法修得、演習Ⅱでモデレーションのための説明能力の向上とデータリテラシーを修得することを狙っている。特論においては受講生間での議論に際し、ファシリテーションやモデレーションを講師が受講生に対して行ったり受講生同士で行ったりする一方、現場での関係者等との議論を通じてコーディネーションやメディアーションに必要な行政・施策に関する知識を習得することを狙っている。これらは全て90分×15回（2単位）の時間数で構成している。

4.1.3 講義の進め方

概論、特論においては、基本的には

- a) 30分程度の教員あるいは行政や民間の実務者等からの課題・行政施策・事例説明（図1）
 - b) いくつかのグループに分かれての討議（図2）
 - c) グループ別の討議結果発表と質疑応答（図3）
 - d) 教員等からのコメント・ふりかえり、受講生による講義へのアンケート記入
- といった流れで実施することとしている。この過程において受講生がb) でファシリテ-



図1 講義冒頭における話題提供



図2 グループ討議



図3 受講生による発表と質疑応答

ション、c) でモデレーションを経験することを意図している。

一方、コーディネーション、メディエーションについては、かなり具体的な施策の案がなければ、受講生に体験させることが困難である。現段階では特論において、表2のような課

題を受講生に与え、提案を求めており、その際の質疑応答により対応している。

表2 特論において与えられる課題の例

| 講義名 | 課題 |
|-----|-------------------------------------|
| 特論Ⅰ | 能勢電鉄沿線の活性化（H27は能勢電アートラインと関連付けて） |
| 特論Ⅱ | 地域の道路の課題解決（H27は鉄道下の狭小ガードにおける交通安全対策） |

4.1.4 平成27年度前期における講義の実践事例

a) 演習Ⅰ

演習Ⅰは、ファシリテーション等の対話技法を修得させるものである。近年、わが国におけるファシリテーションや熟議の関係者によって、日本の民俗学者宮本常一による「対馬にて」において叙述されている「寄り合い」のあり方や、相手の話を傾聴するという手法が注目されているが、この講義は民俗学を出自とする森栗が、ファシリテーションを宮本常一と関連づけながら、技法のみならず、その基本的態度までを論じる意欲的なものである。

大学院生だけでなく、まちづくり・みちづくりに携わる行政関係者やコンサルタントの専門家など社会人聴講生も受け入れることとし、ゴールデンウィーク時に集中講義形式で実施した。技法の修得には短期間に集中的に行うことが重要であると考えた結果であるが、実際には受講生は聴講生も含めて6名程度、しかも社会人経験者でない大学院生は1名と、当初の想定より少な目であった。アンケートや受講生からの聞き取りでは、4月に履修決定でゴールデンウィークでの集中講義では、社会人受講生だけでなく、学生でも、「4月になっていきなりゴールデンウィークに來いと言われても、普通の人は、もう旅行やなんかの予定が入っており無理」とのことであった。また、今年新たに開講した講義のため、知名度が低く単位の取得の難易度を想定しにくかったこと、科目名が抽象的であり「全然響かない」、しかもシラバスを一読しただけでは、一般の学生にはファシリテーションの重要性や宮本常



図4 演習Ⅰ ファシリテーション技法

一との関連、さらには自らの専攻や今後のキャリア形成にどのようにプラスになるのかを理解しかねたことも原因と思われる。一方で社会人経験者からは、技法だけでなく思想的バックボーンまで論じたことが評価されたようである。

来年度以降の対応として、開催時期を後ろにずらす、科目名の変更、シラバスにおける一般的な受講生の心に響くような表現を考えるとともに、まちづくり・みちづくりや公共政策等に関係の深い研究科などへの周知を図っていきたい。

b) 演習Ⅱ

演習Ⅱは、近年、行政機関がインターネットで種々の地域データを公開しており、これを用いて、他者の施策提案等の妥当性を検証したり、ステークホルダーに分かりやすく説明する際に必要な技術として、公開データの獲得方法、分析方法、データリテラシーを修得するものである。集中講義形式で、主として5月中旬以降の土日で実施した。受講生は社会人聴講生2名、大学院学生・学部学生等5名であった。具体的にデータ及びデータ解析ソフトを用いるため、建設コンサルタンツ協会近畿支部とCSCDの間で相互協力のための協定を結ぶこととし、建設コンサルタンツ協会加盟会員会社の社屋内でPC等を借りて実施した。また、データアクセス方法や解析ソフト活用の指導には、当該会社の社員の全面的協力を得た。

地域データの分析は汎用性が高いため、演習Ⅰに比べて社会人未経験の学生の参加も多く、具体的な技術を学ぶことができたため、受講生からは概ね高い評価を受けた。一方で、出身学科の違いにより、受講生が求める分析のレベルに大きな差があることも事実である。例えば、医学研究科で疫学を学んでいる者（実験計画法、確率分布関数、検定などの知識を求められる）と、公共交通計画のための需要予測を今あるデータから導くことを要求される者（たくさんのデータ系列の中からとりあえず2つの変数間の相関式を作ることを求められる）では、同じデータに対しても見方が異なってくる。コンピューターに対するリテラシーにも大きく差がある。このため、協力を頂いたコンサルタント会社の方々にも若干のとまど



図5 演習Ⅱ PCを用いたデータ分析

いがあった。この演習は、モデレーションのための説明能力の向上とデータリテラシーの修得を目的としており、今後はシラバスにおいてそのような方向性を明確にしたい。

なお、協力頂いた方々からは、行政施策形成に関わるコンサルタント会社として、社員の説明能力向上、聞き手である一般市民のデータリテラシー向上は大きな関心事であり、幅広い分野の学生に講義を行うことが、「自らの資質の向上に役立った」との感想を頂いている。

c) 特論 I

特論 I は、昨年まで「地域交通コミュニケーション」として開講していたもので、従来から能勢電鉄沿線地域のうち、現在著しい高齢化が進みつつあるニュータウン地区および里山地域の活性化及び交通問題を取り上げていた。今年度は、沿線全域を対象とした地域活性化プロジェクトである「能勢電アートライン2015」に着目し、これに関連する地域協働型プロジェクトを提案することを目標として、鉄道会社やアートライン関係者等との対話を行っている。

本講義は、ここ数年続いているものであり、学生間のクチコミや能勢電鉄沿線居住者の参加もあり、前記2講義に比べて比較的受講生が多く、本学学生数6名、社会人聴講生2名であった。さらに能勢電アートラインをプロデュースしている三好庸隆教授の所属する武庫川女子大の学生3名の聴講もあり、多様な受講生間で全体討議、グループ別討議を効果的に行うことができた。例えば、開講当初、能勢電鉄のサービスについて、沿線居住受講生の「運賃が高い」「大阪まで時間がかかる」という意見に対し、「10分に1本も走らせなくていいのでは?」「地方私鉄に比べれば運賃は安い」「地域で支えないと鉄道が廃止になったら高校にも行けなくなる」という反応、「神戸近郊の私鉄でさえ廃止の議論が出ている」等指摘があり、視野が広がられたようである。その後、前述のように電鉄社員や三好教授との対話、現地調査等を行う過程で学生間に共通認識が生まれ、グループに分かれて討議する中で、お互いの専門知識を活かしつつ、沿線地域活性化に向けた4つの提案が行われた。あるグループは、経済学専攻の学生が将来需要推計から鉄道経営が厳しくなることを、保健学専攻の学生が地域別高齢化率をコホート分析で推計しクルマ移動が困難になることから自治体が直面する問題を指摘し、自治体と鉄道会社が運命共同体であることを論じた。別のグループは沿線出身者でかつ、宇宙物理専攻の2人が協働で地域の文化的資源である多田銀山と北極星をモチーフにしたアートラインのインスタレーションを結びつけた子供向け探訪ストーリーを提案した。7月上旬の中間発表時には、能勢電幹部や教員から提案に対するフィードバックや、関係者間をどのように組織化（コーディネート）し、利害調整（メディエート）していくのかに関して厳しく追及されたが、これによく対応し、8月9日に能勢電鉄本社で行われた成果発表会では、能勢電鉄社長や、地元自治会長から高い評価を受けた。

本講義は選択科目であり、しかも直接学生自身の研究分野に関連しないものであるが、昨年の提案事例紹介により、内容によっては学外の社会人から高評価を受けることを知らされ

ていたこと、多様な意見をもつ者同士が共通の体験を経て協働で提案を作成していくことの面白さを実感できたことが高いモチベーションの維持に繋がったと思われる。



図6 特論Ⅰ 学外関係者も交えた対話

d) 交流実践論

交流実践論は、昨年まで「交流システム論」として実施していたもので、四国における歩き遍路の体験を通じて、多くの人の好意に支えられて生きていること、その過程で必ずコミュニケーションが生じていることを実感してもらう講義である。従来は、その結果を個人レポートとして提出してもらう程度であったが、今年度は、それぞれの体験を、後述するカフェにおいて、一般市民向けに発表してもらうこととした。

これにより、受講生は遍路実施時から、各自の体験の自己省察に努めるとともに、カフェ実施時における参加者への分かりやすい説明や、柔軟なコミュニケーションの大切さを実感できたと考える。なお、受講生は9名であったが、社会人経験者やサハラ横断経験者、留学生など多彩な受講生が集まった。

4.1.5 今後の課題

9月末時点では概論、特論Ⅱ、Ⅲが未実施であるが、現時点では以下のような点を課題として認識している。

- a) 受講生の安定的確保
- b) 受講生の関心事項と社会的課題解決の間の乖離
- c) 受講生毎の取り組み姿勢に大きな差があること
- d) 課題解決のために受講生が時間外で集まって議論する時間の確保が困難
- e) 現地調査に割ける時間、関係者との意見交換の時間確保が困難

これらは大学の講義だけの問題ではなく、受講生を地域住民と読み換えれば、現実の社会

の中で地域住民に公的な議論に参加してもらう際の課題に通じるものがある。講義における課題の解決の中には実社会における課題解決の糸口になるものもあると考えている。

基本的には、講義（社会問題の解決のための議論）の重要性、受講生（地域住民）同士が議論することが受講生（地域住民）に及ぼすメリット、講義（議論）の流れと求められているアウトプットを広く学内（地域内）に周知することであり、時間外における自主的な集まりや現地の確認の機会を強制的ではない形でセットすることであるように思っている。

4.2 まちみちカフェ

4.2.1 まちみちカフェの概要・ねらい

このカフェは、毎月1回第2水曜19時から約2時間程度、北新地駅横の国道2号曾根崎地下歩道（図7）で実施しているものである。国土交通省大阪国道事務所の協力のもと、敢えて公共空間である道路敷地内で実施している。これは、人々が家を出て最初に遭遇する公的空間が道路であり、みちづくりは全ての人々が「公」について考えるきっかけとなること、道路の本来持っている機能の中のコミュニティ形成機能を現実に回復させたいとのねらいを、当研究室と道路管理者とで共有できたことによる。

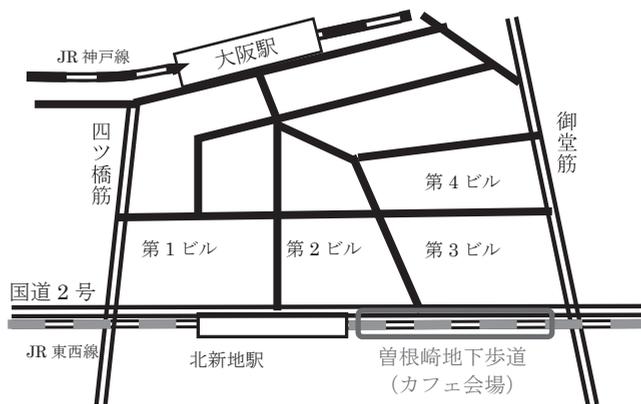


図7 カフェ開催場所

カフェについては、

- ・ 広く一般市民対象であるが、彼らは必ずしも哲学愛好者のような知識や議論の仕方に関する素養を持っているわけではない
- ・ 開設当初は常連的メンバーがいない（将来的にもメンバーが固定化するとは考えにくい）こともあり、すぐに打ち解けたり、率直に意見をいえる人は少ない

ことから、

- ・最初にカフェ主催者がゲストスピーカーが話題提供する
 - ・ただし、聴講主体ではなく、その後の意見の出し合い、議論に時間を割く
- を方針とし、表3の様な話し合いのマナーをカフェ会場に示している。

表3 まちみちカフェの話し合いのマナー

- ・「お話は、名前を言って手短に」
- ・「話し上手は、聴き上手」
- ・「他人の引き写しや、色眼鏡でない、ご自分の意見を」
- ・「せっかく来られたんだから、一言、ご感想を」

長期的には、公的な議論をきちんと噛み合った形で行える市民が育つ場として、意見を無理にまとめるものではなく、互いに許容しあいながら自分の意見も人に理解してもらえるように話すことのできるカフェにしていきたいと考えている。一方、行政関係者には、ゲストスピーカーとして参加するなどして、市民へのモデレーションを体験してもらおう場、新たな施策について市民の反応を確かめる場としての活用を考えている。学生には4.1.4d) に示すようにカフェでの発言・運営を体験してもらおう他、後期講義においては、カフェへの参加を出席時間数が足りない受講生への救済措置とすることも検討している。大学スタッフの立場としては、このような試みから、それぞれ価値観も知識も異なる者同士が、いかにして共通認識を得て行くかを観察する機会でもあると認識している。

4.2.2 設営場所

設営場所は前述図7のとおりであるが、乗降客数一日約10万人の都心駅の横であり、北にダイヤモンド地下街や大塚駅前再開発ビル、南に北新地があるため、通行人が極めて多い。

第1～4回は曾根崎地下歩道から少し奥まった「みちまちスクエア」において実施していたが、参加者数が増えて（といっても10～15人程度であるが）手狭になってきたこと、入りやすい雰囲気を出したいことなどから、第5回からは、曾根崎地下歩道内の「PRコーナー」の一角に移動して実施している。それぞれの場所の特徴は表4のとおりである。

表4 カフェ開催場所の特徴

| 場所 | みちまちスクエア | 曾根崎地下歩道PRコーナー Aゾーン |
|----|--|--|
| 特徴 | <ul style="list-style-type: none"> ・歩行者動線から少し奥まっており、区切られた空間 ・狭い（15名程度、6m×5m程度） ・途中参加、退出しづらい ・声は通りやすい ・照明は明るい ・今年度は独占的に使用可能 | <ul style="list-style-type: none"> ・地下駐車場直下の歩道空間であり、開放的 ・広い（34m×19m）展示なども可 ・途中参加、退出は比較的抵抗少 ・声が拡散して通りにくい ・暗い ・他のイベントなどと競合の可能性あり |

表4 カフェ開催場所の特徴 (続き)

| 場所 | みちまちスクエア | 曽根崎地下歩道PRコーナー Aゾーン |
|----|---|--|
| 写真 |  |  |

4.2.3 カフェの状況

進行に際しては、話題提供のためにプロジェクターを使用しているが、マイクは使用していない。最初にカフェの趣旨、ルール説明等を行い、主催者がゲストスピーカーから話題提供を行う。その場の雰囲気、打ち解け具合に応じて参加者にはA4用紙を用いて名前、近況、参加理由などをサインペンなどで大きく記入してもらって自己紹介をしてもらうこともある。その後、自由討議となるが、これもA4用紙やポストイットに質問や意見の骨子を記入してもらうなどしてそれを基に手短かに発表してもらうことが多い。この辺りは、従来から森栗らが講義や行政の委員会等で行ってきたファシリテーション技術に拠るところが多い。概ね1時間半から2時間程度経ったところで、まとめに入り、主催者からふりかえり、コメントを行い、参加者にアンケートへの記入をしてもらい流れ解散というパターンが多い。

周知方法としては、曽根崎地下歩道の掲示板2箇所にはポスターを貼っているが、チラシの設置・配布はしていない。大学・行政関係者、カフェ参加者のうち、アンケートにメールアドレスを記入していただいた方にはメールで開催の配信をしている。

参加者は、当初は行政関係者が多かったが、回を重ねるうちに、少しずつ一般市民が増えつつある。時間的に帰宅途中の勤め人が多く足早に通過する人が多いが、地下街でスライドを映写して何か話をしているというのは奇異に映るようで、数分間、中には十分以上遠巻きに眺めている人もいる。声をかけると席について参加する人も出てきている。

4.2.4 カフェ開催状況

カフェの開催日、参加者数、内容等の概要は表5に示すとおりである。

表5 カフェの開催状況

| | |
|------------------------------|---|
| 第1回 4月8日 みちまちスクエア 約10人 | 「阪大でまち・みちづくり講義やります」森栗、土井、板倉 まちみちコミュニケーション研究室担当の講義の説明 比較的關係者の多い中での1回目 文字主体のプレゼンのため、意見が出にくかったと思われる 不慣れでタイムスケジュール通りいかず 寒いとの意見多数 |
|------------------------------|---|

| | |
|--|--|
| <p>第2回 5月13日 みちまちスクエア 約15人</p> | <p>「生活と公共の関わりを考える」森栗 大阪市明治地区における昔の写真を用いた地域内世代間交流 ゲストスピーカー（大阪市大特任研究員上野氏） 上野氏所縁の明治地区関係者が参加 昔の写真と地図を映写したことから、関係者以外からも意見が比較的活発に出たが、ノスタルジックな意見が多く当初の「生活と公共」にまで話が到達しなかった</p> |
| <p>第3回 6月10日 みちまちスクエア 約10人 (但し受講生除く)</p> | <p>「四国遍路を語る」学生 交流実践論に参加した阪大生によるプレゼン 学生が企画、遍路の白装束着用や写真、地図など展示に工夫 参加者以外に、着席せずに遠巻きに眺めている人が多数いた 一般市民から学生への質問多く学生にも達成感</p> |
| <p>第4回 7月8日 みちまちスクエア 約20人</p> | <p>「道の駅の使い方」板倉 道の駅の現況と将来構想等について説明、参加者から意見聴取 ゲストスピーカー（国土交通省近畿地整交通対策課長東氏） 一般市民の参加多数 道の駅は、市民にもなじみがあり、意見が出やすかった</p> |
| <p>第5回 9月9日 PRコーナー A 約15人</p> | <p>「阪大式「まち・みちづくり」」土井、板倉 後期開講の特論Ⅱ、Ⅲについて概要説明 PRコーナーに移動したため、席配置に余裕ができた 開放的空間のため、声が聞こえにくかったとの意見あり 導入部でクイズを行なったことで、意見が出やすくなった</p> |

4.2.5 カフェ実践上の課題

現時点では以下のような点を課題として認識している。

- a) 一般市民同士の闊達な意見交換とするためには、なお一層の集客対策が必要
- b) 意見が出やすくなる工夫が必要
- c) 暗さ、寒さ、声の聞こえやすさなどの外部環境対策が必要

集客対策としては、ポスター以外にチラシによる周知も考えたい。カフェの趣旨を考えると、専門家（行政など）、非専門家（一般市民）の割合に大きな偏りが無いほうが良いので、多くの人の興味を引きそうなタイトルやイメージ写真の掲載も必要と考える。チラシは関係者へのメール等による送付、開催場所である曾根崎地下歩道みちまちスクエア内のパンフレット設置コーナーに置くほか、毎回の参加者や興味を示して立ち見している人への配布を考えている（無差別配布は許可が必要なので行わない）。また、当日の声掛け（公共空間であり過度の声掛けは不可）、入りやすい工夫（ポスターなどの掲示、椅子の配置）、通行人に対して目立つ工夫（風景写真等の映写や、パネルによる写真展示等）も考えたい。

意見が出やすくなる工夫としては、選択型クイズ（挙手など参加者に単純な動作をさせる）、比較的意見の言いやすいオープンクエスチョン（写真などへの感想）、まとまった意見を言ってもらう際の文字化（A4用紙に書かせる）といったように少しずつ高度な内容に馴染ませていくことが考えられる。また、関係者の一部をフロアに配置して参加者の理解の一助

となるような質問やスピーカーとのやりとりを他の参加者に示すことも試してみたい。

4.3 まちみち研究会

4.3.1 研究会の概要・ねらい

まちづくり・みちづくりに関係する広範な話題について、やや専門的な見地から行政関係者、公益事業者、大学研究者等が自由に意見交換をする中から、新たな施策や研究課題を発掘する社会学連携の場として、基本的には毎月第4水曜19時から大阪大学中之島センターで研究会を実施している。具体的には、まちみちコミュニケーション研究室のメンバー、あるいは外部から招いたゲストスピーカーが、自分の研究成果や論文の発表、行政の新規施策、企業における新たな試みなどを30分～60分程度話し、その後、意見交換をしている。

4.3.2 研究会開催状況

研究会の開催日、内容などは表6のとおりである。

表6 研究会の開催状況

| | |
|--------------|---|
| a) 第1回 4月22日 | まちづくりのメデイエーション、市民出資を考える 話題提供 板倉、森栗（阪大まちみち研） 参加者 阪大まちみち研メンバー |
| b) 第2回 5月27日 | 若年者の生成原単位減少問題について 話題提供 土井（阪大まちみち研） 参加者 阪大まちみち研メンバー、近畿地整、ネクスコ西日本等 |
| c) 第3回 6月24日 | 地域公共人材制度について 話題提供 渡邊（大阪市市民局） 参加者 阪大まちみち研メンバー、田中（近大）、大阪市等 |
| d) 第4回 7月22日 | まちみち研講義演習Ⅱの振り返り 話題提供 白水（中央復建コンサルタンツ） 参加者 阪大まちみち研メンバー、中央復建 |
| e) 第5回 8月26日 | うめきたのまちづくり 話題提供 植松（阪急電鉄不動産事業本部） 参加者 阪大まちみち研メンバー、田中（近大）、近畿地整 |
| f) 第6回 9月30日 | 道路における維持管理の委託と管理責任の所在を考える 話題提供 武知（阪大まちみち研） 参加者 阪大まちみち研メンバー、近畿地整、大阪府、ネクスコ西日本、阪神高速等 |

4.3.3 研究会運営における課題

今まで、開催日だけを決めており、話題についてはその時々における研究室メンバーの関心事項や研究の進捗に応じて1ヵ月程前に決定し、日頃の付き合いの中でスピーカーを決め、その話題に関心を持ちそうな参加者への呼びかけを行うという、いきあたりばったりの運営になっている。

今後は、講義、カフェ、行政との懇談会と有機的に結合し、効果的な社会学連携を図れるような話題設定、スピーカーの決定、参加者への呼びかけを行うようにしたい。

4.4 行政との懇談会

4.4.1 懇談会の概要・ねらい

国土交通省近畿地方整備局、近畿運輸局の部長級幹部とまちみちコミュニケーション研究室をはじめ阪大教員が、まちづくり、みちづくり、公共交通対策について幅広く議論し、連携施策を生み出す場として昨年6月に設置したものである。年2回程度実施したいと考えているが、本年6月の3回目は、整備局、運輸局、学内連携教員、まちみち研教員混成の班を3つ編成し、班別に行政・大学の連携についての討議をワークショップ形式で行った。

4.4.2 懇談会開催状況

懇談会の開催日、内容などは表7のとおりである。

表7 懇談会の開催状況

| | |
|-----------------------|---|
| a) 第1回 6月10日 (H26) | <ul style="list-style-type: none"> ・ 大阪大学まちみち研究室の研究活動の紹介 ・ 近畿地整・近畿運輸局のまちづくり、みちづくり、公共交通・観光政策に関する施策の紹介 ・ 市民との協働のあり方、道の駅における連携などについて意見交換 |
| b) 第2回 12月9日 (H26) | <ul style="list-style-type: none"> ・ 今回から学内連携教員として工学研究科交通・地域計画領域教員が新たに参加 ・ 同領域の研究活動の紹介 ・ 道の駅関連の施策、地域公共交通活性化施策の紹介 ・ 道の駅における連携、地域交通活性化等について意見交換 |
| c) 第3回 6月25日 (H27) | <ul style="list-style-type: none"> ・ 今回から学内連携教員として文学研究科人文地理学講座教員が新たに参加 ・ まちみち研究室の今までの活動概要報告 ・ まちみち研究室からの行政と大学との連携についての提案 ・ 行政・大学間連携についての班別討議とその結果報告 ・ 班別討議の結果を踏まえた全体討議 |

なお、この懇談会での議論から、道の駅や、社会基盤のストック効果分析に関する近畿地方整備局と大阪大学との連携が生まれてきている。また、大学講義や行政内研修における連携に関しても議論の俎上に上がっており、今後も各種連携に向けた議論を懇談会において継続していきたい。

5. 今後の方向性

講義、カフェ、研究会、行政との懇談会はそれぞれ対象も目的も異なるところがあるが、つまるところ、大学学生、行政等の実務担当者、教員でもあり研究者でもある大学スタッフの3者の協働の場であると考えている。

例えば、講義において、行政実務担当者に話題提供をしていただき議論することは、社会的課題に対してどのように問題解決を図っていくかを学ぶ機会でもある一方、行政の担当者が自ら実施しようとしている施策を一般市民に分かりやすく説明し、あるいは市民のニーズを施策にどのように反映していくかの実践的練習の場でもある。また、そのコミュニケーションの状況に立ち会うことが大学スタッフにとっては研究の場ともなりうる。

カフェについても同様に学生、行政の担当者を巻き込みたい。カフェで一般市民と共に考え、あるいは時には自らの提案を発表し市民の反応を知ることは、コミュニケーション能力の実践的獲得につながると考える。

一方、研究会では、分野の異なる研究者や企業・行政の担当者が共通の話題について意見交換しながら、社会学連携のきっかけを作ることができればと考えており、話題の選定についても、参加メンバーの希望を聞きながら、それに応じた話題提供者を招くこととしたい。

行政との懇談会については、今のところ、国土交通省の出先機関である近畿地方整備局、近畿運輸局との間で実施しているが、いくつか具体的な連携事案が生まれてきている。中でも道の駅に関する連携では大阪大学人文地理学教室の学生がインターンとして参加したり、社会基盤のストック効果の分析については、交通・地域計画領域や経済学研究科の学生を交えた討議が行われるなど、学生も含めた3者の協働が生まれてきており、行政側の求めに応じつつ、学内の教員、学生との協働に結び付けて行きたい。また、国の機関だけでなく大阪府等大阪大学近辺の地方自治体等との間にも広げて行くことを考えている。

これらの協働は、社会における諸課題の解決に向けて関係者を巻き込み、認識を共有化し、相互の立場を理解し合い、提供できるリソースについて情報交換し合うというコミュニケーションの中から生まれてくるものであり、実はそのようなコミュニケーションの場こそが“公”なのではないかと考えている。この“公”の形成過程を、カフェや研究会の場で市民や行政・企業にも示しつつ、大阪大学で学ぶ多くの学生が“公”を支える担い手となれるようにしていくことから、協働による社会のイノベーションを実現していきたい。

〈参考〉 公的施策形成に必要とされるコミュニケーション過程の構造化について

筆者らは、交通、まちづくりに関する地域内での対話経験、総合的施策形成における行政

内部での調整経験、ドイツ・アメリカにおける行政・市民間の仲介者の動向に関する調査結果、ADR等に関する知見等を交えた討議から、施策形成場面における熟議・合意形成にむけて必要とされるコミュニケーションを4つに分類（図8～11）、熟議を形成するメカニズム（民主的メカニズム、ソクラテス的メカニズム）及びコミュニケーションの形態（伝える、まとめる）の2軸で構造化できる（図12）との仮説を提起している（板倉他 [2015]）。

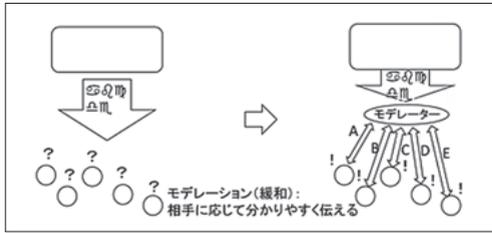


図8 モデレーション

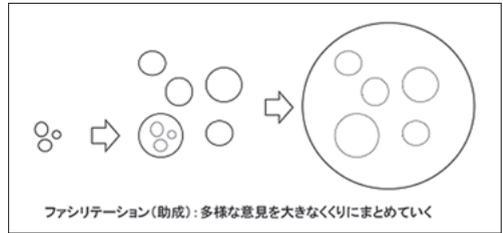


図9 ファシリテーション

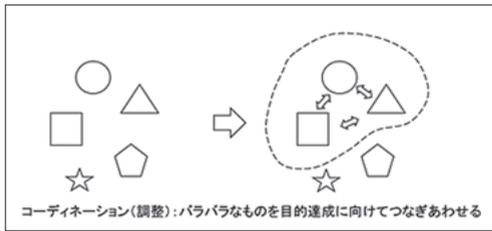


図10 コーディネーション

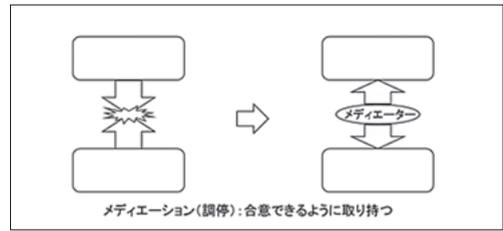


図11 メディエーション

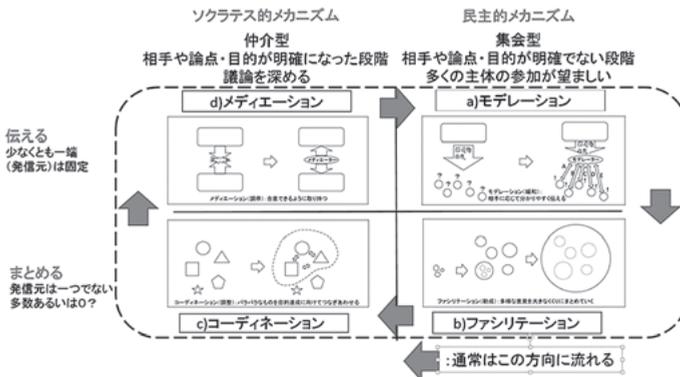


図12 施策形成のためのコミュニケーション過程の構造化

地域インフラの改善や運用に地域住民の意見を取り入れ、協働を行なっていく場合を想定すると、この4つの形態が、現実には時には行きつ戻りつしながらも概ね a) ⇒ b) ⇒ c) ⇒ d) の順に流れていくものと考えられる。これらは時間、予算、人員等の制約や合意形成の状況に応じてプロセスの一部が省略されることもありうるが、このようにコミュニケーション過程の構造化を行なっておくことで、施策導入への合意形成が円滑に行かない場合に、

どのプロセスが不全であったかをチェックし善後策を採ることが可能となると考えている。

なお、従来の行政発議型の施策形成の場合は、行政内部の一部門の中で、担当者の発案が部内で非公式非定形的にa')、b')が行われる中で施策のたたき台として形成され、行政内部での部門間コーディネート（他部局への根回し、呼びかけ）c')、部門間メディエーション（他部局との個別協議、折衝）d')を経て行政施策としてまとめられた後、地域住民への（一方的）施策説明がモデレーションにまでは至らない形で行われていたとも解される。

また、今後増えると思われる地域発議型の施策形成の場合は、地域内でのa) ⇒ b) ⇒ c) ⇒ d) のプロセスの後、住民から行政内各部門へのモデレーションa')が行われ、しかる後に行政内部でb') ~ d')が行われるようになるとも考えられるし、地域内と、行政内部で同時並行的に二つのサイクルが行われることもあると考えられる。

註

- 1) ワトキンス報告書自体は英文で書かれているが、戦前のわが国の道路整備に対する軽視を指摘し、戦後高度成長期における道路整備重視の契機を作った重要な言葉として、道路行政関係者によって日本語に訳された上で数多く引用されている。ここでは武部 [2015: 188] に拠った。
- 2) ここで「みち」と平仮名で表記したのは、車の走る空間としての「道路」だけでなく、本来、自然発生的で豊かな意味合いをもつ空間としての「道」「路」「径」…を志向する言葉として表現したいためである。このような考えは近年、道路行政関係者の中でも共有されてきている。例えば（財）道路空間高度化機構 [2007: VI - IX] など。
- 3) 高度に分業化、専門化された文明社会の中で、「(文化の基本的価値などに) 共同責任を負おうともしないし、その価値に奉仕する心構えもない」(オルテガ [1995: 127])、「自分が知らないあらゆる問題において無知者としてふるまうのではなく、そうした問題に関しても専門分野において知者である人がもっているあの傲慢さを発揮する」(同 [1995: 160]) に表わされる。
- 4) ここでは、画一的なものを押しつけたり無批判に受容する者ではなく、共同の生活への参画を決意した者という程度の意味で用いている。

引用・参考文献

- 板倉信一郎・森栗茂一・辻寛・武知俊輔 (2015) 「わが国における地域インフラの維持・活用に向けたメディエーターの必要性」『第51回土木計画学講演集』(CD-ROM: 351pp.1-8)
- 武部健一 (2015) 『道路の日本史 古代駅路から高速道路へ』中央公論新社
- (財) 道路空間高度化機構編 (2007) 『みち 創り・使い・暮らす』技報堂出版
- オルテガ・イ・ガセット (1995) 『大衆の反逆』筑摩書房

踊りだす場の記述

菊竹智之（大阪大学大学院文学研究科（院生））

A Description about the Field Let Us Dance

Tomoyuki Kikutake (Graduate School of Letters, Osaka University)

今、様々な福祉や教育など現場で「参加型」のプログラムが取り入れられているが、人が何かに参加するとはどういうことなのだろうか。この問題を考えることは私にとって、対話での喋る人やダンスでのたくさん動く人、以外の人々とも活動を共にしていく方法を考えることにつながっている。障害者福祉施設たんぼぼの家で舞踊家佐久間新さんが行なうワークショップでは、踊りをやったことなどないような人々、しかも体を動かすのが不得意と思われているような人々が踊りに参加しだす。このワークショップの映像を視ることを通じて、人が何かに参加しているとき（あるいはそう見えるとき）、そこでは何が起きているのかということを書いた。映像を視る際には、(1) 動きの少ないひとの動き (2) 場を満たす雰囲気 (3) 参加者間の視線のやり取り、などのことに注目し、微細な場の変化と参加者一人一人のあり方がどう結びつきながら変化していつているのか、ということを追った。

キーワード

ダンス、参加、障害者福祉

Dance, Participation, Welfare for the disabled

1. はじめに

この研究は、障害者福祉施設であるたんぼぼの家と舞踊家の佐久間新さん（以下Sさんと表記する部分もある）が共同で行うダンスワークショップについての哲学的探求である。この施設では月に2回佐久間さんがやってきて、少数のメンバー（施設利用者）、スタッフとともに即興ダンスを繰り広げる。彼らの持つ障害はさまざま、身体が沢山動かせる人、身体を動かすのが難しい人、知的な障害を伴う人やそうでない人、ひとりひとり全く違った身体を持っている。その中で、特に振付をするでもメソッドを持ち込むでもなく、そこに現れる身体の動きを楽しむという活動が行われている。

とはいえこの研究は福祉という文脈に必ずしも乗ったものではない。ここでは人が人とともに何かを表現するという現象が起っており、芸術か否か、障害者か否かという区分を超えた人の営みとしての面白みがある。私は、一人ではなく人とともに何かを表現することがどのようにして可能になっていくのか、またそこで何が起きているのかということに非常

に関心がある。この問いはこのダンスWSだけでなく、ひろい意味での表現活動すべてに関わるような問いだと考えている。

私のWSに対する関心は以上の通りだが、その中でも今回特に探求を試みるのは、人々が何事かに参加するとはどういうことか、という問いである。現在、福祉施設や学校をはじめとして、利用者や生徒を単に受身にさせない参加型のプログラムが取り入れられようとしている。そのこと自体は歓迎すべきことだが、興味をもってもらえない、本当に楽しんでいるかわからない、楽しめる人とそうでない人が共存することなど、参加にまつわる課題は絶えない。また同時に、参加のあり方を視るすべが、よく発言したりよく動いたりしていること、もしくはテストで間接的に評価するなど以外に少ないことも問題だろう。

そうした様々な参加型のプログラムと比べてみると、たんぼぼの家のワークショップでの参加のあり方は非常に面白い。施設の性質上、そこではしゃべるのが苦手な人やたくさん動くのが苦手な人もいる。そうした中で、場を作っていくにはどうしたらいいのだろうか。

2. 研究方法と映像

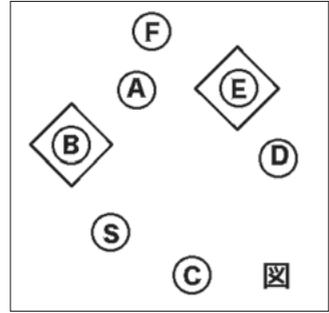
本稿では、まだワークショップが始まって数ヶ月時点のワークショップの映像を見ながら、佐久間新さんとたんぼぼの家のメンバー（施設利用者）の参加のあり方をみていく。またそれを通して、ワークショップへの参加、プログラムへの参加に留まらず、人と人が共通の行為に参加するという現象を見つめていけたらと思っている。

映像から記述を起こしていくにあたって、現象学という観察の態度を取り入れている。現象学についての詳しい言及はここでは避けるが、端的に説明するのであれば、「私」にとって起こった現象について真偽や価値の判断を控え、その現象の起こりを記述するというのがその特徴である。ここでも映像を見た際の私の印象が記述の手がかりになっている。また記述の方法として現象学を参照すると同時に、身体の現象学の先駆者であるメルロ＝ポンティやB.ヴァルデンフェルスらの身体性についての記述を理解の支えとした。

参加という問いをあつかうため、今回はワークショップが立ち上がり、全員の「参加」がはじまるその瞬間を事細かに見ていきたい。取り上げる映像は2011年9月のもので、講師のSさんとその回初めてワークショップに参加したAさんが中心に映っている。私たちも、この二人のやりとりを中心に追っていくことを通して、周りの人々の参加の在り方を探っていく。

映像はその日のワークショップ開始間もなくのもので、Sさんと初参加のAさんとスタッフDさん、すでに何度かワークショップに参加したことのあるBさん、Cさん、Eさんが車座になっている（図）。そしてFさんがその外側から映像を撮っている。また、Aさんは言葉を理解するが言葉を発することが出来ず、他人の動作を模倣して動くことを好んでいる

ようである。注目した場面では、講師のSさんがAさんの方を見ながら音の出る様々な動作をして、Aさんの反応を探っている。映像の大筋としては、座った状態でのSさんとAさんの一対一のやり取りの後、一対一の関係ではなく、全体で一緒に動くような場面が現れ始める、という流れがある。これらのことを頭に入れた上で映像を見てみよう。本稿では映像の代用として末尾に映像中での出来事を描き起こしたもの(表)を付しているので、そちらと照らし合わせながら読んでいただくと幸いである。



3. 地に沈んでいく踊り

最初の場面で、講師であるSさんは他の参加者一人一人の方を順番に向いて、10秒程度ずつやり取りを交わすが、Aさんの番になるとやや長めの30秒やり取りを交わす。その後Sさんは2分間ほどのあいだ、Aさんから長期的に目を外さずAさんとやりとりをする。またSさんは、Aさんからわずかに目を外したとしても、Aさんが動けばすかさずそちらに視線を戻す。

ここから見えてくることは、ワークショップの開始にあってSさんがすべての人と何らかのやり取りを交わそうとしているらしいこと、そしてそれが基本的には一対一の関係で行われていることである。また、初参加のAさんとは明らかにほかの参加者と比べて長い時間のやり取りが行われている。映像の撮り手がSさんとAさんのやり取りを中心に撮っているためでもあるが、映像からは明らかにAさんの存在がSさんの意識の大きな部分を占めるとわかる。

それゆえ、Sさんが自らAさんから視線を外す場面は注目に値する。映像中にはSさんがAさんから視線を外す場面が、周りの音に対する応答などを除けば二度ほど見受けられるが、それらの場面には共通の特徴がある。そこではSさんとAさんが、「唇で破裂音を出す」あるいは「投げキッス」という共通の行為を一緒に反復しているのだが、両者の行為のタイミングが合ってきて、一致したところで、SさんはAさんから視線を外す。

この瞬間のAさんは映像中でとてもいきいきと見える。Sさんは様々な方法でAさんに音を出させようとしているが、Aさんはここではじめてはっきりとした音を出した。AさんはSさんの真似を続けてきたが、ここでようやくAさんの行為がそのうちに意味を宿し始めたのだと言える。それまでの場面ではSさんの目線が自分の方を外れるや否やAさんは時計をいじりだしていたのだが、ここでは行為を止めない。それはAさん自らが行為の意味を獲得したからだ。

その後、Sさんが左右に揺れながら両隣の人（BさんとCさん）に交互に触れるという踊りを始めると、Aさんもまた両隣の人に交互に触り始める。映像中ここまでSさん以外とやり取りを交わしていなかったAさんが、自分の両隣の人をしっかりと見て触れている。ここではもはや単なる真似と言いだせない現象が起こっている。

「図と地」という人間の知覚構造からこの現象をとらえてみよう。図と地とはある意味のまとまりと、それを浮かび上がらせる背景のことである。人は知覚の地平の中で常にこの両者を保有しており、地と無関係に図が成立することはありえない。これをもとに考えると前半のSさんにとってAさんは常に意識の「図」であった。だが、共通の表現に身を浸していくことによって、Aさんの身体に対する何らかの了解が生まれ、SさんにとってAさんは「図」、つまり必ずしも注意してみる必要がないものになっていったと考えられる。

4. 雰囲気の中で

ここで二人の間に起こったこと自体も面白いが、それは別稿に譲るとして、ここではこの出来事を支えている「場」について考えたい。

これまでAさんを中心に描写を進めてきたが、この間他の参加者たちが何もしていないわけではない。最初にした通り、Sさんは初め、一人一人とやりとりを交わそうと試み、参加者の多くもそれに応じている。AさんがSさんの視線に応じて動いたり動かなかったりするのは、半ばはAさんの性質によるものだろうが、この文脈に則ってのことでもあるだろう。つまり、この場では参加者たちがSさんのもろもろの行為や関心を注視している。例えばBさんは新参者のAさんとSさんとのやりとりを注意深く見守っているし、一見何も見ていなさそうなEさんも、Sさんが自分の方を向いて何かするときにはほぼ確実にそれに応じている。Sさんはここでワークショップを立ち上げる人として存在しているが、それは役割だから仕事だからというのではなしに、周りの注目によってそういう存在として生まれるのである。と同時にSさんの方でもそれを受けて、参加者たちにただならぬ注意を払っている。SさんはAさんとやりとりを行っている間にも、物音や声があればすかさず応答している。

SさんとAさんはお互いの関係が地に浸透していくまで飽くことなく真似の関係を続けるが、それはこのゆっくりとしていながら緊迫感のある（と、私は感じる）、時間の流れ、場の雰囲気の中ではじめて起こっている。もし仮に、周りの参加者がSさんに注意を払わずに騒がしくしていたら、と考えると分かりやすい。参加者たちの動きに敏感なSさんはAさんとのやりとりに集中できなかったかもしれない。だとするとこの二人のやりとりは、Sさんそして新参者Aさんを気にかける参加者たちのまなざしと、参加者の状態を気にかけるSさんのまなざしの拮抗、それによって生まれる緩やかで緊張した雰囲気の中で生まれていると

いうことになる。

5. 促される踊り手

映像を一旦はなれて雰囲気についてももう少し考えてみたい。雰囲気とは基本的には意識や行為の具体的対象となるようなものではなく、意識の「地」になっている。だがその雰囲気の中で私たちは確実にある行為を「やりやすい」「やりにくい」「やりたい」などと感じている。私たちは雰囲気にもろもろの行為（しないということも含め）の判断を促されている。

促しということについて、現象学者ヴァルデンフェルスはメルロ＝ポンティの言葉を借りながら、それを事物（および身体）からの語りかけとして説明している¹⁾。すなわち、ドアは自らを開くように、階段は自らを上るように、私たちに語りかけているというのだ。語るというのは比喩的な言葉遣いだが、ヴァルデンフェルスの指摘するようにこれは単なる比喩にとどまることではない。階段がそのディテールによって自らを登りうるものとして呈示しているのでなければ、「階段は上り下りするものである」定義を知らない人は永遠に階段を登れないことになるが、事実はそのようではなくごく小さな子供ですら階段を上ろうと試みるのであり、階段の形状が私たちの上昇への興味を引き起こしているのである。そして促しとは決して事物からの一方的なものではなく、そこでは既に自分の潜在的行為可能性と事物の呈示する潜在性とのやりとりがはじまっている。階段の一段が扉ほどもあれば私たちはそれを階段や何か登るものとは思わないだろう。ほぼ無限に可能性が開かれている中である促しを受け取れるのは、私たちの身体が可能な諸行為をもって事物とやりとりをしているからに他ならない。その交渉の中で初めて「階段を上ろう」という欲求や目的がうまれるのだ。促しとは、単に行為のきっかけなのではなく、目的や欲求が形になるプロセスなのだ。

ダンスの中で促しがどう起こっているのか、先ほど参照した回のWSとは別の例を考えてみたい。ある日のWSでは、施設二階のテラスでダンスが行われた。テラスには外から二階に上がってくるためのスロープが続いている。テラスとスロープのどちらにもマットが敷かれ、それぞれで踊りが始まったが、その両者はしばらく交わらなかった。その日の振り返り記録にこうある。

テラスとスロープの間においてどちらで踊っている人に関わればいいのかかわからず、引き裂かれる思いだった。その後人がスロープを行き来するようになり、全体が一つの長い空間として感じられるようになった。(菊竹)²⁾

ここで起こったことはなんだろうか。スロープからの通路としての促しは全くなかったわけではない。しかしマットがスロープとテラスとで繋がっていなかったことや自力で歩けない人と一緒に踊っていたことが、通路としての促しと拮抗する促しになっていたかもしれない。ヴァルデンフェルスも述べている通り、促しはほぼ無限の「余剰」³⁾を持ち、一様に現れてくるわけではない。ある人が通路に促され往來を始めた。するとそれを見る人はそこに単に歩いている身体や歩くという意図を見るのではなく、その身体を動かした世界の促しを同時に見る。つまり、人の身体はそこにあるだけで、様々の促しを表現しているのである。この身体を通して、他者にとってはある促しが際立ってきたり、退いたりする。

ちょうど面白いことに、このときの筆者は、最初引き裂かれていた原因は「人」だと語りながら、変化した後についての語りでは「空間」について語っている。つまり、このときの筆者にとって、人が引き裂かれていることと空間として隔たりがあることはほぼ同じ意味を持っていたと考えられる。通路に促されて歩く人を見ると目は空間の縦の辺に沿った動きをするようになる。そうするとさらに向こうの人びとが目に入る。この目の動きが空間を通路に変え、人の距離を変えているのである。空間を通路として認識するということは単に通路という属性を発見するというのではなく、その人も「通路的」に促されているということである。

このように踊り手は促しへの応答を通じて、他者の促し全体の布置を転換し、新たな空間を提示する。他の踊り手、例えば先の例での筆者は、別に意識はしないだろうが、両側の踊り手たちがつながり一緒に踊れる雰囲気になったと感じ、動き出す。このように、雰囲気の変化が踊りにそのまま現れる。

雰囲気とはつまり、人々の行為の中で出来上がってくる促しとやりとりの布置の総体のようなものだと言っていいかもしれない。「雰囲気が悪い」と私たちがいうとき、それは決して客観的な物言いではない。そこには自分が居づらいという個人的な感情が含まれている。私たちは雰囲気をその場に漂っているものだと感じるが、同時にそれは私たちの気分でもある。先に見た通り、促しはすでに世界と自分との関係だった。だから雰囲気は、場のものとしても個人のものとしても感じられるのだろう。逆に考えると、個人が常々感じている感情や気分の中にも既に場との関係が働いているといえる⁴⁾。

6. 雰囲気でのコミュニケーション

雰囲気への考察を元にもう一度映像に立ち返ってみよう。Sさんは初めの頃、Aさんと様々なやりとりを行いながら、Aさんと一緒にできる行為を探っていた。そして同時に周りの人々も初参加のAさんの行為を見守っていた。先ほど見たとおり可能な諸行為の交渉が

促しだったことを考えると、ここにすでに促しあいが発生している。また、促しの「語りかけ」という比喩を思い出すのなら、それは目に入った瞬間にもう作動しているということであり、つまりSさんとAさんを「見ているだけ」とうつるBさんも、すでにやりとりをはじめている。促しの布置は刻一刻と変わっており、ある促しは図へある促しは地へと沈んでいく。先にもAさんがSさんとの真似関係を基盤に他の参加者と関係する場面を見たが、ここではAさんはSさんに促された身体の動きによって、新しい促しへ体が開かれたと言えるだろう。こうやって参加者たちはお互いの行為によって形作られた雰囲気や地を忍ばせていく。彼らはいつの間にか自分たちで作った大地の上に立っている。

人の何かが他者を動かすというこの現象は十分にコミュニケーションと呼べるものだが、それはメッセージを伝達するというモデルで語られるようなコミュニケーションではなく、雰囲気という共同の形成物を通じた緩やかな促しあいである。直接相手に関わらなくとも、自分のアクションによって促しの布置が変わり、雰囲気が変われば、既にその人の世界、人との関係は変わっているのだ。

7. 参加の産場

最後に、初めに立てた「参加」という問いに今までの話を関連付けてみよう。

映像を詳しく見て分かったことの一つは、一見「何もしていない」あるいは「見ているだけ」に見えた人々も、SさんとAさんのやりとりの土台となる雰囲気をつくっていた。それらのまなざしは、まなざしを無視せずにそれと拮抗しながら現れてくる図、二人の踊りによって、意味ある参加となっている。参加はこのように、個人の意思のみによってではなく、促しを受け取る他者によって起こるものでもある。そして促しを受け取ることは、頭で理解することではなく、身体的な潜在性とのやりとりが行われることなのだった。この受取るということを更に考えていくことで、単なる「何でもあり、何でも参加」ということとの違いを考えていけるだろう。

また、メッセージの伝達というモデルでは語れないコミュニケーションの在り方として、誰もが感じながら関与しづらいつつ雰囲気というものについて考えた。人々の身体は雰囲気を発し、それによって促し合っている。これはしゃべることが難しい人たちや体を動かして何か発信することが難しい人たちの居る福祉の現場で特に重要になってくることであるし、実際多くのケア従事者が無意識に雰囲気を通じたコミュニケーションを行っていると思われる⁵⁾。

さらに雰囲気や促しとは、それとの交渉のなかで初めて行為の目的や欲望が形作られるような、その源泉だったことも思い出しておきたい。踊りに親しんだことのない人たちは、初めからこのように動きたいという欲望を持っているわけもなく、それはあのワークショップの

場でその都度生まれてきているのだ。しかしそれは同時ににわかのものではなく、確かにその人の身体が持っていた可能性に根付いている。参加者各自の欲望や思いを尊重するのは当然なのだが、しかしその前に、欲望や思いを形にしていくための協働作業が必要なのである。

註

- 1) 『講義・身体現象学』 pp.402-405
- 2) 2014年7月の記録より。一部言葉遣いの変更、単語の統一をおこなった。
- 3) 前掲書 p.406
- 4) 私の研究は場に関するものだと自称してきたが、それは同時に感情や気分についての研究になるのかもしれない。
- 5) 例えば西村ユミの著作『交流する身体』

参考文献

- B. ヴァルデンフェルス (2004) 『講義・身体現象学』 知泉書館
西村ユミ (2007) 『交流する身体』 NHK 出版

[表] 「踊り出す場の記述」 使用映像のトランスクリプト

| 時間 | S | A | その他の人 |
|------|---|---|-------------------|
| 0:11 | Bの方に体を向けて「うん、うーん」 | カメラに映っていない。 | B「うーん」 |
| | Bとの間で「うん」を基調とした声のやり取り | | |
| 0:22 | S「うん！」 B「うへへへへへ」 | | |
| 0:25 | SそのままうんといいながらCの方へ顔・目線を向ける。顔を上げ「うーん」 | | |
| 0:30 | Eの方をしかめっ面に向かって、「うーん」 | | |
| | 「うーん」を繰り返す。 | | E、Sに続いて「うーん」 |
| 0:40 | 「うーん」のリズムが変則的に、あわせて首も変則的に動く。 | | |
| | Cの方をみて、Cの声のリズムをまねして声を出す | | |
| 0:46 | 息をゆっくり吐きながらAの方へ視線を定め、 | | |
| 0:47 | 「Aさーん」とささやき声で。その直後手を耳の横で動かす。 | | |
| 0:51 | Aに向かって「はー」と吐息をかける。 | | Bが一連のやりとりをながめている。 |
| 0:55 | 口に手をあて、Aに向かって「おーい」 | | |
| 0:58 | 引き続きAに向かって「ふー」「はー」 | カメラに映る。左手が口元にある。声や音は出ていない。 | |
| 1:03 | 両手を口に当て、拡声器のようにする。その状態で小さな声をAに向かって出す。 | Sに続いてすかさず左手を添える。力が入っている。 | |
| 1:04 | Aの方を向いたまま口の前で手を合わせて閉じたり、開いたりしながら、その動作にあわせて、手を開いたときに小さく声を出す。 | Sが二度目の動作に入ったあたりから手を開閉し始める。開閉の軸となる指が異なる。 | |
| 1:12 | 上体と視線をAの方に向けながら、そちらに向かっていきなり低い声で「はい」と言う（それまでは小さなささやき声）。その瞬間Cは口から手を離し、体を少し後ろに倒す。 | 瞬間Aは口から手を離し、体を少し後ろに倒す。 | |
| 1:14 | 再びAの方へ向き、同じように手の開閉をしながら高い声で呼びかける | | |
| 1:17 | S、手の開閉のリズムに緩急をつけて、開くのにあわせて「はい」というのを繰り返す。 | Sにつづいて手を開閉し始める。 | |
| 1:21 | Bが声を出したのを見てにやっと笑いながら一瞬そちらの方を向く | | B反応して声を出す。 |
| 1:24 | 手を開くときに、顔から離し、手を広げる。手を戻して閉じると、 | Sにつづいて両手を広げる。 | |
| 1:26 | 右手をおろし、左手だけで口を押さえる。その手の形のまま、腕をまっすぐAの方へのばしながら「おー」という。同じ動きを繰り返す。 | Aは両手を閉じたときの手を合わせた状態のまま、腕を曲げ伸ばし。 | |
| 1:31 | | Sの二回目の動作の途中で空中で片手に切り替える。 | |
| 1:32 | Aに続いて、ただしほぼ同時に腕を自らの後ろへまわす。 | のばした状態のその右腕を背中へ持っていきその手で頭をかく。やや下を向く。 | |
| | Cの方から声が出て、Sは声で応じながら、手を後ろにやった動作の流れでCの方を振り返る。 | | |
| 1:35 | S（おそらくAが手を口に当てている様子を見て）口の前で手を動かす。手を口に当てる瞬間にちらっとCの方をみる。 | Sがこちらを向いているときも下を向いたまま。 | |
| 1:36 | S、Cの方へ目線を戻しながら、手の動作を続ける。 | 腕時計に手を当てる。 | |
| 1:38 | | 時計を触りながらSとCの動作をちらっと身、また下をむく | |
| 1:41 | Cとともに手の平を口につけたり離したりする動作を繰り返す。それをやりながら、目線をA経由でBの方へ。 | Sの体の向きが変わると同時に、時計を触りながら顔を上げる。 | |
| 1:42 | | Sの方を向き自分のほほをべちべちとたたく。 | |
| 1:43 | すかさず手をほほにずらし、自分のほほをたたく動作。体をAの方へ乗り出し、首を突き出すような姿勢。 | 一瞬手を口に。 | |

| 時間 | S | A | その他の人 |
|------|---|---|--------------|
| | S、さらに身を乗り出す。 | ほほに手を戻したたく。 | |
| 1:46 | Bが「やーねえ」というと「や」のあたりでBの方を向き、口の前で手をばたつかせながら、こもった声で何か言う。 | | B「やーねえ」 |
| 1:47 | S乗り出していた体を引きながらAの方を向き一瞬動きを止め、 | | |
| 1:48 | 口を叩いていた左手をほほにずらし、ほほをたたく。 | たたく動作をしなが手を口に。再びほほに。 | |
| 1:50 | ほほをたたくのをやめる。 | たたくのをやめる。 | |
| | 反対の右手で反対のほほをたたく。 | Sに続いて手を入れ替えてほほをたたく。 | |
| 1:52 | ほほをたたきながら口を縦に開き、空洞音を鳴らす | | |
| | | 少し口を開くが空洞音にはならない。 | |
| 1:58 | 口をそのまま、右手も添えて両手で両ほほをたたく。 | Sに続いて、左手を添え、両手で両ほほをたたく。 | |
| | たたくリズムが次第に急になる。視線を左右に動かす。 | | |
| 2:06 | リズムが落ち着いてくる。しっかりたたく。 | | |
| | 顔のたたく位置を微妙に上下させながら音を変化させる。 | Sに続いてたたく位置を微妙に変化させている。 | |
| 2:13 | 口を開いたまま、両手でデコピンのようにしてほほをはじき、音を出す。 | デコピンのような動作を頬の横でしている。ただし親指と人差し指が十分には触れていない。 | |
| | デコピンを繰り返しながらたたく位置を、下は首まで上下し、音を変化させる。 | Sに続いて手の位置を上下。 | |
| 2:24 | 手の上下をやめ位置を固定し、今度は口の形を変化させながらデコピンを繰り返し、音を変化させる。 | 口がわずかに動いている。 | |
| 2:26 | 動作をやめ、手のひらでほほを二回たたく。 | Sに続いて頬を手のひらでたたく。Sが次の動作にいても続け、3回たたく。 | B、SとAを交互に見る。 |
| 2:27 | 右手をおろし、口を開ける。左手であけた口をボンボンと二回たたく。 | Sに続いて口を開け、手でたたく。 | |
| 2:28 | 手を下ろし、口を強く開閉して、唇でボンという音を繰り返し出す。 | 先ほどの手の動作を続けていたが次第に手の動きが弱まり、 | |
| 2:30 | | 口を開閉する。音は出ない。 | |
| | 素早く連続で開閉していたが、舌をなめてから二度ゆっくり行い、しっかりした破裂音を出す。 | Sに続いてゆっくり口を動かすと、破裂音が出る。 | |
| 2:35 | 繰り返していくうちにテンポが速くなる | | |
| 2:38 | | 口で音を出しながら頭の横を両手でかく。 | |
| | 目を丸くして少し身を引いた後、その反動を使って前に体を勢いよく乗り出して、口唇で破裂音を出す。 | 音が強くなる。破裂音をつづける。 | |
| | しっかりためて、目を見開くと同時に破裂音を出す。 | | |
| | 両者のが合ってくる。タイミングがあったまま3回繰り返す。 | | |
| 2:42 | そのまま破裂音を繰り返しながらCの方を向く。 | 下を向き時計を触る。口の開閉、破裂音が続いている。目線をおろしてから数度はSとタイミングが合っている。 | |
| | Cの方を向いて破裂音が続ける。チラッと目線をあげたり戻したりする。 | チラッと目線をあげたり戻したりする。破裂音は弱まるが続く。 | |
| 2:49 | 口で音を出し続けながら再びAを見る。 | | |
| | | 口の音に再び勢いがつく。手は時計に当てられたまま | |

| 時間 | S | A | その他の人 |
|------|---|--|---------|
| 2:55 | 口を開き音を出すタイミングでBを見る。 | 一瞬視線が下がるがすぐにあげる。 | |
| 2:56 | Bの方へ体を傾けて「パッ」、 | | |
| | 反対に身を引いてもう一度。 | 時計に手をあてたまま口で破裂音。 | |
| 2:59 | S、Aの方を見る。SもAも口の開閉を続けているが、どちらからともなく次第に間隔が短くなり、音も弱まっていく。 | | |
| 3:03 | | 視線を落とし、ずっと触っていた時計のボタンを押す。「ピッ、ピッピッ」と鳴る。 | |
| 3:04 | S、Aの方へ上半身を傾けながら自らの左手首を右手で触り、Aの時計を押す動作と同じような動きをして、口の破裂音で時計のリズムと同じリズムの音を出す。 | わずかに口をうごかしている。 | |
| 3:08 | 口の破裂音を続けながら、Eの方へ体向ける。 | 体を後ろに倒し、そのまま体育座り。 | |
| 3:10 | Eの方を見てせき。 | 体をまるめる。 | |
| 3:11 | そのままの身体の向きでうなり声をあげながら上半身をEの方向へ傾けたり引いたりする。 | | |
| 3:15 | 体を起こす。しかめ面でうなり声を出しながらAの方を向く。 | わずかに起きる | |
| 3:17 | Aに向かって一度「うーん」。視線をEやBへ向けながら再び「うーん」。 | | |
| 3:22 | 上体を起こしながらAを見つめて息を吸い、「ほー」 | | |
| 3:24 | 体を乗り出して頭を傾けた姿勢でもう一度「ほー」 | | |
| | Aをじっと見ながら小さな低い声を繰り返す。声に合わせて首の運動をしている。 | 首をわずかに動かしている。 | |
| 3:38 | 視線をCの方へ向け、同じように声を出す。 | | |
| 3:40 | 口をぱっと開き、吐息をもらす。 | Sと同じタイミングで口をひらく。 | |
| | 色々なリズムで吐息を繰り返す。首・視線は様々な方向へ。 | 首をうごかす。 | |
| 3:58 | Cの方を向いていたが視線がCからはずれ、Sは吐息を吐きながらAの方を向き、手を挙げる。 | | |
| | | 息を吐きながら体を倒し手を組み体育座り。 | Cが声を出す。 |
| 4:00 | S、Aがやっているのと同じように手を口に当てると、同時にCを見る。 | | |
| 4:02 | Cと一緒に声を出しながら、Cから視線を外す。 | | |
| 4:04 | 一瞬だけAの方を見る。 | 体を起こし、口に手を当てる。 | |
| | | 口に当てる手の左右を入れ替え、 | |
| | Cを見て、 | | |
| 4:05 | 再びはっとしたようにAを見る。 | 口の前で手を動かす。 | |
| | S、「たたたた」と声でリズムを刻みながら、手を口の前でバタつかせる。その動作をしながらCの方へ上半身を傾け、つぎにAの方へ体を傾ける。 | | |
| 4:13 | 基本的には同じ動作を行いながら、口の形、手の動きを少しずつ変化させて音を変化させる。顔の向きCとAの間を往復。Cは手をうごかす。 | | |
| 4:14 | 視線をAに固定し、手の平を上に向けて口の下に手を当てる。Aに向かってゆっくり息を吹きかける。 | 頬を搔いた後、Sと同じように手を上に向けて口の下に当てる。 | |
| | 同じ動作を繰り返すうちに、手首が上下動し始める。 | | |

| 時間 | S | A | その他の人 |
|------|--|------------------------------------|---|
| 4:18 | 手のひらが口について音が出る。投げキッスのようになる。繰り返す。 | 同じように手首を口の下に固定したまま手のひらを上下動するが音は出ず。 | |
| 4:20 | | 二度目の動作で音が出る。繰り返す。 | |
| 4:24 | | 投げキッスのためのところで首をわずかにあげるようになる。 | |
| | 二人の投げキッスのタイミングが合ってくる。 | | |
| 4:30 | そのまま繰り返しながら、Bの方へ体向け投げキッス。 | 繰り返す。 | |
| 4:34 | きょろきょろしながら繰り返していた投げキッスのペースをゆるめ、 | | |
| 4:37 | 手を下ろして「ほー」と言う。 | | |
| 4:40 | | 何度か投げキッスを続けたあと、手を下ろし、手を組む。 | |
| 4:42 | CとAを交互にみながら「ばあ」。続いてあくびのような声と仕草。上半身を前後に傾けながら腕を曲げ伸ばし。 | | |
| 4:49 | | | Eの首が動く |
| 5:02 | あくびのような動作をつづけながら「ああ」。 | 上半身を前後に傾ける。 | |
| 5:07 | | 腕を上には伸ばす。 | |
| | 動きを大きくしつつ反復。 | | Aも手の動きをする。 Sの動きにあわせてBの首上下(みている?) |
| 5:28 | 首を横に振る。 | | 左記Sの動作と同時にEの首があがる |
| 5:30 | Aのまねのような仕草と声をしているとEと顔が向かい合う。 | | |
| 5:32 | Eを下から覗き込むようにしながら、「あー」という。徐々に口の開きと声を大きくしていく。 | | |
| 5:42 | | | EはSの声に続いて口を開き、「あー、あー」という声を連続で出す。首にも動きがある。 |
| 5:52 | せき。せきのあと「あー」を再開。 | | |
| 5:57 | | 後ろに手をついて体を倒す。 | |
| 6:01 | | 首にわずかな動き | |
| | S、首の動きを激しくしながら次第にEの方から視線を外し、 | | |
| 6:09 | 上半身を前後に揺らし、Aの方を向きながら「あー」。 | お尻を搔く。 | B、Cの方を見る。 Eのとりわけ大きい「アー」 |
| | 上体の前後運動を大きくする。声は大きくはなるも非常にゆっくり、のびのびしていく。 | | Eの声弱まっていく。 |
| 6:34 | Eの声がなくなると、「ほー(裏声)、ほー(地声)」と非常にゆっくり言いつつ、声と首をAの方へふり向ける。 | | Eの声、聞こえなくなる。 |
| 7:00 | 同じような声を今度は上半身を前に傾けてAの方へ向ける。 | | |
| | ささやき。 | | |
| 7:09 | 唐突に両手をあわせるようにパンと叩く。繰り返す。 | | |
| | | 両手をあわせるようにたたく。繰り返す。 | A、D、両手をあわせるようにたたく。繰り返す。 |
| 7:16 | 手を裏返し、手の甲同士を打ちあわせる。 | | |
| | | 手の甲同士を打ちあわせる。 | A、D、手の甲同士を打ち合わせる。 |
| 7:27 | 手を打つのをやめる。Sは左隣のBの手に触れる。 | | A動作をやめ手を口に当てる。Dもやめる。 |

| 時間 | S | A | その他の人 |
|------|---|--|--|
| | 左隣のBの方へ体を傾け手を伸ばし、Bの右手に触れる。 | 手を打つのをやめ、右隣にいるBの方へ手を伸ばし、Bの左手に触れる。 | |
| 7:33 | 体を反対に傾け、右隣のAの方へ手を伸ばす。Bの手からは離れる。 | | CはSが手を伸ばしているのを見るとすっと手を出す。 |
| | 右手とCの左手でタッチ。 | | Sの右手とタッチ。 |
| 7:35 | そのまま揺れるようにしてAから離れ再びBの方へ体を傾け、触れる。 | | Cは離れた手を自分の口に当てる。 |
| 7:39 | 再びCの方へ。 | それまで触れていたBと反対隣のEに手を伸ばし、車いすに触れる。Bには触れたまま。 | D、それまで触れていたEとは反対隣のCの方へ、Eには触れたまま手を伸ばすが、Cには届かない。 |
| 7:42 | 隣の二人からは手を離し、膝立ちで正面のEに近づき触れにいく。Eの左膝に触れる。 | | それまでEに触れていたDがすっと身を引く。 |
| | | Eの右膝（Sが触っていない方）に触れる。 | |

演劇鑑賞者の地方劇場に対する価値評価

— 「鳥の劇場」 来場者に対する仮想評価法を用いた定量的調査 —

鈴木星良 (大阪大学大学院国際公共政策研究科 (院生))

蓮行 (大阪大学コミュニケーションデザイン・センター : CSCD)

木ノ下智恵子 (大阪大学CSCD)

Why Do People Come to the Regional Theater? :

Calculating the Value of Theater Using CVM at "Bird Theater" in Tottori

Seira Suzuki (Osaka School of International Public Policy (Graduate Student))

Ren Gyou (Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University)

Chieko Kinoshita (CSCD, Osaka University)

仮想評価法 (CVM : Contingent Valuation Method) を劇場という公共財に用いて市場価値ではとらえきれない非市場価値を含めた価値評価を行う事例は日本でも数件すでに着手され、利用しなくても劇場の存在そのものが評価され、公的資金が用いられることの妥当性が指摘されてきた。そうした背景をもとにこれまでの劇場の価値評価は劇場が存立する地域住民を対象に行われてきたが、対象となる劇場の直接的な恩恵を受ける人々は来場者である。本稿では鳥取県鳥取市にある「鳥の劇場」を対象とした仮想評価法を用いたアンケート調査を実施し、劇場来場者にとって劇場の評価額を高める要因を検討すると同時に仮想状況下での劇場の価値評価を行った。結果として、劇場の評価には来場回数、上演される内容に対する支払意志額、美学的価値のある作品の提供といった上演内容に対する項目が強く影響を及ぼしていることがわかった。

Contingent Valuation Method (CVM) has been used to evaluate public goods by means of conversing people's willingness to pay to price. In order to indicate that theaters are public goods, some researchers conducted the questionnaire survey for a large number of citizens living in the same district as the particular evaluating theater. The uniqueness of this paper is setting the target people as those who actually come to the theater. As a result, it is shown that people are eager to come to the theater far from the district and what kind of creation is performed in the theater is their main interesting.

キーワード

劇場の価値評価、支払意志額、区間回帰分析

Theater Evaluation, Willingness to Pay, Interval Regression Analysis

1. はじめに

コミュニケーションの場は多岐に渡る。平田オリザ (2013) は、劇場はこれまで西洋の広場が果たしてきたような役割の一端を担うことになる」と記している。広場が果たしてきた役

割とは、人々の出会いの場としてネットワーク形成を促進することで、訪れる人々が学校や職場とは異なるコミュニティスペースを確立することである。確かに、各地に点在する劇場には人が集い、交流が生まれ、管理が行き届いた環境である。こうした「場」を評価することが、人々の認識に更なる広がりを見せるだろう。

これまで環境や芸術、劇場といった公共財¹⁾といわれる価値を定量的には表すことには困難が伴った。そうした中、貨幣換算して金額で評価する手法として仮想評価法が有効的に用いられるという考え方が環境経済学の分野で発展して以来、文化経済学でも芸術作品や公共劇場に対して仮想評価法を用いた調査が行われてきた。多岐にわたる調査により劇場の存在する地域に住む人々が、例え利用しなくてもその価値を重視しているというデータが示されてきた。では果たして劇場に訪れる人々は、一体何を求めて劇場に足を運ぶのか。本稿は統計学的なアプローチから劇場が持つ価値を評価することで、今後の劇場の更なる発展に寄与するものである。

2. 先行研究

仮想評価法の手法は、環境を評価するための一つの手法として発達した。周辺住民に対して、アンケート調査を行い、環境改善や生態系の保持のために支払ってもよいと考える価格を支払意志額（WTP：willingness to pay）として算出する。同時に、環境に対する意識調査を行うことで、各項目に対する人々の評価を金額換算する。そうすることで、定量的に環境の価値を提示することが出来る。

2005年以降、垣内（2012）や奥山ら（2007）が仮想評価法を劇場に応用し、その評価を進めた。具体的には、新潟市民芸術文化会館や兵庫県立芸術文化センターといった公立劇場がもつ非利用価値²⁾の存在が指摘されてきた。また、五島（2014）は必ずしも公立劇場に焦点を充てるのではなく、コミュニティ形成や地域活性に影響を与える地域劇場、「鳥の劇場」を研究対象として調査を続けている。鳥の劇場や鳥の劇場が設立されている鹿野町に対する研究を通して、「サイレントパトロン」として実際に足を運ばなくとも劇場や文化施設が地域に必要なと考え、非利用価値を認める市民の存在を指摘するなど、価値測定の重要性を示している。

本稿では非利用者の評価も重視しながら、労力をかけて劇場に赴く来場者にはその動機となるような特有の価値評価基準があるものと考えている。つまり、対象となる劇場の価値を評価するためには、対象劇場がある地域に居を構える人々だけでなく、時間や労力などの費用をかけて来場する人々を考慮に入れなければならない。そこで、来場者を調査対象に据え、その価値評価に影響を及ぼす要因を検討する。特に、仮想評価法を用いたアンケート調査に対

して区間回帰分析を用いてその評価額に影響を及ぼす観点を分析する点に特徴がある。

3. データ

本稿で用いるデータは2014年12月24日（水）～12月28日（日）に鳥取県鳥取市内に設立された鳥の劇場で行ったアンケート調査に基づく。鳥の劇場は、廃校となった小学校と幼稚園を改築して「特定非営利活動（NPO）法人、鳥の劇場」が運営する劇場である。鳥の劇場には独自の劇団を保有するという特徴があり、劇団メンバーが創作活動や小学校や障がい者施設へのアウトリーチのみならず、劇場運営に尽力している。主宰である中島諒人を中心に、貸館事業ではなく、自主制作に重点を置いた事業に従事し、地域に密着する劇場を作り上げている。

アンケート調査は、鳥の劇場によって企画および上演された「くるみ割り人形とねずみの王様」の公演期間中に行われ、来場者184人から回答を得る。来場者は鳥取市民のみならず、近畿圏更には東京からの来場者も見られる。アンケート回収率は50%であり、そのうち有効回答数は103である（図表1）。アンケート用紙は、劇場が用意する他のチラシなどとともに高校生以上の来場者に手渡す。調査は観劇後のアフタートーク内でアンケート回答の時間を設け、調査趣旨などを説明しながら随時質問を受け付けつつ行う。

質問項目には回答者の性別や職業など属性を尋ねる設問に加え、上演作品に対する支払意志額、劇場に対して抱く価値評価項目、仮想状況下における劇場に対する支払意志額を問う設問などを含めた約20問の質問用紙を用いる。劇場に対する支払意志額を問う質問方式としては、多段階二肢選択方式を採用する。多段階二肢選択方式とは、質問票で提示した金額を支払ってもよいかどうか、「はい」または「いいえ」の選択肢から3回以上にわたり回答者に選択してもらう方式である。今回は劇場の管理運営費および維持費のために年間負担金を支払うという仮想設定の下、1,000円、5,000円、10,000円の各負担金額を許容できるか尋ねる。

4. 分析方法と結果

ここでは、まず上記の調査によって得られたデータを用いて分析する手法と用いた変数を提示する。分析手法としては、質問項目の利点を生かし、劇場を評価する項目と支払意志額の対応を考え最適な手法を選択する。そうした分析によって得られた結果をしめす。

図表1 記述統計量

| 変数 | 観測数 | 平均（ダミー変数は1となる確率） | 標準偏差 | 最小値 | 最大値 |
|------------------------------|-----|------------------|---------|------|------|
| 性別ダミー（男性=1、女性=0） | 103 | 28.16% | | | |
| 居住地ダミー（鳥取市=1、鳥取市以外=0） | 103 | 64.08% | | | |
| 年齢 | 103 | 39.42 | 13.20 | 20 | 70 |
| 20代 | 14 | 13.59% | | | |
| 30代 | 29 | 28.16% | | | |
| 40代 | 25 | 24.27% | | | |
| 50代 | 24 | 23.30% | | | |
| 60代 | 6 | 5.83% | | | |
| 70代 | 5 | 4.85% | | | |
| 職業 | 103 | 4.49 | 3.04 | 1 | 10 |
| 公務員/団体職員 | 24 | 23.30% | | | |
| 会社員 | 20 | 19.42% | | | |
| 会社/団体役員 | 4 | 3.88% | | | |
| 自営業 | 9 | 8.74% | | | |
| 農林漁業 | 1 | 0.97% | | | |
| パート/アルバイト | 7 | 6.80% | | | |
| 専業主婦/主夫 | 15 | 14.56% | | | |
| 学生 | 14 | 13.59% | | | |
| 無職 | 4 | 3.88% | | | |
| その他職業 | 5 | 4.85% | | | |
| 移動時間（分） | 103 | 51.85 | 60.64 | 2 | 360 |
| 来場回数 | 103 | 2.36 | 1.08 | 1 | 4 |
| 支援の有無ダミー （サポーター=1、それ以外=0） | 103 | 20.39% | | | |
| 幸福度（鑑賞前） | 103 | 5.84 | 1.7 | 3 | 310 |
| 幸福度（鑑賞後） | 103 | 8.45 | 1.34 | 5 | 10 |
| 幸福度（鑑賞前後の差） | 103 | 2.60 | 1.77 | 0 | 7 |
| 支払意志額（鑑賞前） | 103 | 2378.64 | 867.34 | 1000 | 5000 |
| 支払意志額（鑑賞後） | 103 | 3098.06 | 1107.19 | 1500 | 7000 |
| 支払意志額（鑑賞前後の差） | 103 | 719.42 | 827.95 | 0 | 4000 |
| 美術的価値のある作品を提供 （1～5段階評価） | 103 | 4.41 | 0.60 | 3 | 5 |
| コミュニティ形成としての役割 （1～5段階評価） | 103 | 4.52 | 0.61 | 2 | 5 |
| 独自性に対する評価（1～5段階評価） | 103 | 4.57 | 0.57 | 3 | 5 |
| 建築物としての価値の評価（1～5段階評価） | 103 | 3.93 | 0.93 | 1 | 5 |
| 地域の誇りとしての存在（1～5段階評価） | 103 | 4.71 | 0.50 | 3 | 5 |
| CVM：1000円の支払意志額 | 103 | 82.52% | | | |
| CVM：5000円の支払意志額 | 103 | 38.83% | | | |
| CVM：10000円の支払意志額 | 103 | 14.56% | | | |

4.1 分析方法と使用する変数

まず、鳥の劇場の価値を貨幣換算するために、以下のモデルで区間回帰分析の手法を用いて推定した。

$$Y_{ij} = \alpha_i + \beta_i X_{ij} + u_i$$

Y_{ij} は劇場に対する支払意志額であるが、特定の1点を指すのではなく、 $[Y_{1i}, Y_{2i}]$ の区間にあることがわかっている。仮想的な金額を用いた理由としては、回答者の所得による差異や価値水準を調整するためである。 α_i は固定値であり、 X_{ij} は説明変数、 u_i は誤差項を表す。

説明変数には、日付、性別（男性ダミー）、年齢（20代から70代までの多項選択）、居住地（鳥取市ダミー）、職業（多項選択）、来場回数（「1. 初めて」「2. 2-5回」「3. 6-10回」「4. 11回以上」の多項選択）、支援の有無（サポーターダミー）、鑑賞後の幸福度（10段階評価）、鑑賞前後での幸福度の変化、上演作品に対する鑑賞後の支払意志額（自由記述）、上演作品に対する鑑賞前後の支払意志額の変化、来場時間、および劇場の価値として考えられる5つの項目を含めた。

劇場の価値として考えられる5つの項目とは、美術的価値のある作品を提供している、コミュニティ形成としての役割を果たしている、劇場に独自性が見られる、建築物として価値がある、地域の誇りとして存在する、という項目でそれぞれ「1. 全くそう思わない」「2. そう思わない」「3. どちらでもない」「4. そう思う」「5. 非常にそう思う」の5段階評価で回答を得た。

4.1 推定結果

まず、上記のすべての変数を用いて支払意志額を分析した結果を示す。（図表2）。その結果、性別、来場回数（11回以上）、上演作品に対する鑑賞後の支払意志額、美術的価値のある作品を提供している（5段階評価）という4つの項目において有意水準5%で、来場回数（6-10回）に関しては有意水準1%で有意な値を得られた。また、含めた説明変数そのものの妥当性を検定するため、カイ二乗検定を行った（図表3）。その結果、性別および来場回数に関しては、有意水準5%で推定式に含めた時に妥当性があることがわかった。

性別に関しては、男性の方が女性よりも1,797円高く支払う意志があることを示し、来場回数に関しては、初回の来場者と比べて6-10回目の人々は2,532円高く、11回以上来場している人に関しては2,207円高く支払う意志がある事がわかった。上演作品に対する支払意志額が上がると、劇場に対する評価額も776円上がるという結果を得られた。美術的価値のある作品を提供しているという項目に関しては評価が1つ上がると1,266円高くなる結果を得られた。

図表2 区間回帰分析結果

| 変数 | 区間回帰分析 |
|-----------------------------------|---------------------|
| 日付 | 381.2 (305.9) |
| 性別 (男性 = 1、女性 = 0) | 1,797** (819.5) |
| 年齢：30代 | -1,537 (2,174) |
| 年齢：40代 | -1,600 (2,232) |
| 年齢：50代 | -1,540 (2,264) |
| 年齢：60代 | -4,499* (2,684) |
| 年齢：70代 | -1,541 (2,754) |
| 居住地 (鳥取市 = 1、鳥取市以外 = 0) | 1,118 (913.8) |
| 職業：会社員 | -2,109 (1,601) |
| 職業：会社/団体役員 | -2,164* (1,139) |
| 職業：自営業 | -4,071 (3,152) |
| 職業：農林漁業 | 1,988 (1,321) |
| 職業：パート/アルバイト | 644.9 (969.4) |
| 職業：専業主婦/主夫 | -288.8 (2,088) |
| 職業：学生 | 2,176 (2,007) |
| 職業：無職 | -1,472 (1,376) |
| 職業：その他職業 | 975.0 (703.2) |
| 来場回数：2-5回 | 635.6 (797.9) |
| 来場回数：6-10回 | 2,532*** (909.5) |
| 来場回数：11回以上 | 2,207** (1,063) |
| 支援の有無 (サポーター = 1、サポーターでない = 0) | 586.8 (964.4) |
| 幸福度 (鑑賞後) | 109.9 (287.7) |
| 幸福度 (鑑賞前後の差) | 124.9 (200.4) |

| | |
|-------------------|-----------------------|
| 支払意志額（鑑賞後）（千円） | 775.6** (339.8) |
| 支払意志額（鑑賞前後の差）（千円） | 241.6 (490.8) |
| 移動時間 | 2.363 (6.165) |
| 美術的価値のある作品を提供 | 1,266** (575.8) |
| コミュニティ形成としての役割 | -509.1 (578.5) |
| 独自性に対する評価 | 421.0 (552.0) |
| 建築物としての価値 | -35.79 (384.8) |
| 地域の誇りとしての存在 | 470.4 (716.2) |
| 固定値 | -475.236 (374,392) |
| 観測数 | 103 |

注：1) ***, **, *は、それぞれ 1%, 5%, 10%水準で有意であることを示す。

図表3 各変数の有効性

| 変数名 | 自由度 | カイ二乗値 | P値 |
|--------------|-----|-------|--------|
| 性別 | 1 | 4.81 | 0.0283 |
| 年齢 | 5 | 5.37 | 0.3721 |
| 鳥取市民（ダミー変数） | 1 | 1.92 | 0.1656 |
| 職業 | 9 | 16.41 | 0.0588 |
| 来場回数 | 3 | 10.36 | 0.0158 |
| 支援の有無（ダミー変数） | 1 | 0.37 | 0.5429 |

5. おわりに

得られた結果から、劇場の支払意志額に有意な正の影響を与える項目は、性別、来場回数と上演内容にかかわる項目であることがわかる。所得が比較的高くなる男性の支払意志額が高くなること、および6回以上という一定回数以上来場する人々がその便益を享受する劇場の維持に高い支払意志額で評価することは想像に容易い。さらに、劇場の価値判断を行う際には、その影響は上演内容と切り離すことが出来ないことも伺える。想定はされるものの、劇場来場者とその劇場によって上演される内容に何らかの影響を受け価値を見出し、劇場の

活動を維持しようという意識が働くようになることが確固たるデータとして示されたことが、この研究の貢献である。

ただし、本研究対象は鳥の劇場一か所であることと、サンプル数が103と比較的小さいことから、一般性の確保には不十分な点は見受けられる。また劇場に影響を及ぼす項目に教育的価値といった別の観点を含めることで結果に影響を及ぼす可能性はあることは考慮しなければならない。先行研究で示されているように劇場には非利用価値が確かにあり、その場を利用しなくとも存在によってその便益を認識する人々の存在は劇場の更なる発展に不可欠である。

上記を踏まえながらも、劇場の価値評価の際には、そこで行われる上演作品のもつ影響力が強く働いており、来場しないことにはわからない利用価値の存在は大きいことは明示された。今後の研究として、より精度の高いアンケート調査を行っていくと同時に、上演作品によって具体的に一体どのような影響をもたらされるのか、という観点を明らかにしていきたい。

謝辞

本稿を纏めるにあたり、NPO法人鳥の劇場主宰の中島諒氏と職員の方々、およびアンケートに回答いただいた来場者から多大なるご協力を得た。また、質問紙調査の設計や分析に関しては、大阪大学大学院国際公共政策研究科松繁寿和教授からの助言が反映されている。さらに、本稿は2015年7月の文化経済学会での報告をもとに改編したものであり、当該学会では非常に有益なコメントを頂いた。ここに記し、心より感謝申し上げる。

註

- 1) 経済学において公共財には「非排除性」と「非競争性」の二つの特徴がある。
 - ・非競争性：同じ財やサービスを複数の消費者が同時に消費できること。例えば、映画鑑賞や灯台の光など、誰かが消費する状況下においても別の誰かが追加の費用をかけずに同じ量を同時に消費することができる財やサービスを指す。
 - ・非排除性：財やサービスの恩恵を受けながらも、その対価を支払っていない消費者を排除できないこと。例えば公園や空気など、公園の利用者が必ずしもその維持費を払っていなかったとしても、その利用を妨げることは出来ないような財やサービスを指す。
- 2) 非利用価値とは、実際に劇場に来場するなど直接的に利用していなくとも、評価される価値である。非利用価値としては、「存在価値」（文化施設が存在するという事から生じる価値）「オプション価値」（現在利用しなくとも将来的に利用する可能性があるという動機から生じる価値）「代位価値」（同世代の他者が利用しているという認識から生じる価値）「遺贈価値」（将来世代が文化施設を利用することから生じる価値）「威光価値」（文化施設

が存在することが市民にとっての誇りになるという威信から生じる価値)「教育的価値」(社会の創造性や文化的評価能力を高め、社会が得られる便益として認知される価値)などが考えられる(垣内、2012)。

参考文献

- 奥山忠裕・垣内恵美子・氏家清和(2007)「文化施設の社会的便益評価—りゅーとぴあ(新潟市民芸術文化会館)を事例として—」『日本都市計画学会論文集』42(2)30-41.
- 垣内恵美子(2012)『チケットを売り切る劇場』水曜社.
- 垣内恵美子・奥山忠裕(2011)「公立劇場を対象とした県民の便益評価に基づく地域文化政策の考察—兵庫県立芸術文化センターの事例—」『計画行政』34(3)90-98.
- 五島朋子(2014)「地域における劇場受容に関する考察」『地域学論集』11(2)89-107.
- 平田オリザ(2013)、『新しい広場をつくる—市民芸術概論綱要』岩波書店.
- Throsby, David and Zednik, Anita (2014), 'The Economic and Cultural Value of Paintings: Some Empirical Evidence', Handbook of the Economics of Art and Culture, 2 (4), 81-109.

サウンド・オブ・ミュージックという名前の授業について彼らはこう語った

本間直樹（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）

久保田テツ（大阪大学CSCD）

A Dialogue on a Seminar named “Sound of Music”

Naoki Homma (Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University)

Tetsu Kubota (CSCD, Osaka University)

はじめに

以下は、4年間にわたりコミュニケーションデザイン・センターにて実施された実験的な授業について、担当した本間と久保田が対話をおこない、その内容をもとに対話篇として全面的に書き直したものです。あえて口語的な表現をそのまま使用している部分も多くあります。読まれるさいには、目で読むのではなく、ぜひ声を聴くように読んで、サウンド・オブ・ダイアログをお楽しみください。

ジュリー・アンドリュースに憧れて？

H 「サウンド・オブ・ミュージック」という授業は、5日間かけて〈音〉を素材にして集団で創作するという内容で、2012年からCSCDではじめて、今年で4年目を迎えましたね。

K このタイトルの由来ってやっぱりあのミュージカル映画なんですよ？

H そうなんです。ジュリー・アンドリュースが音楽のない厳格な家庭にやってきてみんなを変えていくミュージカルで、こどものころから大好きなんですけど、音楽学はあっても音楽はない大阪大学であたらしく授業をはじめるとにピッタリだと思ったんですね。もちろんミュージカルをやるわけじゃありませんし、ドレミもいっさい使いません。でもこのタイトルには「サウンド」ということばが含まれていて、それがこの授業の根幹をなすんです。オンガクよりもオトが大事なんです。授業のさいごでは、それぞれグループで練られた作品が発表されるのですが、それはいわゆる「音楽」ではなくて、あくまで「音」を素材にした共同作品。ダンスや演劇的要素が織り交ぜられることもあるし、屋外で上演されるときもあります。

授業の基本的な方法や流れは、わたし、本間が考えたんですが、久保田さんは同じ授業者としてこの授業をどんな風を楽しんでいますか？

K ぼくにとって、この授業はコミュニケーションデザイン・センターというものを体現しているというか、「ザ・CSCDの授業」っていう位置づけなんです。音楽っていうか、音を出すという経験って、考えるという以前に生理的なものとしてよくとらえられがちなんですけど、その生理的なものっていうのが、何によって組み立てられているのかっていうのがすごくよくわかる授業なんです。

それがやっぱり、いままさに世に出回っているようなもの、例えば、ある特定の聴き手を想定しているものだったり、メディア化されたものだったり、よく売れているものだったり、なんかそういうものでしか、組み立てられないのではなかろうか、という気がするんです。

H 感性の出どころが、偏っているということですか。

K そうですね。だから、「考えろ」ではなく、「音楽やってみろ」といわれて出て来るのは、結局メディアを通して与えられたものになる。たとえば、小学生に「環境問題について番組を作ろう」って言って、子供たちに取材させると、必ずなんか、テレビのリポーターみたいなことをいうんですよ、「今日はなににににきました、どうですか」っていう。それがたぶん子供たちの、映像の体験なんです。「自分たちが映像を作るとしたら、こういうもんだ」っていう、ある種の規定の枠の中からでしか、出てきづらいっていうものがある。やっぱりそれは、大学生になっても、そんなに変わらへんのかなって気がするんです。なんか音楽はとくに、そういうテレビ番組を作る以上にもっとこう、感覚的で生理的なものであるにもかかわらず、こうなっているっていうのがすごくよくわかる。

H 授業の最初には、「サウンド」と「ミュージック」をいったん切り離し、いままで「ミュージック」と思っていることは脇において、まずはサウンドに着目しましょう、とガイドラインを示してはいるんですけどね。

K 音楽ときいてひとが思いつくのは、映画音楽とか、どっかで聞いたことのある、喫茶店とかでも流れてる耳ざわりのいい音楽、それは西洋音楽とか、コード化された、音階、みたいなもので構成された音楽ですよ。でもこの授業は毎回、そういうのになるべくとらわれないようにしてもらうために、「サウンドスケープ」って、教室から出て歩き回りながらキャンパスの音をきいたり、自分たちで、音そのもので、なにか音楽らしきものを構成するっていうことを、一応準備体操としてはやっている。にもかかわらず、さあ音楽って、野放しに

した瞬間、既成の音楽に縛られてしまう。そうなることは、それ自体は悪くないと思うんですけども、でもそうじゃない音楽のとらえ方とか、そうじゃない音の楽しみ方っていうのもあって、それを理解してほしい。この授業ではつねに個人ではなくてアンサンブルさせるじゃないですか。それはたぶん、音そのものを自分たちで解釈し、それらを交換して組み立てる、っていうのがこの授業のあり方やと思うです。そこにふれる授業っていうのはすごく重要で、これまでつちかってきた価値観を壊すとか、既成のものをいったん疑うみたいな…

H たしかに、いまどきの学生をみていると、みんなわりと協調タイプで、他人のことをうまいこと邪魔しないっていうか、譲り合っていて、アンサンブルとしてはききやすいんですけども、でもそうすると誰のものでもないもので終わってしまう。やっぱり、もうちょっとぶつかりあってもいいかなって思うし、ほんとはあんたら一致してないでしょ、感性のぶつかり合いから逃げないでほしいと思いますね。

K そのぶつかり合いって、要は、「おれはおまえらとちょっと音楽のとらえ方がちがうんだぜ」っていうわかりやすい見栄やったり、「なんか自分はほかの人とはちがう」みたいなすごくわかりやすい誇示やったりする。この授業でも、そういうものがぶつかったすえに、カッコつきの音楽とはちがう流れが生まれてきた瞬間があった。

H これまでの経緯としては、最初ピアノとかギターとかに代表されるような、いわゆる西洋楽器は使わずに、周りから聴こえてくる音に耳を澄ましたり、ホチキスとかメジャーとか、楽器じゃない身近なモノを使って音を楽しんだりして、最終的にそういう音を構成して、音楽らしいものを組み立ててみましょう、というところから、出発したんです。でも徐々に、学生さんのしたいことも盛り込んでいって、去年から楽器は持ち込み有りにしたんですね。とくに初期の方は、最後に作品をしあげるときに、フライパンとか自転車とか、楽器じゃないものを使う人が多かったし、音楽や楽器が得意じゃない人たちもたくさん受講してくれた。いまでも何人かはいますけどね。

K ぼく、じつはピアノを小学校のときにはやっていた、たぶんそのときは、こういう綺麗なコードがひけたらいいとか、なんか目指す音楽っていうのが、そのときどきにあったと思うんだけど、その一方で、「おれはひととは違う」っていう、くだらない見栄みたいなのをやっぱり持っていて、難解な音楽とかにも憧れていた。でもね、それは見栄であると同時に、いま考えると、すごく、自由になれる感覚でもあった。つまり、楽器をうまくひけるとか、ピアノを上手にひけるとかっていうこと以外に、音を出して、楽曲らしきものを楽しむ。しかも、それをほんとに音楽として楽しめたら、まあ極端な話、楽器も要らないし、な

にかその身の回りの生活そのものが音楽に変わる、っていう、なんか、そういう、まずは概念というかな、これはこう、理屈から頭に入って、その理屈をけっこう本気で信じてたところはあって、既存の身の回りにあふれている音楽に、対抗したいっていうのは、ある種あった。で、それを自分の身にしみ込ませたのがパンクだったり、そういう既存の音楽でもあったんですよ。

H カウンターカルチャーですよ。

K そうですね。でも、たしかにそのカウンターって、当初ほんとに勢いだったり、なんかこうスポーツ感覚でカウンターカルチャーを楽しんでいるっていうか、受け入れるっていう、なんかそういうものがあつたけど、やっぱ冷静に、理屈として考えても、カウンターカルチャーの持っている考え方っていうのは、けっこう自由にさせるっていうかな…なんか、すぐに諦めがきくっていうか、ピアノもってない、欲しいけど、こんな楽器欲しいけど無い、じゃあどうしようってなったら、たとえばドラムセット買う代わりに、ねえ、机叩けば音は鳴るっていう、簡単にいうとそういう感覚っていうのはあって、カウンターカルチャーが、DIYにつながるっていうのもよくわかる。この授業では、たとえば、リズムをつけたいって、自転車持ってきて逆さまに向けて、タイヤを回してカタカタカタカタっていう音やったりとか、すごくノイジーな音を奏でるためにこう、ガスコンロとフライパンを持ってきて野菜を炒めたりとかしてたじゃないですか。なんかああいう発想につながっていくっていうのは、じつはすごく大事なことなんちゃうかな、っていうのは、それは未だに、理屈としてはおもっているんですけどね…だから、うーん、価値観とか、既成のものをこえるみたいな言い方以前の、なんかこう自由になるための、術^{すべ}っていうかなあ…

音楽は、それをこえていくのに、すごく適したメディアというか、やってて楽しいし、盛り上がってくるし、それはほんとにちゃんとしたドラムセット叩こうが、机を叩こうが、なにかみんなと一緒に、こうからだ動かして音をかなでてるっていう体験で、じつはすごくわかりやすいし、無理がなくそこにはいっていきけるっていう感じがあるから、だからなんか、こえやすい、っていうのがあるです。

H この授業はどうですか？

K こえていくための理屈づけっていうのが、用意されていると思う。それは「まずは、音をたのしんでみよう」といって、外に出ていき、工事現場の音とかに耳をすますっていうことをまず考えるし、で、耳をすますっていうことが、音楽を作るっていう授業の大きな枠組みの一部になってるっていうのが、まずすごく優れている。それによって、あ、こういう、

音のとらえ方があるし、ゆくゆくはこういう感覚が、この授業で音楽を作るっていうところに活かされていくんじゃないかっていう、勘が絶対に働いているはずなんですよね、参加してる人には。

教室に戻ったあとでもその経験はつながっていて、たとえば、そこいらにあるビニール袋をぐしゃぐしゃってして、集団で音を組み立てていくとか、楽器はないけど、文房具とか、座布団とか、とにかくみんなで音を探しさがして、自分の生理にあった音を見つけ、それを組み立てて音楽をつくる。それも、音楽をしるとか、作曲をしるとかいうのではなく、なんとなしに集団で音を組み立てていくっていうプログラムに近い感覚があって、そういうことをやりながら、なんていうかな、きもちよくみんなで音をかなでる方法を、なんとなく学んでいってる。

その時点で、音楽というものを一步踏みこえてるはずだし、そこに対しての欲求っていうかな、ほくみみたいにパンクな、ちょっとこうカッコつけたいなとおもっているひとはたぶん、その時点で、次のステップでこの授業が求めているもの、つまり、コード化されたものとか、いわゆるメディアにのった、構成された音楽、っていうものからもう、はみ出る準備っていうのはその時点でできている。受講者はそこをみごとに、こっちの予定通りこえていってくれたっていうかな…つまり、規定通りの、みんながいままで体験してた、メディア化された音楽っていうのを、なんなくこえるプログラムがまずなされてる。それに、楽器を使わない音楽、音のあり方っていうのも、無理に指示されることもなく、たのしんでそれができそうな、仕掛けが用意されている。

だから、もう一個それに近い授業としては、本間さんとやっている映像の授業（思考の活動とメディア）があるんだけど、それはねやっぱり、機材っていう、制約がどうしてもあって、電気、だから、やっぱりギリギリのところでそこは、えーっと、自由と不自由のギリギリのところをまだいってる感じもするんだけど、この授業に関してはそこを、準備するものっていうところすらもいったんこえていくっていうかな、叩けば鳴るし、さわれば、シャリっていう音がするっていう、で、それすらも音楽である、っていうところから出発しているので、授業としてもすごく自由だしフレキシブルなところありますよね…

どうしてこの授業をはじめたのか

H ここで授業の内容を簡単に振り返っておきます。

一日目は、音の時間、サウンドの時間っていうことで、基本的に音楽はいったん忘れて、いろいろ音に注意を向けてみる。まず、聴覚を働かせる前に、みんなで話しながら自分の記憶やからだに染み込んでいる音を探してみる。音について話をしてみるっていうのをやった後に、こんどは実際に、どんな音がわたしたちに聞こえているのかっていうのを意識する

ために散歩に出かけるっていう、サウンドウォークをやって、いろんな音に耳を澄ましてみる。さらに最近になってつけたしたんですけど、帰ってきて絵を描く、聞こえた音をヴィジュアル化してみる。年によってしたりしなかったりしますが、時間に余裕があったら、その絵を見ながらもう一回みんなで一音にしてみるとかも、やりました。

二日目は、音でなにかつくるということで、野村誠さんというわたしの知り合いの作曲家がいるんですが、集団創作をするために彼が考えた「しょうぎ作曲」をやるんです。大きな紙を用意して、一人ずつ順番に、楽器や楽器じゃないものを使って一フレーズずつ考えて紙に記譜していく。自分がわかって後で演奏できたらいいので、音符でなくてもいいんです。「手を三回たたく」とか。その後、こんどは歌をつくる、というワークをして、一人一人にインタビューしながらまず歌詞を書いて、その歌詞に音をつけていく。それが終わるともうあとは、グループに分かれて音をつかった作品づくりをはじめ、五日目に発表します。まる二日かけて集団創作をするんですが、たくさん時間があるように思えて、さいごはみんなハイハイいいながら仕上げます。

こうやって説明してみると、わたしがオリジナルで考えた内容はほとんどなくて、サウンドウォークとか、サウンドスケープにしても、しょうぎ作曲にしても、ひとが考えたことなんですけどね。

K 大学の授業っていうなかで、そういう野村さんとやってきた経験っていうのを、一つのプログラム、授業として持ち込もうとした理由ってなんなんですかね？

H CSCDができたとき、わたし自身は音楽を大学の外でずっとやってきたから、べつにわざわざ大学でやらなくてもいいか、って思ってたんですけど、久保田さんといっしょに、しろうとが映像を撮るっていう授業をはじめて、それが面白かったし、やっぱり表現するってことにいろんなひとが踏み出すことで、より世界が豊かになるかなって思った。それは野村誠さんたちとやってきたことと、久保田さんとやってきたことがすごく共鳴した、ってことですかね。つまり、音楽とかパフォーマンスをこれまでいろんなひとたちとやってきたことと、CSCDで久保田さんと一緒にしろうととビデオを撮る、っていうのをはじめたことが、すごく共鳴した。CSCDでは最初、音楽以外のものでもやってみるのが、けっこう楽しかったんですけども、もう一回音楽にその感覚を持ち込みなおすっていう、個人的にはそうですかね。

K なるほどね

H この授業をやってみて、阪大生にはこういう時間が必要なんだ、と実感しました。学部生も大学院生も、とにかくいろんなことに追われていて、就活とか、研究室とか、研究発表

とか、学生さん、忙しいじゃないですか。とにかく余裕がない。たまに社会人学生の方も受講されますけど、社会人の方も、こんな贅沢な時間はないです、って皆さん異口同音にいわれますよね。だから、そういう日々の縛りから、ひととき合宿みたいなかたちで解き放たれて、自由に過ごしてもらいたいというのが、わりと大きなモチベーションです。当初から作られる作品のクオリティは、どっちでもいいかな、って思っています。

それにクリエイティビティのためには、訓練とか練習とかよりも純粋な余暇みたいなものがいい。でも、それはなぜ必要なかと問われるとね、なかなかこたえづらいんですけども。

K たとえば、映像を観たり撮ったりする授業を本間さんとやってるときに、対話っていいのか、観てどうだったかって話しあう時間はすごく大事やおもうんですね。で、音楽は、もちろん対話も大事なんやけど、そもそも集団創作の中に、対話の時間っていうのが含まれている気がする。つまり、自分がなにか音を出すときに、ひとの音を聴かないとだめじゃないですか。それって、いわゆるプロフェッショナルの現場やと、なんかそのタイミングとか、全体の楽曲の中で、自分の立ち位置っていうものにすごく縛られているような気がする。そうじゃないこともあるとおもいますけど。この授業のときは、みんなやっぱりしろろとやし、しかも使うものがねえ、こんな文房具やったりするから、なんか純粋に、聴かないと自分が発信、発音できない状況っていうのがこの授業では作られているような気がして、なにかこう、練習に練習を重ねて自分の発音するタイミングを身につける、っていうよりも、もうほんとにその、その場で聴いて出さざるを得ない状況つくるじゃないですか、けっこう強制的に。なんかね、そこがやっぱりすごく、いいなあとおもうし、音出すためにひとを絶対聴かなあかんっていう、そういう厳しい時間。だから自由自由ってさっきからぼく言ってたけど、そういう意味ではすごくこう不自由な、ひとを聴かないと自分が音出せないみたいな…不自由なルールもあるけど、そこがすごく大事な気がしますよね。

H つまるところ、そういう即興こそが対話の醍醐味だと思います。CSCDのいろんな教育プログラムには、その人が受け入れてきたそれまでの習慣みたいなものを、見つめなおしたり、ちょっと変えてみよう、ということにうたえることは少なくないですよ。そのときに対話っていうのが、ひとつ有効だとおもうんです。

K すごくこう、自分の立ち位置を問われるというか、だからまあ、すごくカッコつけたいひとは、どんどんカッコつけていく授業なんだとおもうんですけど、なんかそれ、ってサークルでやっているバンド活動とも違うような気がして、お互いこう、見ず知らずの緊張感だったり、あんまりこう、うまいへたっていうのがひとまずは問われない、単純に音の鳴る

ものだったりするからこそ、なんか自分がどう立ち振る舞うのかってすごく意識する、っておもうんですよね。

ある受講者が、こんな授業で単位もらって本当にいいんですかって、それたぶんきつと褒め言葉でいってくれたんですけど、それがすごく耳に残ってて、こんな授業でっていうのは、出席しなくても単位が取れるっていうのとは全然ちがうレベルで、その人は言ってたし、なんか、ああ良かったっていう、なんかこう、遊びと学びみたいなのところのすごくいい狭間を行っているっていうかな、そういう意味でもすごく好きなんですけどね、この授業。

H 遊びのないところには学びはない、と思います。この授業の目的や位置づけを、書かされますので、シラバスに書いてますけども、既存の言葉で埋めていくと面白くなるんですよ、歯痒いところですが。異分野の人たちが集まって、知恵を出しあって創作するってことは有用です、みたいなねに。まあ、それはそうだとはおもいますが、自分で書いてて嘘ではないんですが、これだけではないし、じつはこれがメインではないんですよ。やっぱり、わたしも演奏家というかパフォーマーの端くれなので、その一瞬の時間を無目的にたのしんで欲しい。この将来のなにかのためとかではなく。

シラバスとか教育プランの書き方についていえることなんですけど、やっぱり教育って未来が重くて、未来のための準備って思われてる。でもほんとうはそうじゃない、教育は未来のためじゃない、いまのためにある。わたしの受けてきた大学は、教育はそうじゃなかったんですけども、いまは追い込まれている気がしますね、未来のために。

K すごい逆説的ですけど、ほくすごい未来のためになっている気がして、この授業がこれはなんなんやろな。

H まあ、それはわかる気がします。いまが充実しているってことは、いまがすべてっていうことでもないんですよ。だから、音と音楽に対するいままでのイメージとか理解とか、習慣をすてて、もっと、もっと自由に、音楽と音に関われる、っていうことを、学んで欲しいとは思う。この授業でできるのは、この期間だけ。ちょっとだけそういうことを体験できるだけで、限定されているんですけど。

他方、こういうことを日々やろうとおもうと、それはパフォーマーとか音楽家、あるいは哲学者になるしかない。なぜかっていうとそれ、毎日やってないとだめなんです。そうじゃないと既存のものに、浮かんでいる方が楽ですから。

K イノベーションとか、いますごい問われるし、求められるし、「イノベーティブな感覚を育む」みたいな決まり文句は、じつはこの授業に僕は最もあてはまると思っていて、つ

まり、音楽を奏でるのに既存の楽器を使えない、さあどうするって考えるのって、前提からまずはすごく考えさせられるし、しかも、その前提もいままでつちかかってきたメディアの中の音楽っていう前提をいったんくずさないと、次の工夫が出てきーひん、っていうハードルが、あらかじめあるじゃないですか。そのハードルをこわすことを遊びながらやれる、っていうかな、それはすごくイノベティブだし、CSCDの授業のなかでも、その度合いはほかの中ですごく強いんですけどね。ほくけっこう全員が、必須としてこれもいいんちゃうかなっておもえるくらい。

H 全員ってというのは？

K 大学の全学生が。全く同じプログラムを体験できるかはちょっとさておいて、でも、こういうこの手の共同作業で、それをこう音楽みたいな表現、っていうところと結びつけて、体験することって、すごい大事な気がしますね。やっぱこれは、大友良英の本じゃないけど、「学校では教えてくれない音楽」なんですよ。

H たしかになかなか学校じゃ難しいかもしれない。

K 難しいですよ。

歌にくい歌

H 二日目に歌をつくるっていうのをやっていて、わたしが面白いなっておもうのは、最初に歌詞も、一人に「好きなものはなんですか？」ってみんなで質問して答えたことばを順に書いていだけなので、辻褄がなくわりと意味不明になるし、なんか歌っほくないんですよ。歌詞も歌っほくないし、フレーズもみんな、なんかけっこう面白いフレーズを考えて、あんまり前後関係なく歌にくいものにするから、歌としてはほとんど出来損ないに近いんです。でも、なんか逆に、ほんとにその分だけ個性がすごいある。なんかこう音楽の鉄則を踏まない。そもそも拍子がないし、フレーズによって長さも速さもバラバラ。でも、わたしこれやって驚いたのは、ほんとにみんな、楽譜も使わずに、歌詞に単純な楽器を使って音わりふっていだけでメロディが作れる。

K うんうん。

H 「ハモのテンプラおいしく食べました」っていうことばに、日本語のリズムに合わせて

音を割り当てていくんですが、リズムに縛られないだけで、こんなに自由に歌を作れるっていうのはほんとに、最初もびっくりしたし、長年つづけてきて、いまでもいいなと思うんですよね。そのぶんかなり馴染みがない音楽が出来上がるから、パッと覚えにくいのも事実ですが（笑）。

K そうですよね、覚えにくい。

H その覚えにくさとか、ぎこちなさっていうのが、やっぱり好きなんです。自由、不自由っていうのさっきから話題になってますけど、その不自由さから生まれる自由がある。通りはよくない、決して耳障りがよくない、でもそれが、すごくオリジナルだと思いますね。わたしそんなにオリジナリティって重視してないんですけど、結果としてそうなる。ひとから直接出てきたことばと音をもとにしているから。

逆に、パッと聴いて覚えられる歌というのは、ヒットソングもそうですけど、感覚を操られているというか、たんなる集団的な反応ですよね。でも、覚えにくそうな歌ができあがっても、なんども歌っていくうちになぜか馴染んでくるんです、このくらいで歌うと心地いい、っていうぐあいに。

K オリジナルたらしめてるのは、あのインドネシアの楽器だと思うんですよ、つまり、ドレミファソみたいな、いままで慣れ親しんできた音階じゃないじゃないですか、だからみんなめっちゃ困惑するし、めっちゃ怖い音楽もできたりするんですけど、でもそれが面白くて…そのインドネシアの楽器を使ってるっていうのってなんか、大きな意味ってあるんですか？

H はい。まず鉄琴みたいに打楽器なので、誰でも音を出しやすい。手で弾いても音がなる。あと、1オクターブに5つしか音がなくて、順番に叩いてもメロディになるので、つくりやすい。この、つくりやすさというのがメインです。今年は、琴とか、ウクレレとか、弦楽器も使ってみましたけど、余計なことなしにすべて弦をそのまま弾くだけ。

K ウクレレもねえ、ふつうやるようにその弦を指で押さえるんじゃなくて、開放で4弦、4音だけ（ソ、ド、ミ、ラ）を使うっていう制限があるじゃないですか、あれによって相当、不自由だし、相当へんてこな歌ができるんですけど。

H たしかに制約かもしれませんが、制約って思われてるものはわたしたちにとっては制約じゃないって、思いますね。制限がないっていうのはかえって不自由だとも思います。だってピアノなんか、目の前に88鍵も鍵盤があって、どれをどういう順番で使うのかを考えだすと

不自由になってしまう。それに比べて、太鼓があって、棒があって、こう、どーんって…

K そうですね、叩けば鳴る。

H でも、どーん、っていうのもあれば、とん、っていうのもあって、それだけからも作れるわけでしょう。なんか、むしろ、88の内、どれをどの順番で、みたいなの、そんなの計算するくらいだったら、もっとその、どーん、とん、を使ってどうするかみたいなことの方が、大事な気がします、音楽的にもすごく大事な気がしますね。

K それってやっぱ、この音楽もそうだし、remoscope（「固定カメラ／無音／無加工／無編集／ズーム無し／最長1分」の「リュミエール・ルール」によって撮影する方式。参照：www.remo.or.jp/ja/project/remoscope/）もそうだし、映像の授業（思考の活動とメディア）もそうだし、本間さんはつねに、まったくフリーで好きなようにやれって言ったことが一度もないじゃないですか、これだけ自由な授業なのに。いずれも制約の作り方っていうのかな、いままでCSCDでほんと本間さんのやってきたことに共通することですよ。やっぱその制約のかけ方がすごく特殊で、そこにもっともクリエイティビティを感じる、そのフィルターをかけて出てきたものはなんでもいい、っていうところも含めて。

H うん、久保田さんなりに解釈するとそうなるんだろうなって思って、いま聴いてたんですけど。わたしは、なるほどそういわれたらそうかもしれない、とは思ってますけど、それは最初から狙っていることじゃない。むしろ、すでに受け入れられている軸に対して、いやその軸じゃないでしょ、っていうのがあるんですよ。

K ああー、そういうことか。

H 対話とか音楽とか、理解とか気持よさとかってね、ホントにその軸で成り立っているですかねえ？っていうね。たとえば、流暢に話すとか、間違えずに演奏するとか、たしかにそういう軸ってまああってもいいし、もしかしたらあるにこしたことはないんですけど、そこって中心じゃないんじゃないですか、っていうのが直観的にやっぱり、あるんですかねえ。たとえば、和太鼓。わたし太鼓は嫌いじゃないんですけど、和太鼓を、なんか大人数でやたら叩くとかね。え、そっちなんですか？

K うんうん。

H 和太鼓っていちばんいいのは、あの大きいのが、ど————ん、って響くときの、あの一発とか、その環境とかじゃなかったんですか、みたいな。なのに、やたら叩くんですか？みたいなね。

K なるほどな。

H そういうことが、各ジャンルにやっぱりありますかねえ。どの世界でも、和洋問わず。だから、そういう通用してしまっている軸から別のところに目を向けるために、ちょっと基準を変えてみたらどうですか、っていうのが最初にあります。だからなんか、クリエイティビティっていうのがわたしの中にあるかどうかは、ちょっとわからないですかねえ。単にわたしの好みに依拠するところが多いかもしれません。世の中で主流とされる基準から、わたしひとりがすごい外れてて、だから結果として浮いて見えるっていう、そんだけのこともありませんし。

K まあ、それもそうかもしれませんね。確かにそれはねえ（笑）、あると思いますよ、大きく外れてる。でもやっぱりそのズレが多くの場合クリエイティビティとつながっているって気もしますけどね。

H そういってもらえると嬉しいんですけども、クリエイティビティって、主観とか主体とかに結びつくもんじゃないんじゃないかなって思うんですけどね。それなんかすごく近代の人間がつくったつまらない考え方だと思います。個人が創造する自由や秩序って、ほとんど約束みたいなものでできあがってるわけで、逆にいうと、答えはすでに決まってるんじゃないかって思う。じつは答えはそんなに異ならなくて、結果が多様なんじゃなくて、もうちょっと、向かうべきところが、あるんじゃないかなあと、その向かうべきところを見定めて、進む様子が、クリエイティブ？…のような気がしますがね。なんか人間ってそもそも、やれること、決まってるし、人生も短いし、そんな多少ひとから目立ったところで、そんな、その違いがなんなんですか、みたいなところはやっぱりあるかなあ。

K なるほどそっか、クリエイティビティっていうよりもなんか、ユニークさっていうか、そういう感じなのかなあ、うーん…

H あるべきもの、みたいな。あんまり「べき」っていう言葉、好きじゃないんですけども。だから、人間はなんか、最近とくに、すごく無駄なことをしてる気がするんですよね。いろんな無駄なことをしてるって気がするので、そうじゃないふうに軸を持っていくと、結果と

して久保田さんの、さっき言われたようなことにつながるのかもしれない。

ノミスマをパラハラッテインする

H ちょっと哲学に引きつけていうと、ディオゲネスっていう人がいて、大昔の、紀元前のギリシャ時代の哲学者っていわれてるんですけども、でも哲学者っていうより、その当時の貨幣を偽造したり、シノペからアテネに移ってきて奴隷みたいな生活したり。けっこう変人なんですよ。

で、彼の貨幣偽造事件なんですけど、貨幣っていうのは、ギリシャ語で「ノミスマ」っていうんですけど、「通用してるもの」という意味なんです。人間の秩序を意味する「ノモス」という語と関係があって、広く通用しているもの、とか価値とか。それを偽造するってどういうことかということ、偽物があって本物があるわけで、要するに、通用しているものの真偽を確かめる（パラハラッテイン）、そういうエピソードとして理解されています。なんか、それって芸術にも通ずるじゃないですか。

K そうですね。

H 芸術があるからこそ、はじめてこう、本物とリアルとかいうのが問題になる。どっちが本物かわからないみたいなね。そういうのも一方で面白いと思ってます。だから、こう、人間の作ったものに対する、破壊的とはいわないにしても、「それほんとなんですか」という懐疑の目は必要じゃないかと。

K 偽物か本物かって問う、ということは、本問さんのには、たとえばこういう授業は、大学の授業として、大学の中で一般的に通じてるものに対して、こういうものをけっこう意図的にぶつけてるところって、ありますか？

H あります。そういう制度的な実践っていう意味はけっこうありますね。だから、こういう授業のもつ象徴的意味ってのは、「こんな授業ってありなんですか」とってひとに思わせる、ということにもあると思います。こういう授業が差し挟まれることによって、大学ってなにやってるのいったい？、みたいな疑問をもってもいい。

K そうですよ。

H あるいは、授業って何することなんです、みたいな問いが生まれることが必要かと。

たとえば、「こんなで単位もらっていいんでしょうか」みたいな感想を学生がもったとすれば、それは学生の中で授業というものに対する組み替えがおこったってことでしょう。それは意図するところでもあるなあ。

K 随分前にFacebookでこの授業のことあげたときに、誰か「こんな授業があんねやったら大学行っといたらよかった」って書き込みがあって、なんかそこにもすごく通じるなあとおもって。本物と偽物っていうか、あれとこれが、並列してるから大学って存在意義がはじめてあるってということなのか、それとも、全部がこれに置き換わっちゃって、それはそれでいい…

H どうなんでしょうね。だって貨幣の偽造って、すべての貨幣が偽物になってしまったら意味は無いわけで。それが本物に成り代わってしまうだけ。でも、貨幣の話と一緒にするとあれなんですけど、このいまやってる授業が本物か偽物かっていうのって、けっこう大事で、少なくともわたしにとって限りなくやっぱりこれが本物に近いからすごく楽しい。

K 本物に近い偽物？

H 偽物かつ本物。うーん、いや、でも、アート（笑）

K ぼくはアートっていう部門にいるから力づよくいいですけど、アートって分野からすると、これはほんとに、本物の授業、アート部門が目指してるひとつの本物の授業。

H じゃ、偽物の授業ってなんですか？

K 単純にいうと、これは大学とか大阪大学を背負うか、CSCDを背負うかでちょっと話かわってくるんですけど、でもCSCDって立場からすると、いわゆる講義型の一方通行の授業っていうのは、すごく偽物っていう印象が強い…だけど、それをちょっと大阪大学とかって広く考えたときには、やっぱり、あれもあって、これもある、っていうことに意味があるのかなあとも思う。

H 講義型の授業はなぜ偽物なんですか？

K やっぱりね、CSCDの立場ですけど、ずっととにかくこう、先生っていわれるひとから送り届けられる情報っていうのをひたすら自分の中で咀嚼して、それを蓄えていくっていう

やり方に対して、それをこう、発信者にまわって、発信したものを交換するっていうことが求められてできたのがCSCDかと。

H なるほど、それはメディア久保田理論ですね（笑）。

K 久保田理論です（笑）。

H それ、久保田さんと何の話をしていても出てくる。受信者だけじゃだめなんですね。

K そうですね。なんかでも、馬鹿みたいですよね、結局そこなんです。

H いやいやいや、ひとつのことにこだわるってことは素晴らしいことです。逆にね、ほかに目移りせずに、久保田さん一貫してますよね。

K そうですね、そこしかないんですよ。発信者にまわる。発信者にまわって、交換ですよ。この、交換するっていうのが、ほくがCSCDに来て、つまり本間さんとしゃべってるうちに覚えたことなんですけど。本間さんが言ってる対話ってのを、翻訳したらこうなるんです。でもなんかこう、出してそれをこう、シャッフルしたり、あーだこーだっていう、発信し合うのがたぶん意味があって、単に発信者にまわるだけでもまた違う感じがする。

メディア久保田理論

H こういうのって、日本でずっと浸透してる俳句とかと、川柳とかと、どう違うんですかねえ。

K 僕はおんなじяと思います。ただ、俳句でも句会ってあって、俳句詠んだあと、それを評価しあうっていうかなあ、感想を言いあったりするじゃないですか、それがあがないで、全然違うもんやろなあっていう印象がある。だから、ほくはCSCDに来るまでは、送り手にまわるっていうことは、ひとりで送り手にまわったらいいと思ってた。だから、たとえば言いたいことがあったら自分でラジオをやればいい、って思ってたんだけど、それにまして、いま、ハム無線ってあるじゃないですか、トラックの運転手とかが交信する。だから句会でも、自分で俳句をひたすらノートに書くんじゃなくて、それをみんなの前で詠みあって、お互いがそれを吟味したり、評価しあうっていう、その場自体がすごく優れたシステムで、なんかそこがないと単純に送り手にまわるっていても意味が全然ちがうなあとってるんで

すよね。それによって、自分の気づかなかった視点とか、感覚っていうものに、はじめて目覚めるっていうことにもなるし。だから送り手にまわりつつ、受け手にまわるっていう、自分の中での交換がちゃんとできるシステムがないと。単に送り手にまわるっていう意味が違う。

H 自分の中での交換って、送り手と受け手の交代って意味ですか？

K そうじゃなくて、送り手になって、送ったときに、それに対してああだこうだいわれる場っていうのかな。これは意見でも、音楽でも絵でもなんでもそうだとおもうんですけど。そうすると自分の中でもたぶんフィードバックがその場でおこるし、すごい速度でそれはおこると思うんですよ。

H 大学研究というものに、そういう場は埋め込まれてますけどね。研究発表っていうのは。

K だからこそ、CSCDみたいなところに意味があると思ってて、まったく相反するものを、無理矢理つけくわえたのではなくて、そういう意味ですごく応用がきくっていうかな。つまり、大学での表現、表現っていうか、送り手にまわってその場でフィードバックっていうのはやっぱり言葉と文字じゃないですか。でもいまやろうとしてるCSCDでのこういうものは、もうちょっと抽象的な表現で、それと同じことをやろうとしている。それがたぶんセットになってはじめて、人間の深みだったり、生活の豊かさっていうのが、もっと幅が広がるんじゃないか、っていう仮説をもとにやってるのが、CSCDなのかなあって思っていた。まったく違うスキルをプラスするんじゃなくて、普段やって、出してまーす、っていうことは、言葉とか、論文とか、文字以外の方法でもあるよね、それはけっこう日常にあふれてるよね、っていうことを、付け加えるっていうことなのかなと。

H なるほど。研究発表して相互に議論してる、その同じことを別の、メディアでやってみましようという。それは何のメリットがあるんですか？ メリットがありそうには思うんですけど、それはなんでしょう？ たとえば、自分たちがいままで発表し、意見を交換してきたってことを別の角度から見直せるってことですかね？

K そう。見直すし、結局、自分がこう考えて、それを発表する場っていうのが、多くの場合、とくに大学の場合はある種すごく閉じた場じゃないですか、学会だったり、ゼミだったり。でも、やっぱりそれだけでは物足りなくて、まったく別の評価軸、たとえば、自分の家族でも、子供でも、友達でもいい。学会とかには普段いないひとたちに、それを伝えたとき

に、どこまで伝わらなくて、どこまで伝わるのかっていうことはたぶん、出てみないと判断できないですね。

H いまちょっとわかったのは、受け取り手側の、より多様な反応が期待できる、こういう直観的なメディアをつかうと。

K そうですね

H 言語をベースにした発表だと、要するにコンテキスト重視っていうか、それについての予備知識とか、理解するだけでたくさんある。それがもうちょっと開かれて自由になるってことですかね。送り手も受け手も。

こういう創作作品も、なにになにつぼくていい、とか、なにを踏まえている、とかみたくないな反応じゃなくて、いろんな反応がバラバラ出て来る方が面白いですね。

K そうですね。それはそう思います。

H だから、作品っていうのは、やっぱり、いろんな反応を呼び起こす方が面白いかなって一般論としても思う。でも、それはなんでなのでしょうね？　なんか、そこに普遍性があるような気がするんですよ。

K そうですね。ほく昔、三人で論文書いたことがあって、すごく困ったことがあるんです。僕にとっては物事は多様な方が面白くて楽しいけど、ある共著者から、どうして多様性が大事なんですか、っていわれて、もうそれ以上先に進めなかったことがあって。CSCDの欠点は、ひとつはそこにあると思う。すごく多様で、いろんな情報が錯綜して、いろんなコンフリクトがある、っていうところが、それもひとつの豊かさだっていうところが、なんとなくCSCDの暗黙の了解としてあると思うんです。僕もそこにのっかっていて、じゃあ、なんでそれが豊かなのか、っていうことを全然考えずに来たんですけど、それを問われたときにはほんとに困ってしまって。

H でもそれは簡単で、逆に多様でないってことはどういうことか、っていうことから考えてみたらいいと思うんですけど。

K あー、なるほどね。それは考えてなかったですね。

H 多様性がない状態っていうのはなんなのかって。

ひとつは、多様性がない状態というのは、多様性のもう一つ上のところに別種の秩序があって、そこに包摂される場合。もうひとつは、多様なものが、なんか削減されて、多様でなくなっている状態。だから、いつものメディア久保田理論も、本来は多様な反応を引き起こすはずの映像メディアが、単一の反応を起こすように操作されて、多様性が縮減されているっていう話なんですよ。で、そのプロセスに異議を放つわけでしょ。それってなにやってるんですかって。

K 哲学の立場からその、どうして多様性があったほうがいい？

H まあ、哲学かどうかわかりませんが、同一のものが、複数の反応を同時に引き起こすということじたいが面白いじゃないですか。物理的な話としても、ひとつの反応がひとつの別の反応を呼び起こす連鎖がどっかで止まったら、それでおしまいじゃないですか。

K なるほど、シンプルですね。

H 哲学かどうか知りませんが、やっぱりわたしたちにはひとつのものを見てるっていう幻想があると思うんですけど、それをこう、その幻想を打ち破るっていうか、だから、多様な反応が見えるっていうのはひとつのリアリティに到達することになるんじゃないかと。

K ああ、そこはなんか共通してる感じがしますね。

H こっちのほうがリアルだっていう。多様性といっても、単にカオスな状態が好きなわけではない。

K (笑) まあそうですね。

評価について

H もう一回この創作の話にもどると、マジメに、こういう作品の評価軸はどこにあるでしょう？ 久保田さんと一緒にやっている映像もそうなんですけど「思考の活動とメディア」での映像の作品もそうなんですけど、われわれはどんな評価軸をもってるんでしょう？

K これうまくいえへんなあ。なんかね、やっぱり「思考の活動とメディア」というタイト

ルまさにそのままなんですけど、受講者の作品をみると、作り手の思考の活動の痕跡がちゃんと残ってるものと残ってないものが、なんかはっきりわかるんですよえ。

H 試行錯誤ってことですか？

K 試行錯誤ですね。だから、与えられた課題にたいして、なんか一定の考えとか、なんかそこへのこう、試行錯誤、まさに試行錯誤が見え隠れする。

H どんな痕跡を見出すんですか？

K また軽い言葉になりますけど、ノリでやらないというか、なんかすごい流されていない感じがするんですよ。なんか流されそうになってもいったんそこで止まって、こうすることでなにが起こるのかっていうのを、自分の中で考えたり確かめようとしてたりしてる。そこは、そこはなんかすごく感じるんですよ…

だから、本間さんとぼくのやってる「思考の活動とメディア」でいえば、へたをすると、なんでもアリ、って思われがちなんですけど、でも、そこでほんとになんでもいいと思って撮ってくるひとの作品と、なんでもいいんじゃないかって、とにかくその中にどれだけこう、考えとかアイデアとかを込められるか、その中に思考の痕跡をどれだけ残せるか、っていうことをちゃんと受け止めて、やろうとしてるひととはなんか違うんですよ。それは音楽に、サウンド・オブ・ミュージックに関してもやっぱり思いますよねえ。

H わかるようなわからないような。わたしは、まあ、もしかしたら同じことを違うようにいうのかもしれませんが、まあ、わたしは単に面白い面白くないかしかわからないので、プロセスはともかく、感覚的なんですよ。感覚的ってことは、要するにわたし自身の経験として、単純に自分にどこまで突き刺さるかが問題なんです。それは、サンプリングされた一個人の経験でもいいかなあって思うんですけど、一個人として、なにが、どんな風に突き刺さってきたのかっていう。ロラン・バルトが「ブントゥム」って言って、写真を見たときに写真が自分を突き刺す、と言ってますよね。

K 言っていましたね。

H だから、それはわたしにしか起こらないことだから、個人的っちゃあ個人的なことですけども、一億分の一でもそういうことが起こるか起こらないかってことは、ひとつの基準にしているんじゃないかなあって思うんですけど。哲学と芸術くらいは。

K 大学の評価としては、一個人としての教員に刺されば、いってことなんですか？ そこに、どこまで普遍性みたいなものを盛り込むのかな。

H むずかしいですねそれは。そういうふうに話を広げるとむずかしいですけど、大学にもいわゆる業界の評価ってのはありますからね。その業界の評価を自分が背負ってる、みたいな、なんかそういうところも研究者にはある。

でもほら、芸術のおもしろいところは、このひとを面白いて言わせたらいいみたいな、すごくそういう、ひと依存みたいなところもあるじゃないですか。

K まあありますね。

H 王様に気に入ってもらったらいいみたいなね。定量的に、全員の平均をとるみたいなじゃないね。全員の、平均的なものに快はないだろうっていう。だから、出す答えは別でもいいので、評価を互いにしあえれば、いいと思いますね。

その辺は哲学でもアートでもわたしは徹底してやってるつもりです。「この映像はわたしはここが面白かった」って、言い合うっていう。だから、個人の根底に流れるものどうしのコミュニケーションっていうか、そこに関心をもってますね。もちろんその場合は、やっぱりある程度の数のひとが表現する側に参与しないと成り立たないですよ。

K そうですね。

H だからその表現する側と見る側のバランスっていうのは、そういう意味ではすごく大事だと思います。久保田さんのさっきの言うておられたことと関連するとおもうんですけど、そこの全体の、それこそ久保田さんのいう、交換の度合いが、全体のクリエイティビティとか、クオリティに関係するかなと思いますよね。

それをなんか「こういうのがいいよね」っていうのに合わせていくと、全部がこう、なんだろうなあ、デコボゴがなくて雑になるっていうか、平板になるっていうか。上手いとか、優れているとか、独創的であるとか、そういうのはたかが相対的な比較の水準にしかないわけで。まあどうでもいいかと。

K そういう意味で言うと、「思考の活動とメディア」って、なんか別にああしなさい、こうしなさいって、とくに教員から言わないし、みんなでああだこうだ言い合ってるうちに、なぜか、ある種の上達というかなあ、すごくどんどん、みんなのが面白くなってきてくってけっこう多いじゃないですか。

H 面白くなってくるひともいる。

K ひともいる、そうですね。でもなんかその面白くなっていくっていうのは、べつにぼくとか本間さんの明確な基準に従っているわけではなくって、やっぱり、みんなの同じようにわいわいやってる中でやっぱりこう…

H まあ見る目がねえ、上がってくるわけですよええ。

K ってことですよえ。なんかそこは面白いなっておもいますねえ、よくよく考えてみたら。

H ごくごく単純に、感覚を鍛えていくっていうのはあると思うんですよ。それはほとんど練習に近いっていうか。だからこの授業で作られてる作品にたいするアドバイスについても、もうちょっと表現の出どころが、明確な、参加者ひとりひとりのなにかにつながっていった方がいいと思うんですよ。それはやっぱりわたし自身が苦勞してなかなかできなかったところでもあるし、やっぱり、そこに触れない、表現するのは面白くない。それは何故なのかなあ…

単純に言えば、そのひとがいなかったら、そのひとがいなければならない表現ということになりますかね。それ以外は代替可能なわけじゃないですか。オリジナリティというと比較はいるので、比類なくユニークだっていう。

K ルールを反転させたり、ある種の縛りを設けたりして生まれてくるものに、どうして興味があるのかなって、自分で考えてみると、やっぱりすごくユニークだからというか。たとえばギターなら、ふだん右手つかって演奏してたのが左手でやりなさいって、ルールを作ってぼんって投げ渡したときに、たぶん上手に弾けないし、見た目もすごい不格好だし、ヘンテコだし、すごく滑稽な状態になると思うんですけど、だけど、そういう滑稽な状態で音楽が演奏されるのをたぶん自分あんまり見たことがなくて、すごくおかしくて笑えてくる。それに近いものがあるんですね。たとえば、歌つくったときの歌詞だったり、あのメロディの、なんともいえへん不協和音で、みんながお経のように唸りながら歌うとか、そういうおかしみ、とつながってる感じがして。おかしさというかな、なんじゃこれ、っていうものとの出会う率が、ルールで縛った瞬間なんか飛躍的にあがるような気がするんですよ。それは、remoscope しかり、こういう作曲方法しかり、なんかすごく単純に、そこに出会ってることが幸せっていうかな、けっこうなんかこっちがひたすら脱臼させられてる感覚っていうのかな。この授業ではそういうことがけっこう多くて、それが楽しいのかもなあ。

H こっちが脱臼させられるっていうのはどういうことですか。

K つまり、インタビュー形式で歌詞をつくるとか、ルールが与えられ思いどおりにならない。やってるほうも、その思いどおりにいかなさで困惑するし、でもそれをやりながらたぶん、いままで無意識にやってたことを絶対、意識するとおもうんですね、なんか、そうしながら生まれてくるものの滑稽さっていうのは、なんか、とても大事な気がしてて

H なるほどね。わたしは、あの歌の作曲法は、すごい！これやれば、だれでも曲作れるっていう、なんか自動販売機みたいな、自動販売機じゃないけど、なんか、自動製粉機みたいな、だって、質問して答えて、それを歌詞にしていって、で、その文字になんか音あてるっていう、どんなでたらめやっても作れるわけじゃないですか。だから、個人というものを素材にしなから、でたらめなりに、なんか答えが出るっていうのが、面白いなっていうのが、これけっこう芸術の面白いとこだなって思うんですけど。

K そうですね。

H で、そのでたらめな部分を、より制度化するっていうか、精緻にしていけば、もちろんアウトプットの精度もそれなりのものになっていくかもしれないけど、そっちにいくよりも、remoscopeもそうかもしれませんけど、なんかとにかくできちゃうっていう、制約っていうよりも、ハードルを下げるのが大切。

K このハードルを下げた作曲方法って、体裁としては、市販のものにきわめて近いじゃないですか。メロディがあって、それに合わせて歌詞があって。だけど、それとは圧倒的にずれてるっていうかな、だから昨日の本間さんの話ですけど、こうじゃなくてちょっとずらしてみるとか、そもそもいまがずれてるっていう、その、ずれを確認できる感じがある。ぼくはその意味でそうとう知的やと思うし、こういうプログラムとか制約自体がクリエイティブだって感じたのはそこかもしれない。

K からだって、ふと我に返って考えてみると、すごいなんか滑稽な、感じじゃないですか。なんか、頭洗うときとか、そのからだ動かすときの、自分のその格好だったり動きっていうの、ちょっと上からふっと考えたときに、なんじゃこれ、って思うことがけっこうあって、なんかね、その延長線上に、ぼくの中ではつながってくるんですよ、そのちょっとずらすことで、歌詞とメロディの滑稽さだったり、あるいは、なんていうかなあ、まあ映像でも、結構そういうとこってあるとおもうんですけど、ちょっとずれて俯瞰したときに、ものすごく

その人間の営みが滑稽におもえてくるっていうか。

H ああ、それはわかりますね。たしかに、そこはわたしも楽しんでると思います。そういう言い方をしたことはなかったけど。やっぱり鏡ってことですよね。

K 鏡ですね。

H ばばばって、複雑な経路を通して自分を見てるっていう。

でももともと、この歌のワークショップの発想はめっちゃくちゃ単純なんです。わたし、高校時代に曲作りに憧れて、歌とかも作ったことあるんですけど、なんか全然上手くできなくて、それからだいぶ遠ざかってたんです。でも歌ってやっぱり、単純に個人のきもちとかなにかを歌うじゃないですか。そうじゃないものもありますけど。それで、もうちょっと個人をそのまま歌にするっていうことを、なんかできんかなっていうので、ちょっと思いついて、やってみたんですよね。

K なるほどなるほど。これ傑作ですよ。

H 最初は、ひとりひとり詩を書いて、自分でね、自分で詩をかいて自分で曲作ったんです。まあそれもべつに悪くはないと思うんですけど、あるひとにみんなで質問して、その答えを歌にするっていうのやってみて、すごい面白いなっておもって、それが出発点なんですよ、ひとを歌にするっていうことが。

それってね、なんか別な意味で、すごいオリジナルな気がするんです。なんていうんでしょう、だれのためでもないっていうか、フォークソングみたいに、想いを歌にするとかじゃなくて、ひとをなんか勝手にコピーしたみたいな感じの。スナップショットみたいな、いや、スナップショットみたいにいいものじゃなくて、勝手にコピーしたみたいな。

K なるほどな。しかも撮影者別人でしょ。

H ひとを歌にしてしまう。

K 例えば、「世の中を変えたいとおもいました」、「白身魚食べたい」、みたいな、そういうなんていうかな、ふだん絶対、並行して語られないようなものが、けっこうぼんぼん並んできたりするじゃないですか。だから、言葉だけで単純に面白かったりするし、これはよくできたシステムやなあ。

H 一応同じひとから出てきた言葉ですけどね。歌詞も曲も、まとまりがなくて、最初は歌いにくい。でも不思議となんども歌っているとなじんでくる。

それに、生まれて初めて歌作りましたってひと、多いですからね。そらもったいないって、思いますね。だからこの授業でも、ぜったい歌をつくる場所は入れる。音楽とか表現の原点に、こういうものがあるんじゃないかな、と。

K こういう歌を作ってみるような体験って、どんなかたちで根づいていくんでしょうね、こういう、阪大の学生たちに。

H 根づくか…

K 根づくってというか、どうこう咀嚼されてくというか。

H そうですね、それは課題というか、考えてみるべきことですよ。わたしの希望は、ちゃんとこれを逐一記録してYouTube（チャンネル：cafeimage）で公開してるので、思い出してどっかで使ってくれたらな、って思うんですけどね。

K 作ったひとたちが（笑）。

H めっちゃおもしろいですね、どう使うか。

ハンセン病短歌の形成：内田守の熱情をめぐって

松岡秀明（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD 招へい教授）

Formation of Leprosy *Tanka*: On Enthusiasm of Uchida Mamoru, M.D. and *Tanka* Author

Hideaki Matsuoka (Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University; Visiting Professor)

内田守（1900～1982）は、1924年から1936年まで熊本ハンセン病診療施設である九州療養所に勤務した医師である。歌人でもある内田は、患者たちに短歌を詠むことを奨励し自ら指導にあたった。本稿は、ハンセン病患者に短歌の指導者としての内田、彼等の短歌を世に出した編集者としての内田、明石海人の歌集や小川正子の『小島の春』の出版に尽力したプロデューサーとしての内田、そしてハンセン病の歌人についての著書を出版した著述家としての内田に注目し、彼が九州療養所においてハンセン病患者の短歌にかかわった過程を追う。そして、その熱情は患者を精神的に解放しようとする内田のパターナリスティックな願望に裏打ちされていることを明らかにする。

Uchida Mamoru (1900-1982) is an M.D., who worked for Kyūsyū Ryōyōsho, a leprosarium in Kumamoto prefecture, from 1924 to 1936. Uchida, also as being *Tanka* author, urged inpatients to make *Tanka* enthusiastically. Focusing on his achievement as an editor and producer of leprosy *tanka*, this paper explores his enthusiasm for establishing this new genre was his paternalistic eagerness to save leprosy patients psychologically.

キーワード

内田守、ハンセン病、短歌、隔離
Uchida Mamoru, Leprosy, *Tanka*, Isolation

はじめに

「此の療養所の如きも比較的忘れられてゐますのは非常に遺憾であります。」こう書くのは、「此の療養所」に勤務する河村正之という医師である。この文章が公にされたのは1926年〔大正15〕8月10日¹⁾、「此の療養所」とはハンセン病診療施設である九州療養所、そして「忘れられてゐる」のは、社会からである（河村 1926: 序1）。

内田守（1900〔明治33〕～1982）は、熊本県立医大を卒業した1924年から1946年までの22年間を三つのハンセン病診療施設に勤務した眼科医であり、河村は内田が医師として初めて勤務したハンセン病診療施設である九州療養所の当時の所長である。内田は、ハンセン病患者たちに短歌を詠むことを奨励し自ら指導にあたった。内田は、後に熊本刑務所で囚人たちに短歌指導も行なっている。歌人としては内田守人（もりと）の名で短歌結社水甕に

所属し、『一本の道』（1961）、『統一本の道』（1970）、『わが実在』（1974）あわせて三冊の歌集をのこしている。内田は本名の守とペンネームの守人を使い分けてさまざまな領域で文章を発表しているが、以下内田守で統一する。

私が注目するのは、しかし、歌人としての内田ではない。ハンセン病患者の短歌の指導者としての内田、彼等の短歌を世に出した編集者としての内田、明石海人の歌集や小川正子の『小島の春』の出版に尽力したプロデューサーとしての内田、そしてハンセン病の歌人についての著書を出版した著述家としての内田である。こうした観点から内田をとらえた研究として、主として1930年代後半の内田について論及している荒井の著書〔2011〕と、1930年代前半までの内田の営為を詳しく追った馬場の論文〔2000〕がある。本稿は、内田が九州療養所に勤務した1924年〔大正13〕から1936年までを対象とする。

療養所のハンセン病患者を外部の人に繋げることを目的として内田が短歌を奨励したことは馬場が指摘しているが、本稿は内田のハンセン病患者の短歌への関与を経時的にたどりながら、これまでに論じられていない内田の思想と戦略と明らかにする。

1. 内田守の生涯

内田のハンセン病患者の短歌に対する考えを理解するためには、その生涯を概観しておくことが不可欠である。以下、内田の自伝的な記述が含まれている著書『生まれざりせば』〔内田 1976〕と、内田の伝記的事実の詳細な記述がある馬場純二の「医官、内田守と文芸活動」〔馬場 2000〕を適宜参照しつつ、内田の一生を概観しておきたい。

1900年（明治33）6月10日、内田は熊本県菊池郡泗水村（現菊池市）で父常平、母波津の3男として生れた。1919年（明治33）県立中学済々黌を卒業し、旅順工科学堂電気科に入学する（馬場：21）。しかし、長兄が夭折したため同校を退学し、1920年（大正9）私立熊本医学校（熊本県立医学専門学校、熊本県立医科大学を経て、現熊本大学医学部）に入学する

内田がいつ短歌を詠むようになったかは明らかでないが、旅順工科学堂時代にすでに、短歌をつくっていたようである（馬場 2000: 21-22）。熊本へ戻って医学を学ぶ間は、内田は短歌誌『人間的』の発行にかかわっており（内田 1926b: 89）、「地方家人としてやや知られていた」と自ら述べている（内田1976: 8）。

1924年（大正13）3月熊本県立医科大学を卒業した内田は、同年4月にハンセン病の診療機関であった熊本県菊池郡合志村（現合志市）の九州療養所に医局員として赴任する。1927年春には、1914年〔大正3〕に設立された短歌結社水甕に入っている。内田は、設立時の主要メンバーの一人で結核の療養中だった岩谷莫哀（1888〔明治21〕～1927）を病床に訪れ、「弟子入りをした」としている（内田1974: 9）。九州療養所に勤務するかたわら、母校で加

藤七三教授に師事して生化学を、鹿児島茂教授からは眼科学を学び、1934年に博士論文「鼠癩の眼疾患に関する研究」で熊本医科大学より医学博士を授与される。1936年、内田は光田健輔が園長を務めていた長島愛生園に転じて医務課長となる。患者の明石海人や医師の小川正子とは、この長島愛生園で出会い、彼等の著作の出版に尽力している。1942年には、青森の国立療養所松丘保養園の医務課長として赴任するが、健康を害し療養に専念する。

1946年に松丘保養園を辞して熊本に戻った時、内田の後半生は始まる。医院を開業した内田は、社会教育、純潔教育、学校保健にも携わる。1950年には熊本短期大学講師となり、後に教授、同短大付属社会福祉研究所の初代所長に就任している。熊本短期大学では、社会福祉を研究し講じるとともに、水俣病についても積極的に調査を行なった。1971年、厚生行政事務および教育功労者として勲四等瑞宝章を受けている。1973年、同短大を定年退職すると西九州大学教授に就任し、翌74年社会福祉学科の開設とともにその学科長となる。この間、熊本刑務所で囚人たちに短歌指導を行ない、囚人たちの短歌を集めた合同歌集『壁をたたく者』（1964）を編集している。内田は、蒐集したハンセン病や社会福祉にかかわる文献資料を、熊本県立図書館と西九州大学に内田文庫として寄贈した。1982年1月17日、内田は81歳の生涯を閉じている。

以上のような内田の経歴をみると、内田が一貫してハンセン病患者や囚人という社会的弱者に短歌を詠むことを勧めてきたことが了解される。そして、内田こそハンセン病短歌というジャンルが確立されるのに決定的な役割を果たした人物なのである。

2. 九州療養所の概観

1909年4月1日、日本で最初のハンセン病患者のための連合府県立の公立診療所が全国5箇所（青森、東京、大阪、香川、熊本）に設置された。九州療養所の前身は、1909年4月1日に開設された九州七県連合立九州らい診療所（収容患者定員150名）で、1911年3月30日には九州診療所と改称している。1941年、国へ移管され国立療養所菊池恵楓園と改称されて現在に至る²⁾。

前節で示したように、内田が熊本の九州療養所に赴任したのは1924年（大正13）4月だが、当時は300名ほどの患者が入院していたという（内田 1976: 8）。同年の11月29日九州療養所に入った鳥田尺草（歌人 本名大島数馬）によれば、診療所は黒石原という「東に遠く阿蘇を望み鬱蒼たる櫟林に囲まれて閑寂限りなき高原」にあった（鳥田 1939: 3）³⁾。熊本医大教授加藤七三は、「夜の山の如くに黒い大きな檜の森があり、其森かげ雑木林のなかに九州療養所は静かに横つてゐる」と描写している（加藤 1926: 37）。そして内田は、「冬は北風の強いところで長い霜柱がよく立」ったと述懐している（内田 1976: 34）。これらの記述

から、当時の療養所をとりまく自然環境をうかがうことができる。

では、療養所の社会的な環境はいかなるものだったか。内田は当時書いた文のなかで、患者たちは「殆ど絶対隔離とも云つていゝ」状況に置かれていると記している（内田 1926b: 87）。つまり、患者たちが療養所の外へ出るのはほぼ不可能であった。では、療養所を訪れる人はどうか。内田によれば、「病者への訪問客は肉親者が稀に来るが、一般社会人としては宗教家」が月に一回くらい一、二名ほど訪れるだけに過ぎなかった（内田 1976: v, 8）。

人的な交流のみならず、メディアを通じた文化的な交流も限られていた。「図書室には五～六十冊の小冊子しかなく、病者の精神文化は全く閉ざされていた」と内田が述べるように（内田 1976: 8）、外部から情報が書籍によつての療養所へもたらされることもあまりなかったようである。すなわち、九州療養所の患者たちは地理的にも社会的にも社会からは孤立した状態にあった。

このような空間から、患者たちの短歌が療養施設の外に向かって発信されるようになったのはいつ頃なのか。そして、九州療養所に限らずハンセン病療養施設一般における患者の手になる短歌や俳句、すなわちいわゆる短詩形文学はいつ頃まで遡りうるか。以下の節で、これらの問いを検討していく。

3. 九州療養所における俳句会の誕生

光田健輔は、1931年から57年までの長きに亘って国立のハンセン病療養施設である長島愛生園園長を務めたが、1909年に東京のハンセン病療養施設である公立の全生病院の開設された際、初代の医長に就任している。光田は、公立療養所の患者について、「その初期に於いては其の教養に於て境遇に於て、肺病の人と雲泥月鼈の差であった」と回想している（光田 1940: 2）。内田も、1926年に書いた文のなかで、九州療養所の患者たちの「学力の程度」について、「総じて教育の程度低く尋常小学校を卒業してゐない者もある」としている（内田 1926a: 5）。後述するように、このような状況のなかで句会が行なわれていたのだった。九州療養所の入所患者たちにとって、それは例外的な文化活動だったと考えられる。

内田が九州療養所に着任した時には、「既に10年の歴史を有する『檜の影』会と称する俳句の団体」があったという（内田 1926a: 4）。内田は、この「檜の影」会が「河村所長保護の元に吉武月次郎氏や宮部寸七翁氏の指導を受けつゝ、相当の進歩を続けてゐる事を知った」と記している（内田 1926a: 4）。

吉武月次郎（1882? [明治15?] ~ 1940）は福岡県に生まれ熊本に住んだ俳人で、没後の1976年に句集が出されている。一方、宮部寸七翁（本名逸夫、1887 [明治20] ~ 1926年 [大正15]）はジャーナリストであり、九州立憲新聞を経営した後博多毎日新聞の編集長を

務めた。1916年（大正5）に結核を発病するが、この頃より句作をはじめ『ホトトギス』などに投句した。1929年には、句集が没後出版されている。内田は、療養所の句会に「所外の指導者も時折は来てくれる」ようになったと記している（内田 1976: v）。「所外の指導者」とは、吉武や宮部であろう。それがいつ頃から行なわれるようになったかを内田は書いていないが、彼らは定期的に九州療養所を訪れて患者と接していたのであり、俳句は療養所と外の世界をつなぐものだった。

以上みてきたように九州療養所の患者の間では、短歌に先立って俳句が行なわれていた。俳句がどのように行なわれるようになったかについて、内田は「農村に温存されていた俳句運座が療養所内に持ち込まれ」たとしている（内田 1976: v）。『俳文学大辞典』によれば、「運座」とは「数人が集まり、席題によって句を詠み合い、選をする方式」で（尾形他編 1995: 92）、現在の句会に通ずる集まりである。どうやら俳句は、患者たちの間で自発的に作られるようになったようである。

内田が九州療養所に赴任するよりも前に、かなりの数まとまっていた患者たちの俳句をある人物が出版しようとしたものの、資金難で結局うまくいかなかったという（内田 1976: v, 34）。所長の河村が新たに着任した内田に出版を依頼し、内田は「二年間待って戴いたら、短歌と一緒にして出版しましょう」と約束した（内田 1976: v）。そして、内田はこの約束を守った。

4. 九州療養所における短歌会の出現

短歌を詠むことが九州療養所の患者の間で行なわれるようになったのは、1924年（大正13）と考えるのが妥当である。内田は次のように書いている。

二三回句会に出席してゐる中にさびしがつてゐる彼等は、何時の間にか私が短歌を作ることを知つて短歌も教えてくれと云い出したので、私は欣然として短歌会を始めた。（内田 1926a: 4）。

句会とは、「檜の影」会の句会である。先述のように医学生時代に短歌雑誌『人間的』にかかわり「地方歌人としてやや知られていた」という内田は、患者たちに短歌の指導を請われたのである（内田 1976: 8）。内田主導で九州療養所で毎月行なわれるようになった歌会には、「二十人くらいの出席」があったという（内田 1976: v）。

月例歌会が行なわれるようになってから「間もなく謄写ずりの『檜の影』を発行し、俳句の方を宮部氏に指導して貰ひ短歌の方は専ら私が指導して知人の間に頒布していた」と内田は書いている（内田 1926a: 4）。現存する『檜の影』で最も古いものは熊本県立図書館所蔵の1925年（大正14）1月発行の第2巻1号であり、ここから逆算すると『檜の影』は1924年

(大正13)、すなわち内田が九州療養所に着任した年に創刊されたことになる。先に引用した、短歌会を始めて間もなく謄写版刷りの『檜の影』を発行した、という内田の文言にも符合する。ガリ版刷りであることから発行部数も少なく、「知人の間に頒布」されていたとのことなのでその流通範囲はごく限られていたであろう。とはいえ、内田が指導する歌会でつくられた短歌、宮部寸七翁が指導する句会で作られた俳句を掲載するために創刊されたこの『檜の影』は、ハンセン病患者の短歌や俳句が療養施設の外部の者たちの眼に触れる機会を提供したのである。

俳人の宮崎草餅は、1926年春に宮部寸七翁が急逝した後、「檜の影」会の選句を担当するようになったが、これより以前からハンセン病患者の俳句を、宮部が選をしていた『『檜の影』会誌又は立憲新聞等を通して、見てみた』と記している(宮崎 1926: 85)。九州療養所の短歌・俳句誌『檜の影』(詳細は後に記す)の創刊は、上に述べたようにおそらく1924年[大正13]である。一方、「立憲新聞」とあるのは1913年[大正2]創刊の九州立憲新聞と考えられる。『檜の影』は、この新聞にはハンセン病の患者たちの句が定期的に掲載されていたものと推測されるが、それがいつから始まったのかは不明である。したがって、現時点では、九州療養所の患者たちの句が印刷されて療養所の外で読まれたのは1924年[大正13]まで遡ることができる。

『檜の影』1929年1月号に寄せた「檜の影一月号を祝して」と題された文で、所長の河村は患者たちを次のように叱咤激励する。

「檜の影」同人よ文学芸術は病苦の人にも恵まれてある住常座臥心眼を開いて森羅万象を達観諦聴せよ(河村 [1020] 1935a: 45)。

瀦堂という雅号で南画をよくした河村は、芸術に理解を示した⁴⁾。文芸に理解を示すこの所長のもとで内田は存分に力を発揮し、『檜の影』は順調に発行されていった。1930年には「慰安会自治会並に各員の努力によつて活版印刷機が購入」され(河村 [1020] 1935b: 46)、5月号からは活版で印刷されるようになった。翌31年には、俳句が独立し宮崎草餅を選者とする月刊の俳句誌『草の花』が創刊され、『檜の影』は、内田が選者の短歌、創作、詩、児童の作品等々の掲載する文芸雑誌となり、1941年に施設が国立に移管されその名が国立療養所菊池恵楓園となった後も継続され、1969年の第43巻まで刊行された。

5. 合同歌句集『檜の影 第1集』の出版

九州療養所の患者たちの短歌や俳句を収めた活版印刷の合同歌句集『檜の影 第1集』が発行されたのは、1926年[大正15]8月10日である。発行者は所長の河村正之、発行所は、熊本県菊池郡合志村九州療養所檜の影会となっている。初版は500部で、45名の短歌260首、

37名の俳句425句を収める。先述のように、この合同歌句集は、内田が尽力して刊行にこぎつけたものである。

謄写版印刷ではなく活版印刷なので、当然ある程度の出版費用がかかる。それは、内田が学生時代にかかわっていた短歌誌『人間的』の残金50円、九州療養所の慰安会から30円、河村所長、内田の恩師で熊本医大の生化学の教授で歌人でもある加藤七三らの「ポケットマネー」によって賄われた。内田は第一集の刊行時点で既に第二集の出版も視野に入れており、第一集「初版500部の売上高は将来第二集及び其の他の出版費用にあてる考へである」と記している（内田 1926b: 89）。

内田は、この出版を支援する人々も集めることにも尽力している。『檜の影 第一集』の巻末には賛助員の名前が掲げられているが、その数は45名にのぼる。九州療養所で俳句の指導にあたっていた吉岡禅寺洞、吉武月次郎が名を連ねる。短歌では、先に紹介した加藤七三熊本医大教授、松田常憲（1895〔明治28〕～1958）も賛助員に名を連ねている。松田は、『水甕』の編集を行っていた岩谷が結核で1927年に亡くなった後に『水甕』の編集に携わるようになった人物で、後に述べるようにハンセン病の患者の短歌を支援した。高野六郎も賛助員となっている。よく知られているように、高野はその後厚生省予防衛生局在職中にハンセン病患者の絶対隔離を推進した人物である。高野は歌人でもあったので、賛助員となることに応じたと思われる。

賛助員のなかで、現在でも広く知られている歌人や俳人としては、宮崎出身の歌人若山牧水（1885〔明治18〕～1928）と俳人の飯田蛇笏（1885〔明治18〕～1962）があげられる。牧水はこの時すでに著名な歌人だったが、蛇笏は当時まだ無名だった。この二人がどうして賛助員となったかは不明だが、内田が知っていて依頼したのかもしれない。もし、牧水を賛助員としたのが内田だとすれば、将来発揮される卓越したプロデューサーとしての才能の片鱗がここにあらわれているといえるだろう。

内田をこの歌句集の出版に駆り立てたのは、患者たちを世の人に知ってほしいというパターンリスティックとも捉えられうる欲求である。内田は、患者たちが社会から忘れられる傾向にあることに対して、二つの理由を考える。第一の理由は、彼らが隔離されていることである。すなわち、物理的に人目につかないということである。第二の理由として、内田は、彼らが「自ら認識して人間的な苦悩を進んで世人に訴ふることが少なかつた為ではあるまいか？」と問う（内田 1926b: 88）。つまり、患者は自らの現状を努力して世に伝える必要があるのではないかと内田は考えるのである。内田がこのように考える背景には、「同じ人間であれば溺れんとして救を求めている者を見過ごすことは出来ない筈である」という性善説がある（内田 1926b: 88）。

内田は、ハンセン病患者が自らのことを世の人々に知ってもらうには文芸が適切だとする。

余りに悲惨すぎる彼らの肉体と生活とは、其儘一般の人達に受入れられにくいのはまたやむを得ないことも知れない。此処に於て私は彼らの生活や感情を芸術化したる文芸作品は彼等の生活を紹介し感情を訴ふるに最も当を得たものではないかと思ふ（内田 1926b: 88）。

では、このような内田の意図が反映している『檜の影 第一集』はどのような読者を獲得したのか。1929年に出版された『檜の影 第二集』には、巻末に附録として第一集に対する書評が三本収められている。評者は、画家で歌人の津田青楓、評論家・作家の石丸悟平、医師で歌人の対馬完治である。石丸悟平（1886〔明治19〕～1969）は、「私は涙なしではこれを読むことができませんでした」と書いている（石丸〔1926〕1929: 99）。この『檜の影 第二集』の「巻末附記」に、内田は、第一集は、「皆様より非常なる讃辞と激励の言葉を受け、又各地の新聞雑誌に広く紹介されたと記している（内田 1929: 93）。また、第二版が出されていることから（下瀬 1935: 頁番号なし）、初版500部はすべて献呈されたり売れたものと考えられる。すなわち、『檜の影 第一集』の出版は社会にハンセン病患者の存在を認識させるという点ではひとまず成功した。

6. 外部との交流

先に見たように、『檜の影 第一集』はある程度注目された。しかし、内田は歌壇からの反応が乏しかったことに対して不満感をいだいた。

私が少し残念に思ひましたことは、現在自分で歌を詠んでゐる人より、もすこし位は顧みていたゞけるだらうと期待してゐましたが、余り頼もしいお言葉を承はる事が出来ませんでした（内田 1929: 93-4）。

『檜の影 第一集』の書評で、画家の津田清楓（1880〔明治13〕～1978）は、患者たちの歌を「無技巧」だが感動的（内田1929: 98）とし、医師の対馬完治（1890〔明治23〕～1975）は、より手厳しく「芸として鑑賞する事は或は無理であるかも知れぬが…（出版は：松岡補足）意義ある事」と評価している。（内田1929: 100）。この二人は歌人でもあり、歌壇の見解はこの二人の評価と大きな相違はなかっただろう。つまり、表現として貴重ではあるが短歌としてはどうかということである。

内田は、患者たちに歌壇でも評価されるような短歌を詠んでほしかった。『檜の影 第一集』に収められている短歌は、短歌を作り始めてから2年以内につくられたものであり（内田 1929: 94）、「短歌の手ほどきの時代」の作品である（内田 1926a: 5）。そこで、内田は、「病歌人達が本格的に勉強するならば、出来るだけ早く中央誌に入会させた方がよいと思った」と考えた（内田 1976: 145）。内田は彼らに、加藤七三が主宰を務めていた『胎』や、齋

藤瀏がかかわっていた『熊本歌会雑誌』に患者たち全員の作を発表させてもらったという（内田 1929: 94）。それだけではなく、患者たちを促して、内田が「中央誌」と呼ぶ歌誌にも短歌を投稿させた。

中央では「短歌雑誌」「水甕」及び「アララギ」等に投稿して相当の成績を挙げつゝあります（内田 1929: 94）。

先に引いた内田の文言のなかに「『水甕』その他の中央誌に加盟する者が出始めた」とあるが（内田 1976: 146）、この「中央誌」という言葉は興味深い。内田は、『胎』や『熊本歌会雑誌』といった熊本あるいはせいぜいその近県で流通している歌誌に対して、全国的に流通している結社誌の意味で内田はこの言葉を用いているのである。この用法の背後には、療養所を辺境、結社誌を中央とする考えがある。事実、療養所は辺境にあった。言うまでもなく、結社誌は場所ではなく雑誌なのだが、権威をあらわすものと捉えられているのである。

1928年には九州療養所の患者のなかに、その中央の短歌結社に参加する患者が現われた。第1節で述べたように内田は1927年春短歌結社水甕に入っているが、1928年6月に島田尺草以下5人の患者を水甕に紹介したのである（内田 1976: 10）。一般的に短歌結社は結社誌を発行しており、会員が編集部へ郵送した短歌を選者が読み掲載する歌を決めるというシステムを採っている。水甕も毎月結社誌『水甕』を発行していた。したがって、九州療養所の患者は歌稿を郵便で送っていたことになる。このことについて、内田は次のように記している。患者が直接書いた原稿を机上に置いたり、手に触れたりすることは気持ちが悪からうから、全文内田が浄書して送ることを（入会の：松岡補足）条件とした」と（内田 1976: 10）。療養所のなかのハンセン病患者の短歌が全国的に流通するようになったという点で、彼らが短歌結社に受け入れられたことは画期的な出来事であった。

一方、当時齋藤茂吉が指導的立場にあって歌壇で隆盛を極めていたアララギに入った患者も現われた。九州療養所の患者野添美敏は、1928年7月頃アララギに入り「熊本のアララギ会員、林實一、丹治千恵子諸氏等と交友を結」んだとされる（加藤 1933b: 632）。もし野添が林や療養所を訪れて丹治と会ったとすれば、肉親以外のものが療養所を訪れたことになり、稀な出来事だったといえるだろう。

もう一人アララギに入った九州療養所の患者をあげておく。1923年（大正12）頃九州療養院に入った石川孝（1906〔明治39〕～1930）である（内田 1940: 194）。内田が1924年に設立した檜の影短歌会で、「もっとも若き俊英として、彼の存在は光っていた」という石川は（内田 1940: 194）、野添に「歌の発表機関」を得たいと相談した。野添がアララギの主要メンバーだった土屋文明に、一人分の会費で野添と石川の投稿を認めてほしいと懇願したところ許されたという美談を、加藤七三が紹介している（加藤 1933b: 632）。石川は、1929年5月頃から『アララギ』に投稿を始めるが、1930年4月に25歳で亡くなった。

7. 合同歌集『檜の影 第二集』の出版

『檜の影 第二集』は、1929年12月10日に刊行された。短歌と俳句を収めた第一集とは異なり、第二集は短歌のみの合同歌集となっている。奥付には、編集兼発行者は河村正之となっているが、表紙では「内田守人編」とされている。発行所は、熊本県菊池村合志町九州療養所官舎内内田方 檜の影発行所、となっており、内田が本書の刊行を仕切っていたことが伺われる。

この第二集に「序」を寄せているのは賀川豊彦と石井直三郎、「跋」は齋藤瀏と加藤七三が書いている。彼らがどのような立場にあったかは後に記すとして、文の内容を検討してみたい。序や跋であるから、当然のこととして彼らは『檜の影 第二集』を讀んでいる。賀川は、短歌を詠む患者たちを「病む身にも猶その心持を表現して、創作の喜びに人生の悲しみをうちかけて行く人々」と呼び、「隠れたる石川啄木も居れば、匿れたる正岡子規も沢山居る様である」と述べる（賀川 1929: 1）。「多くの作者はさうした寂しい境涯にありながら、静かに自己を守り自己を育みつゝ、精神的なあるものへの精進をつづけてゐる」と賞賛するのは石井である（石井 1929: 4）。一方、齋藤は自分が「所謂歌人なるものゝ歌より此の集の歌に多く心を惹かれる」のは、それが「何等の野望なく、遠慮なく、誇張なく、其の感ずるまゝを率直に歌に表現した真実なる心の叫びだから」と考える（齋藤 1929: 89）。

だが、その後のハンセン病の短歌の展開を考えた場合、最も興味ぶかい発言をしているのは、加藤である。

我歌道は我建国三千年來の精神であつて、畏くも 陛下の御前に於ける新年御歌会の盛觀の如き、世界たぐひなき崇高優雅なる御儀式であり、そしてこれにみるが如き我同胞皆人の歌心の発露こそ「檜の影」を生んだ根本的素因ではあるが、然し内田君の如き医師で兼て歌人である人が九州診療所になかつたならば、いかでか我々はこの驚異すべき歌集の誕生に接することができようか（加藤 1929: 91）。

まず注目すべきは、天皇に言及している点である。なるほど、短歌は天皇と直接的な関係を持っている。そして、加藤は「我同胞皆人の歌心の発露」と書くことによって天皇からハンセン病患者までの連続性、すなわち歌心をもつ人間ということを示しているのである。これは、当時としては画期的な見解ではあるまいか。

引用した部分でもうひとつ重要なのは、医師であり歌人である内田に対する評価である。上の引用で加藤が述べるように、内田が九州診療所にいなかったとしたら、たしかに『檜の影 第一集』『檜の影 第二集』どころか、謄写版の『檜の影』もつくられなかったかもしれない。プロデューサーとしての内田の能力は、きわめて高いと言わざるをえない。

その能力は、序と跋の執筆者の人選にも示されている。内田が彼らを選んだのには、ある思惑があったと考えられる。恩師でもあり九州療養所の患者たちの短歌に関心を持っていた加藤は当時隆盛を誇った短歌結社アララギに属していた。当時退役し予備軍人として熊本市内に住んでいた齋藤は、陸軍大学卒のエリートの元陸軍少将である。齋藤はまた歌人でもあった。佐佐木信綱が主宰する日本で最初の短歌結社心の花の属しすでに歌集を一冊出していた齋藤は、「かねてから『熊本歌話会雑誌』誌上にて『檜の影』の人々の歌を熱心に指導」していたのである（内田 1929: 97）。石川は、『檜の影』同人のなかの何人かが参加していた短歌結社水甕の主宰である。こうしてみると、4人中3人が有力短歌結社の実力者なのである。残る一人の賀川だが、彼はクリスチャンで、1925年に設立された日本救癩協会（日本MTL）の幹部の一人としてハンセン病にかんして大きな影響力をもっていた⁵⁾。内田は、彼ら「御願ひする為に約半年を要し」と記しているが（内田 1929: 96）、短歌界に影響のある人物の序や跋を配することで『檜の影 第二集』が歌壇で注目されるように配慮したと考えるのが妥当であろう。

8. 社会の認識と解放：内田の情熱と戦略

「はじめに」で引用した河村の文は、『檜の影 第1集』に彼が寄せた「序」からのものだが、同じ文のなかで河村は次のようにも書いている。

患者達の生活や感情をありのままに社会に紹介するには、何うしても彼らの感情の発露した文芸作品によるのが最も当を得てゐるように思はれます。此の文芸作品によつて患者達が赤裸々な感情を社会に訴へて社会の反響と同情とを得ますならば、それが当面の最もよき慰安であり救であります。（中略）此の意味で私は数年来患者達の文芸趣味を奨励してきました（後略）（河村 1926: 1）。

ここには、当時の隔離される側—すなわちハンセン病患者—の短歌と俳句に対する隔離する側の眼差しが端的に示されている。社会から顧みられない患者たちの生活や感情を当事者でない者、すなわち世間に知ってもらい「反響と同情」を獲得することで、当事者たる患者は救済されるという論理である。

内田は、この論理を現実化するのに適切な人物だった。内田を衝き動かしていた欲求は河村のそれと同質のものであり、それは二つに分けることができる。ひとつめは、世間の人々に療養所のハンセン病患者の生そして苦悩を少しでも理解してほしいという願いである。1926年、内田は次のように書いている。

（松岡補足：ハンセン病患者たちが）今迄斯く世の同情ある方面からも比較的忘れられ勝となつてゐたのは彼等が隔離されてゐて世人の眼に触れにくかつた事にもよるが、又

一つは患者達自身が自ら隠認して人間的な苦悩を進んで世人に訴ふることが少なかつた為ではあるまいか？（内田 1926b: 88）

ハンセン病患者が世間から忘れられた存在であるという認識は、少なくとも内田の周囲の医師である河村と加藤に共有されていた。

1924年〔大正13〕春に生化学の教授として熊本医大に赴任した加藤は、その夏まで熊本にハンセン病の施設があることを医師でありながら知らなかったことを告白し、「男女の患者が泣きぬれた生活を営んでいる事は余りに日本人々から忘れられ勝ちである。自分の亦嘗てはその一人だったのだ」と記している（加藤 1926: 37）。また、「はじめに」で引用した九州療養所所長河村正之の発言も、同様の見解を示している。

ふたつめは、ハンセン病患者の「精神的解放」そして「更生」である。1926年、内田は『檜の影 第一集』の巻末附記で「癩患者の精神的解放に努力」したいと宣言している（内田 1926b: 89）。そして、1929年には、『檜の影 第二集』の巻末附記に次のように記している。

肉体的に社会との接触を断たれたる病者達が精神的に解放され、人間らしい気持を味ひ得るには、信仰に自己の全部を更生させ得る人は別として、文字によって表現されたる文芸作品によつて社会の人と間接的に語るより仕方がないのであります（内田 1929: 95）。

この箇所には、短歌による患者の社会との接触と精神の解放という内田の考えが端的に現わされている。後に内田はこうも述べている。

家を追はれ社会と絶縁されてゐる彼等の、精神的に生きる道は全く塞がれてゐたが、文芸作品による社会との交歓は、漸く彼らにゆるされたる唯一の精神的更生の纜である（内田 1940: 221）

内田の文脈で、「更生」という言葉は精神的、そして社会的に立ち直ることを意味している。内田は、九州療養所に赴任して2年後の1926年に、患者は「神の摂理に漏れたる彼らの運命は全く生ける屍」であり、「彼等の運命は全く社会の文運から取残された観がある」と捉え、その毎日の生活は「実に乏しい単調なるものである」とし、「宗教家の愛の手も充分に彼らを救ふことは出来ない」と断言している（内田 1926b: 87）⁶⁾。内田は、短歌による彼らの救済に邁進したのだ。

おわりに：なぜ短歌か

短歌や俳句は、病者の文学としての性格を持ちうる。「療養短歌」および「療養俳句」は、文字通り病む人々が療養中に詠む短歌や俳句を意味している。病気としては、結核とハンセン病が代表的である。

結核では、明治大正期の歌人として正岡子規（1867〔慶応3〕～1902〔明治35〕）、石川啄

木（1886 [明治19]～1912 [明治45]）、山川登美子（1879 [明治12]～1909 [明治42]）、松倉米吉（1895 [明治28]～1919 [大正8]）らがいる。昭和の歌人では、滝沢^{わたる}亘（1925 [大正14]～1966 [昭和41]）相良宏（1925 [大正14]～1955 [昭和30]）らが結核で斃れている。ハンセン病の歌人としては、明石海人（1901 [明治34]～1939）、伊藤保（1901 [明治34]～1963）、島田尺草（1904 [明治37]～1938）らが知られている。俳句では、結核の石田波郷（1913 [大正2]～1969）が著名である。

これらの病気の治療は専門の施設で行なわれることが多かったが、そこで短歌や俳句がつくられていった。小説が一定の時間集中しないと書けないのに対し、短歌や俳句は短時間でつくることができる。この手軽さが、療養する人たちに受け入れられた大きな要因と考えていいだろう。また、他人の短歌や俳句を読み批評をする集まり、すなわち歌会や句会が形成され、その会誌が発行されるようになることも稀ではなかった。

短歌・俳句とその作者の関係について、松田修は次のように論じている。

和歌＝短歌、連歌＝俳諧のごとき、短詩型文学のばあい、一首・一句が自立的宇宙であるとしても（あるいはあればあるほどに）、それらを統合する求心的力学として、作家の（作家名の）登場がしばしば要請されるだろう。その点、作品と作家の連帯というか、結合というか短詩型文学におけるかかわりには、小説や物語とはレベルをことにした体質がたしかにある（傍点 松田）。実名であれなけれ、すでに固有名詞で作品＝作品集に臨んでいる以上、男性か、女性か、二十歳か、三十歳か、家庭は、子供は…、とふみこんでゆかざるをえぬことにもなるのだ。（中略）そして踏みこみによって明らかになる部分がたしかにあるのだ（松田 1980: 142）。

松田は、近代以前の和歌や俳諧も射程に入れて論じているが、少なくとも近代以降の短詩型文学においてこの主張は妥当である。長きに亘って引用したのは、短歌と俳句の短詩型文学では、一首・一句が作品として独立していても、作家の生を知ることによって作品をより深く理解できるようになることを松田が的確に指摘しているからである。逆に言えば、短歌や俳句は作家の生をよりいっそうの奥行きをもって把握する導きの糸となりうるということだ。

さて、近代以降の短歌と俳句では重要な差異がある。たとえば上田三四二が論じるように、短歌は主観的であり、俳句は客観的である（上田 1959: 11）。「作中主体」とは、ある短歌を詠んだと考えられる主体を表す言葉である。近代短歌は基本的に一人称の文学であり、歌の中に登場するかいなかにかかわらず、読者はこの作中主体の存在を意識する。ある短歌に二人称の「あなた」や三人称の「彼・彼女」しか登場しなくても、その「あなた」や「彼・彼女」彼らを認識している主体がいるし、叙景歌でもその風景を見ている主体が存在する。この主体が「作中主体」と呼ばれているのである。そして、作中主体は歌人その人であるのが一般的である。したがって、個人が病いをどのように経験するかを検討する際に

は、俳句より短歌の方が相応しいと言える。

内田はこのことをよく理解しており、「短歌が俳句に比して這入りやすく俳句より叙情的である」とすでに1926年に述べている（内田 1926: 5）。また、後年には「俳句より短歌の方が叙情的であり、病者の病床詠嘆としては短歌が便利である」とも記している（内田 1976: v）。

文芸を通じて社会の人達に社会の人達に親しく呼びかけることが出来、自然の風光をに親しみ、自らを労わりつゝ生ける歓を感じ行くことが出来る。其処には自ら彼らの真実なる情感が発露し其の人格が現はれてくる。此の文芸作品によって世人が患者の生活を知り其の苦悩に同情し、人格的握手を措ママきまれないならばそれが彼等に取つて最大の慰安であり更生である（内田 1926b: 88）。

内田は、短歌が療養所に隔離されている患者たちと外部の人々をつなぐものと考えているのである。「私は毎日メスを執り注射器を握りつゝあるがその心は常に暗い」とは、当時有効な治療法がなかったハンセン病の療養施設で医師として働いていた内田の心情の告白である（内田 1926b: 88）。だからこそ、内田は「彼等の前に芸術の本態を説き、彼等の行くべき道を力説する時こそは実に明るい心を感じたのである（内田 1926b: 88）⁷⁾。

註

- 1) 明治、大正の年度については、たとえば、1888年〔明治21〕のように西暦のあとに和暦を示す。
- 2) 国立療養所菊池恵楓園のホームページの「施設の沿革」(<http://www.nhds.go.jp/~keifuen/enkaku.html>)を参照した。最終アクセス日2015年9月29日
- 3) 内田の尽力によって島田は2冊の歌集を遺すことになるが、それについては別稿にゆずる。
- 4) 1935年、九州療養所患者慰安会が河村の一周忌に刊行した『檜の蔭の聖父』という河村を偲ぶ書籍には、河村の南画が数点収められている。
- 5) MTLはMission to Lepersの頭文字をとったもの。日本MTLには、幹部として光田健輔が参加していた。後に、賀川は1937年に出版された熊本の回春病院のハンセン病患者隅青鳥の遺歌集『隅青鳥歌集』に序を寄せている。
- 6) ハンセン病患者でキリスト教に入信したものは少なからずおり、内田のこの発言は必ずしも妥当ではない。日本におけるキリスト教とハンセン病とのかかわりについては、荒井1996を参照のこと。
- 7) なるほど、短歌を詠むことによって安らぎを得た患者はいるに違いない。しかし、内田が言う「進むべき道」にはそのパターンナリスティックな態度が明らかであり、内田が考える理想の患者像が隠されているのである。内田が明石海人に見出した理想的な患者像につ

いては、松岡2015を参照のこと。

引用文献

荒井英子

1996『ハンセン病とキリスト教』岩波書店

荒井裕樹

2011『隔離の文学』アルス

馬場純二

2000「医官・内田守と文芸活動」『歴史評論』No. 656: 20-32

復本一郎

1995「吉岡禅寺洞 齋藤慎爾（他編）『現代俳句ハンドブック』雄山閣、p. 101

石井直三郎

1929「序」内田守人編『檜の影 第二集』檜の影発行所、pp. 3-4

石丸悟平 [1926] 1929「『檜の影 第一集』」内田守編『檜の影 第二集』檜の影発行所、
pp. 98-99

賀川豊彦

1929「序」内田守人編『檜の影 第二集』檜の影発行所、pp. 1-2

加藤七三

1926「跋」『檜の影 第一集』九州療養所檜の影会、pp. 36-38

1929「跋」『檜の影 第二集』檜の影発行所、pp. 91-92

1933a「熊本アララギ歌会」『アララギ』26 (1): 576-577

1933b「故会員石川孝君」『アララギ』26 (1): 631-632

河村正之

[1929] 1935a「檜の影一月号を祝して」下瀬初太郎編『檜の蔭の聖父』九州療養所患者慰安
会、pp. 43-45

[1930] 1935b「檜の影活字版初号を祝して」下瀬初太郎編『檜の蔭の聖父』九州療養所患
者慰安会、pp. 45-46

松田修

1981「銀器鏘然」『現代歌人文庫 中城ふみ子歌集』国文社、pp. 142-153

松岡秀明

2015「ハンセン病患者のライフヒストリーとしての短歌：明石海人の歌集『白描』につい
て」*Communication-Design* 14: 49-56

光田健輔

1940「序」内田守人『療養短歌読本』白十字会、pp. 1-3

宮崎草餅

1926「序」内田守（編）『檜の影 第一集』九州療養所檜の影会

大畑健治、尾形侑

1995「運座」尾形他（編）『俳文学大辞典』角川書店

齋藤瀏

1929「跋」『檜の影 第二集』檜の影発行所、pp. 89-90

下瀬初太郎（編）

1935『檜の蔭の聖父』九州療養所患者慰安会

内田守（内田守人）

1926a「序」内田守人編『檜の影 第一集』九州療養所檜の影会、pp. 4-5

1926b「卷末附記」内田守人編『檜の影 第一集』九州療養所檜の影会、pp. 87-89

1929「卷末附記」内田守人編『檜の影 第二集』檜の影発行所、pp. 93-97

1940『療養短歌読本』白十字会

1976『生れざりせば』春秋社

上田三四二

1959『アララギの病歌人』白玉書房

From Where does Our Health Come?: The Sociology of Antonovsky's Salutogenesis

Mitsuho Ikeda and Sookja Suh*

(Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University; *Visiting Scholar of CSCD, Niigata Collage of Nursing)

Abstract

In this paper, the authors examine critically the salutogenic theory/hypothesis addressed by Aaron Antonovsky (1923-1994). To remark our conclusion, the potential of salutogenic theory, which we value, should be highlighted in terms that it pointed out that health of human-beings is a dynamic and multi-dimensional status, and it has relative and more pragmatic aspects. We rather deem that the success in the measurement of Sense Of Coherence (SOC) using psychometric scales is less important, despite the fact that Antonovsky himself had high opinion on it as well as his peer scientists and the followers do. The authors discuss how we can develop the legacy of the research done by Antonovsky, focusing on the potential of qualitative research method.

Key words

Salutogenic theory, Aaron Antonovsky, *healthism*, positive health, medical sociology and anthropology

1. The Naturalist Fallacy of Health Theory

In *Principia Ethica* (1903), George Edward Moore questioned the ethical judgment that nature or the things under the rule of nature is “goodness.” One might firstly remind “health” as something good and this statement seems acceptable as health apparently derives from nature. However, death as well is a natural phenomenon under the rule of nature and so is illness. Therefore, it falls in a logical collapse to say that health is good because it comes from nature. For us, being good and being natural are not relevant with each other. Accordingly, Moore suggests that we should not to associate health with goodness because both health and illness embrace the concept of good and evil – *a priori* value judgment – in their property. In order to replace this invalid relevance of health and good, we can apply “normal and abnormal” to “health and illness” so that the scientific judgment can be released from the value judgment of good and evil. It is a suggestion of taking a premise that normal submits to nature and not does abnormal.

It is worth remarking that Moore pointed out that being good not synonym of nature. To explain further, let us say, it is no more a logical persuasion to justify the judgment that organ transplantation or euthanasia can be “evil” because it doesn’t follow the rule of nature. On the other hand, saying, “I myself don’t mean to object to the idea that health is good,” Moore warns us: the

proposition that health is good should be considered as an unsolved problem and must not be treated as self-evident. Because we will end up with “naturalistic fallacy” noted above if we determine it is self-evident (*Principia Ethica* §10). It seems that we simply call health *post hoc* fact to refer the particular state that can be identified as “good.” Then, looking back for this century since Moore’s warning, how far has our thought reached? Health scientists – those engaged in quantitative studies to establish scientific evidence in the area of medicine, health, nursing and so on – are hoping to contribute to the enhancement of human health, but they mostly end up with self-satisfaction believing that their research are walking in the light of the verity of nature. Despite their glorious achievement in biomedical sciences, yet, we find in our own daily observations that common people never stop seeking health and pose consistent demands on health specialists. The demands by common people are eclectic and they are undoubtedly in a state of “starvation” deprived from well-being and/or health. This means that the science outcome has never caught up the “health demands” by common people. This situation can basically be attribute to the bio-medicalization¹ of health and industrial commercialization. However, there are some other reasons, which are accordingly making this dismal situation much worse. The majority of health scientists should be indulged in their own rats races and paper chases, and have been missing thinking deeply over some important questions; in what way health can be defined, and what is the phase relation between health and something judged as good.

In this standpoint, the authors will examine critically the salutogenic theory/hypothesis addressed by Aaron Antonovsky (1979, 1988). To remark our conclusion beforehand, the potential of salutogenic theory, which we value, should be highlighted in terms that it pointed out that health of human-beings is a dynamic and multi-dimensional status, and it has relative and more pragmatic aspects. We rather deem that the success in the measurement of Sense Of Coherence (SOC) using psychometric scales is less important, despite the fact that Antonovsky himself had high opinion on it as well as his peer scientists and the followers do. The establishment of the method to measure SOC contributed to disseminating the easy tools of propagate. However, the development of quantitative research in SOC did not contribute to the further elaboration of salutogenic theory – a counter-concept of pathogenic theory/hypothesis that modern medicine embody – in regard with qualitative research method.

Hereafter, the authors will discuss how we can develop the legacy of the research done by Antonovsky, focusing on the potential of qualitative research method.

2.

The Origin of Antonovsky’s theory and its preliminary speculation

Until the late 1970s, Antonovsky had already started his life-history studies of Jewish female born in Central Europe between 1914 to 1923. And his book written with Nancy Datan and Benjamin Maoz published in 1981, was grounded on the research of which objects were middle-aged women with diverse cultural background who were born between 1915 to 1924 and lived in Israel (Datan et al. 1981: 2). They were the women who had been aged sixteen to twenty five in 1939, that is to say, when the Nazi began to send Jews and others to concentration camps. As it was expected, the ratings of a group of concentration camp survivors in the emotional health was obviously ($p < .001$) low compared to those of a [statistical] control group. And while 29% in the group

of concentration camp survivors, in the control group, the ratio of those keeping better emotional health was 51%. It was presumed that having experience of the concentration camp gave negative effects to their emotional health. Nonetheless, why were a little under one third of the concentration camp survivors able to be in reasonable emotional health?

At first, Antonovsky could not find any clear explanation for what he had observed. These women had had at minimum three environmental stressors until then. They are, namely (1) the concentration camps, (2) living in exile after World War II, and (3) three Middle-East Wars. Even after experiencing harsh stress situation, one-third to a half of the population kept reasonable health. Antonovsky discovered that stressors caused some responses in living organism that enhance positive function.

He describes,

“Evidently a shock stressor can have salutary consequences for an organism, provided it is escapable. But when one thinks only of the pathogenic consequences, one misses the vista that such a finding (= *view or claim that capability to control stressors is mislead as the state that immune suppression is not working*) opens up” (Antonovsky 1988: 1, *added by the authors*).

In addition, it is assumed that he was aware of the effect of stress coping derived from the environment as well as the responses at the organism level. Specifically, he describes, “Being high on stressors, given high social supports, is salutary” (Antonovsky 1988: 8). Having come by this original idea, Antonovsky addressed his new theory “Salutogenic model” in *Health, Stress, and Coping* (1979). What is central in the salutogenic model is that it indicates the limit of pathological orientation, *pathogenic*, which has been the fundamental paradigm in biomedicine, emphasizing the other-way-around thought based on “*salutogenic* orientation.” Below shows the theoretical framework of “salutogenic orientation.”

The model comprises the idea that health *i.e.* health-ease and illness, dis-ease should not be

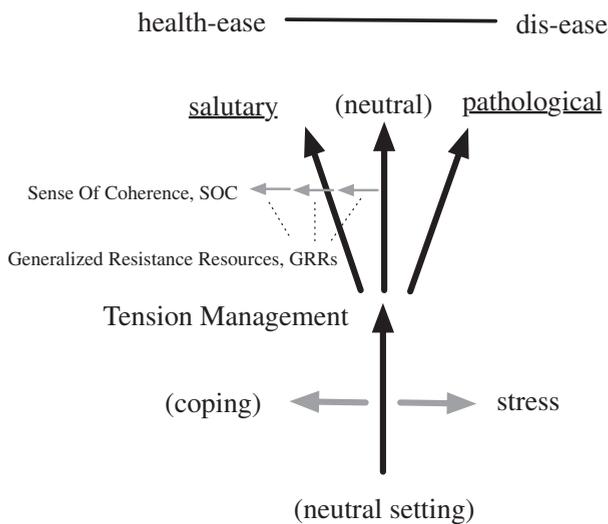


Fig.1. Aaron Antonovsky’s Health-ease/Dis-ease Continuum and the function of GRRs
(Designed by M.Ikeda, 2015)

considered dichotomic and mutually exclusive but rather seen as two ends that form a continuum (=health-ease/dis-ease continuum) upon which we can find the health status of individual (See the Chart).

Amongst the factors involving salutogenic process, utmost importance was given to the concept of Sense of Coherence (SOC). The concept of SOC prepares for a hypothesis not only to interpret why some people are able to survive, but also, to stay in healthy condition under a harsh stress situation. There is not a deduction that maintaining strong SOC brings health to individuals. The interview records in the Antonovsky's study imply that the individuals with weaker SOC, when they are informed how SOC is observed in actual life situation, are likely either to accept the SOC without questioning regardless of their original thought, or, on the contrary, to deny the idea of SOC. In the meantime, the conditions that keep stronger SOC include optimism and flexible response for successful adaptation. SOC is a state of inner consistency held by individual, and expressed as a conviction born of the subjective experience of individual in concordance with the logical construct of SOC. Antonovsky himself defined SOC as follows; "*The sense of coherence is a global orientation that expresses the extent to which one has a pervasive, enduring though dynamic feeling of confidence that (1) the stimuli deriving from one's internal and external environments in the course of living are structured, predictable, and explicable; (2) the resources are available to one to meet the demands posed by these stimuli; and (3) these demands are challenges, worthy of investment and engagement*" (Antonovsky, 1998: 19). Now, with reference of the concept of SOC in the preface of Antonovsky's work in 1988, the authors are going to re-conceptualize the characteristics of SOC, indicating the four components below as we identify;

- (a) Consistent perception about the world: "persisting conviction", "conviction that the interior and the exterior environments are predictable,"
- (b) Rough and easy perception: the sense that "events are by and large predictable."
- (c) Optimism: conviction that "it is very likely that things work well,"
- (d) Perception with which life world is filled: "dispositional orientation towards the world" (Antonovsky 1988: xvii, 182).

SOC is constructed by the component called GRRs, *i.e.* Generalized Resistance Resources. GRRs are explained as the components or, literally, the resources from which SOC emerges. For instance, Antonovsky describes that "GRRs are defined as *potential* resources [to emerge SOC; added by the author]" (Antonovsky 1988:xvi). Additionally, the function of GRRs, interacting with the individual actor, is to help find the meaning of the misfortune as stressor inflicted on him/her and to make easier to cope with it. Specifically, "(i) what is common to all GRRs, I proposed, was that they facilitated making sense out of the countless stressors with which we are constantly bombarded. (ii) In providing one repeatedly with such experiences, they generate, over time, a strong sense of coherence. (Antonovsky 1988:xiii, numbers added by the authors)." As seen above, Antonovsky's explanation implies that the GRRs involve the principle of daily practice by the individual. For instance, in his book published in 1988, Chapter five is allotted for the discussion on "the child-rearing patterns and subcultural and cultural patterns of social organization that build up the GRRs out of which a strong SOC emerges" (Antonovsky 1988:xvi).

3.

Sensing SOC: Revival of qualitative interview method

As we indicated at the end of the section 1 in this article, we do not value very much the psychometric measurement of SOC contrary to the appraisal it has gained in academia. That is because, contribution of the “discovery” of the SOC, we believe, lies not in the development of the measurement method, but in formulation of the versatile term to interpret the experienced facts of Jewish women who are in reasonable health even after the collective passion in history. In the early age of his academic life he enjoyed in his birthplace North America, Antonovsky dedicated himself to research on cultural anthropology, notably, to the study of “culture and personality,” of which theoretical premise influenced the formulation of the SOC. In this sense, the general principle of illustrating the SOC could by no means be unitary but rather diverse, being modified by the culture or being given various meanings through personal experience.

Antonovsky cites the series of studies done by Hans Selye (1907-1982). He also studied with Eric John Cassel (1921-1976), an epidemiologist from Johannesburg, and he used to apply to both theories that provide scientific evidence for his SOC effectiveness. Meanwhile, Antonovsky advised his students who conducted qualitative interview to consult about the “concept of the story telling;” which we call “narrative” and was addressed by Eric John Cassel, then Antonovsky taught sociology of medicine at the Ben-Gurion University medical school after 1972. The main idea is that there is a personal “story telling” of the patient that is closely related to the course of the “illness.” And it implies the importance of getting a picture of the person’s “story telling” when the treatment providers face the patients’ illnesses. In this regard, the Cassel’s concept of the story telling might remind us of the lately developed “narrative analysis” which involves in better understanding of the patients and in better medical practice, which these two actually do not have close relation with each other. Antonovsky relates an experience Cassel himself had, concerning the importance of the story telling in his book.

“In it he (=Cassel) tells of the elderly patient hospitalized for a serious, advanced problem of the knee. Symptom identification, diagnostic hypothesis, confirmation, and institution of appropriate therapy followed in short order, leading to discharge and ensuring re-hospitalization in short order. For what was learned only by accident by a medical student was that this elderly gentleman had been widowed a year before, had moved to this strange city where he had no friends or relatives, had only a small income, and lived in a fourth-floor walk-up. The knee was very real and very serious. This was what had led to hospitalization this time; the next time, it could have been malnutrition, pneumonia, or depression and suicide attempt” (Antonovsky, 1998: 5, *added by the authors*).

As this brief description implies, a “story telling” is not what was told superficially, but a shared experience between the patient and the listener in which the latter could reach the deeply hidden aspect of life of the former. To reach a “real story,” something more than transcribing the interview sessions is required. It requires deep compassion or rapport for the “lived experience” in phenomenological sense, of researcher him/herself.

Then, here is another episode to remark.

《Episode》

“In November 1982 I was teaching interviewing to beginning medical students in Israel. The setting was a well-baby clinic, the reluctant interviewee a twenty-six-year-old mother who had brought her three-week-old infant, while her fourteen-month-old little girl trailed behind. Her reluctance, the nurse told us, was understandable: her four older children waited at home. After a few words about the uneventful delivery, she remained quiet in response to the student’s next question, which referred to the presence of her husband at the delivery. Fortunately, she had learned how to wait patiently and use nonverbal expressions of concern. The woman then told him, in almost in-audible words, that her husband had been killed in the fighting in Lebanon some four months earlier: The rapport had been created, and she began to speak, going on for nearly an hour. At first, the picture that emerged was the one we had expected. The terrible blow could not be recalled. But the Rehabilitation Division of the Ministry of Defense had already arranged her move to a more spacious apartment, an adequate pension, financial assurance of her children’s education, and the like. The diagnosis had been made, the therapy designed. / But the student, who had learned Cassel’s concept of the story, had been taught to get a picture of the person’s life, and patiently elicited what no one else had been successful in learning. As a child, her father had raped Mrs. R. Pregnant at sixteen, she had had no alternative but to marry the man whose death had made her a war heroine. She was often beaten, related to as a baby-making machine, and no more than occasionally provided for financially. The death had been the most fortunate thing that had ever happened to her. For the first time in her life, she now had the possibility – no more than that – of a decent human existence. Clearly, her strength was inadequate to transform this into a reality. Solution of financial problems, the assigned therapy, was necessary but far from sufficient. It was a magic bullet, not an adequate basis for active adaptation” (Antonovsky, 1998: 9-10).

To close this discussion about the SOC, we would like to choose three examples of “narratives” from the Antonovsky’s work in 1988 in which the respondent interviewees mentioned religious belief. In the 1988 book, Antonovsky did not explicitly deal with the influence of Judaism upon his concept of SOC. Still, the theme of faith was fairly common in the speech of those people with stronger SOC and they were more likely to be positive about it, while in the interviews with those with weak SOC religion was hardly brought up for the topic, or, if spoken, they doubted of it.

According to the evaluation done by Antonovsky himself, the following Narrative One and Two were spoken by the respondents with strong SOC. And the last one, Narrative Three, was spoken by the respondent with weak SOC.

《Narrative on faith: One》

“How we overcame all the difficulties in our lives? You need patience. You have to believe in the Promise, a word I learned in Bulgaria. ... It doesn’t have to be God. It can be another force, but you have to have faith. Otherwise you can’t suffer so much and go on. ... How can your health be when you’re so old? But I have no complaints. ... I don’t see so well, I can’t read, that’s what bothers me. I work in the center for the blind about three hours a day, together with my wife... I’ve always worked, and always looked for work.” *Male, 90, Married with two children,*

retired, economic deprivation (Antonovsky, 1998: 68). – Individual with high SOC.

《Narrative on faith: Two》

“I don’t get mad, always laugh and sing. [After describing all he learned and dreamt about Zionism and Israel] When I finally came, things weren’t strange, I understood what was going on. ... /... I’m religious, but not a rabbi... I love Judaism, tradition. It makes me feel optimistic, real optimism. I always say that things will be good... I never despair... I have nothing to complain about. It’s all a matter of will. ... I’m only sorry I’m not yet married ... What I can do, I do; what I can’t, well ... You have to take life as it comes.” *Male, 42, Divorced, switch-board operator, blind since age three* (Antonovsky, 1998: 70). –Individual with high SOC.

《Narrative on faith: Three》

“I believe in fate. True, I don’t know who runs it, because I don’t believe in God anymore.” *Female, 50, Widow with two children, housewife, her husband had died three years earlier* (Antonovsky, 1998: 72). –Individual with high SOC.

4.

Circular argument in Antonovsky’s theory

Antonovsky argued that achieving or recovering health entails in individual as an subject (1) the social-physical mechanism which generates health and (2) Sense of Coherence, SOC. The former is Salutogenesis – the theory of generating health which emphasize the function of the sanitary factors – the factors which give effect on health both to the individuals with good health status and to the society they belong to. And the latter indicates that we can enhance own health status when the linkage between physical and social components (in other word, the sense of coherence) is organized. In addition, Antonovsky and his colleague researchers gained positive recognition for the “establishment” in the measurement of the SOC applying the technique of Likert scale.

However, Antonovsky’s argument on the relationship between GRRs and the well-being of individual/society postulates an indirect causal effect and makes a circular logic. In this regard, he argues; the SOC and GRRs correlate with each other and GRRs produce well-being though well-being itself does not directly affect SOC.

《Explanation on how GRRs and SOC are relevant to well-being: 01 》

Clearly, if one has a high intelligence, lots of money, or a clear ego identity or lives in a stable, integrated culture to mention some GRRs-there will be consequences not only for the emergence of a strong SOC, and therefore health, but for other areas of well-being as well. I would, therefore, by and large expect positive correlations between the SOC and many facets of well-being to the extent that the GRRs which create the life experiences that give rise to a strong SOC also directly promote well-being. If one is happy with one’s financial situation, this is not because one has a strong SOC but because one has a satisfactory income (Antonovsky, 1998: 181)

《Explanation on how GRRs and SOC are relevant to well-being: 02》

In sum, I think it reasonable to expect positive, though not directly causal, correlations between the

SOC and well-being, on two grounds. First, if the SOC is indeed generative of good health, and health has a positive influence on global estimates of one's well-being, then the two will be related, though indirectly; Second, many of the GRRs that promote a strong SOC are also directly related to well-being. But there is, I think, a more direct causal relationship, one that requires refinement and specification of the notion of well-being into two different levels of abstraction. One can distinguish between, on the one hand, the more global referents such as happiness, life satisfaction, morale, and positive (as well as negative) affect and, on the other hand, how one feels about one's functioning. The former is strongly contingent on the inherent potential in the objective situation; the latter will be much more directly related to the SOC (Antonovsky, 1998: 181).

5. The significance of Antonovsky's theory

The theoretical implication of the SOC determines (a) the intervention for the individual (and the group he/she belongs to) and (b) the reconstruction of the life context or the environment as the way of enhancing SOC. In other words, SOC involves in two interrelated aspects, namely, (1) the potential in the individual's ability, how one can practice adaptively to the context (= "locality of practice") and (2) the potential of the locality with which an individual can utilize. These two are similar to the concept of the "faculties in locality of practice" that the author addresses (Ikeda, Online).

Beyond the transition of time and culture that creates diversity in people and their lives, how can SOC be made possible? The answer for this question is left to be discussed. What the philosophy of Antonovsky's theory tells us is that we are to live, over the course of life, "adapting" ourselves to various social restrictions or given environmental conditions and in that purpose we need to utilize our own physical and psychological potential so as to maintain stronger SOC. In order to choose the environment which increases the SOC (*i.e.* provides the positive GRRs) and to avoid the one which decreases the SOC (*i.e.* provides the negative GRRs), no one but oneself and the people surrounding him/her have to act self-directed. That is because maintaining strong SOC is equal to "live better." In that sense, SOC constructs a principle of practical ethics to promote the function of salutogenesis. A Japanese medical sociologist, Yoshihiko Yamazaki once mentioned, "new paradigm is necessary in the human-to-human service area all over the world to pay more attention to positive nature of human-beings and to focus on developing it" (Yamazaki, 2008: 53). It is exactly this principle of practical ethics that establishes such a paradigm.

Kantian philosopher says that it is impossible to find rational basis to explain the superiority of practical reason, but every demand raised in moral life urges us to assure its truthfulness. Then, the individual's reason can do nothing but to submit the proposition. Unless the word "should do (*sollen*)" makes sense, we can do what we should do. When an individual determines one's own will be guided by such rules, it can be said that the one has freedom (*die Freiheit*) as Kantian philosopher says. Therefore, freedom is the premise for the intrinsic attribute of will in all the rational being (cf. Gilson 1999[1937: 234-235]).

6.

Conclusion: What can we learn from Salutogenic theory?

Yamazaki (2008: 49, 53) also pointed out that the SOC is a sociological and anthropological concept. What can we learn from the SOC if it is so? We can find it in the practical application of SOC theory.

The concept of the SOC is an explanatory theory derived from Antonovsky's "wonder" (interest) that 30 percent of his study subjects were able to keep physical and emotional health despite experiencing severe stress condition in their past. First, the causal relation between the strong SOC and health status was presumed, and then, the method of measurement for quantitative description was developed in use of psychometric scale. Later, transitional change of the SOC became a hot topic, and people sought the strategy to maintain the strong SOC at the end. As the authors understood, the victory of the SOC theory is all about the discovery of "salutogenic creativity intrinsic to human-being," and the setback for the *instrumentalization* of the SOC by measurement scales. The latter, setback in our words, which brought "academic creativity" to those studying SOC, made the tool of the propagation available for them to test and write.

The SOC theory has added a new view to human being that an adversity can be an origin of salutogenic creativity however harsh it is. It seems like a paradox. But it will surely promise a harvest of thought on health in the twenty-first century. In the past, Frederick Dun, Rene Dubos and others had criticized the "definition of health"² in *the Constitution of the World Health Organization*, WHO (1946) as "being static, unitary, absolute and utopian." Today the new idea on health will be created in response to this criticism after over seventy years. The potential of human being, and the health, is dynamic, pluralistic, relative, sometime assertive and very realistic! – Is the idealistic concept of health down to earth?

In 1978, The *Declaration of Alma Ata* by WHO expressed that the achievement of health and the health rights is the issue to be solved by people themselves. In 1986, the *Ottawa Charter for Health Promotion* called for urgent action by all the government to protect and promote the health as basic human rights. These were compelling but with positive anticipation. Nonetheless, the public "health demands" by common people are more or less the same as that in 1978 and before, which makes us "wondered." We can say ironically "these people are starving for health." This "wonder" is a contrast to the "wonder" felt by Antonovsky when he found the group of people who were healthy after severe condition like as atrocities or extermination camps. Is the ardent desire, "*hunger for health*," satisfied by enhancing the SOC? We have no idea about it but we believe that it is worth trying. It is now to start explore in order to make a *qualitative turn* in health research³. The way will be open where the health scientists and the individuals with strong SOC speak to each other.

Notes

- 1) Medicalization is the process in which human condition and trouble come to be defined by professionals as medical problems. Under this social process the people think that their badness should be treated and prevented by medical professionals. Bio-Medicalization of health is the process in which health concept and practice of human body issues come to defined by biomedical frame of

- reference, e.g. Receiving routine health checkup, consumption of health foods authorized by medical doctors, and so on.
- 2) The Constitution says, "Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity," in its preface (adopted by the International Health Conference held in New York from 19 June to 22 July 1946, signed on 22 July 1946 by the representatives of 61 States, and entered into force on 7 April 1948) .
 - 3) As mentioning to "*qualitative turn*," we never forget the importance of interpretive anthropology by Clifford Geertz (1978) and his hermeneutic approach in social sciences (King et al., 1994: 38-40).

Bibliography

- Antonovsky, Aaron. (1979) *Health, stress, and coping*. San Francisco: Jossey-Bass Publishers.
- Antonovsky, Aaron. (1988) *Unraveling the mystery of health*. San Francisco: Jossey-Bass Publishers.
- Cassell, Eric J. (1978) *The healer's art: a new approach to the doctor-patient relationship*. Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books.
- Datan, Nancy., Aaron Antonovsky, Benjamin Maoz. (1981) *A time to reap: the middle age of women in five Israeli subcultures*. Johns Hopkins University Press
- Frank, Arthur W. (1991) From sick role to health role: Deconstructing Parsons. In *Talcott Parsons: Theorist of Modernity*. Robertson, Roland and Bryan S. Turner eds., Pp.205-216, London: Sage.
- Geertz, Clifford. (1978) *The interpretation of culture*. New York: Basic Books.
- Gilson, Étienne. (1999[1937]) *The unity of philosophical experience*. San Francisco: Ignatius Press.
- Ikeda, Mistuho. (Online) Genba-ryoku, empowerment faculty and sensibility in practice [in Japanese], (<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/user/rosaldo/060518genba.html>)
- King, Gary, Robert O. Keohane, Sidney Verba. (1994) *Designing social inquiry: scientific inference in qualitative research*. Princeton, N.J.: Princeton University Press.
- Moore, G. E. (1988 [1903]) *Principia Ethica*. Buffalo, NY: Prometheus Books,
- Vansteenkiste, Maarten and Kennon M. Sheldon, 2006. There's nothing more practical than good theory: Integrating motivational interviewing and self-determination theory. *British Journal of Clinical Psychology* 45: 63-82.
- Yamazaki, Yoshihiko (2009) The Implications and Challenges of Sense of Coherence (SOC) as Stress Coping Ability for Health and Medical Sociology [in Japanese]. *Hoken-Iryō-Shakaigaku-Ronshū* (Journal of Japanese Journal of Health and Medical Sociology) 19 (2): 43-55.

Japanese Abstract

私たちの健康はどこからやってくる？： アントノフスキーの健康生成論について

池田光穂（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）

徐淑子（新潟県立看護大学、大阪大学CSCD）

要約

この論文では、アーロン・アントノフスキー（Aaron Antonovsky, 生没年1923-1994）の健康生成論について著者たちは批判的に論じる。具体的には、健康生成論の価値は、人間の健康の動的的で多面的な価値についての質的側面を明らかにしたことにあると考え、一般的に指摘されているように首尾一貫感覚（SOC）の精神測定的な数量尺度化にその価値があるのではないと主張する。それゆえ、著者たちはアントノフスキーの質的な方法論に焦点をあてて、彼の研究上の遺産を今後どのように継承すべきなのかについて論じる。

キーワード

健康生成論、アーロン・アントノフスキー、ヘルシズム（健康至上主義）、ポジティブ・ヘルス、医療社会学、医療人類学

Communication-Design (コミュニケーションデザイン・センター紀要)

投稿規程

1. 投稿者の資格

- 投稿者のうち少なくとも1名は、大阪大学の教員・研究員、および学生を含むこととする。
- ただし、Communication-Design 編集担当（以下、編集担当）が承認または原稿執筆を依頼したものについてはこの限りではない。

2. 投稿内容・種類

2.1 投稿内容

- 投稿原稿の内容は自由であるが、広義のコミュニケーションデザインの概念・実践・教育方法の開発に寄与するものを対象とする。
- 原稿の対象は、論文、実践報告、研究ノートとする。

2.2 種類

2.2.1 論文（査読あり）

- 当該分野における新しい研究・開発の成果の記述で、研究の対象、方法、あるいは結果に独創性、創造性があり、かつ明確で価値のある結果や事実を含む。

2.2.2 実践報告（査読なし¹⁾）

- 実践報告には下記のような内容を含む。
 - 教育、および社会学連携等の実践報告
 - 技術報告（設備・装置・ソフトウェアなどの設計・試験・運用・評価などの新しい経験やその結果の報告で、実用的価値のあるもの）
- なお、実践報告については、テキスト以外（画像・音声・映像等）を中心とした形式の投稿も可能とする。ただしその場合であっても、その背景や著者の意図に関する記述（1000文字以上）を含むこととする。

2.2.3 研究ノート（査読なし¹⁾）

- 上記のカテゴリに当てはまらない原稿（下記の例示を参照）。
 - 短報（速報）：今後論文にまとめる予定の試論、又は速報的なもの。
 - 資料：論文のスタイルに収まりにくいもの。委員会・研究会が集約した意見・報告書など。
 - 編集者への手紙（letter to editor）：論文に対する意見、編集に対する意見など。
 - 書評：書物に対する評。
 - その他
- なお、実践報告については、テキスト以外（画像・音声・映像等）を中心とした形式の投稿も可能とする。ただしその場合であっても、その背景や著者の意図に関する記述（1000文字以上）を含むこととする。

3. 投稿原稿の作成及び提出

3.1 原稿の様式

- 原稿の様式は、別紙執筆要綱ⁱⁱ⁾による。なお、編集担当において表記等をあらためることがある。

3.2 受理日

- 投稿原稿が編集担当に到着した日付をもって原稿の受理日とする。

3.3 内容

- 投稿原稿の内容は、原則として他の書籍・雑誌において未発表でかつ査読中でないものとする。

4. 査読手続き

4.1 査読の対象となる原稿

- 論文とする。
- 実践報告および研究ノートについては、編集の観点から修正を依頼する場合がある。

4.2 査読者の選出等

- 投稿された原稿について、編集担当が2名の査読者を選出し、別紙の査読要領にしたがって査読を行う。

4.3 投稿原稿の採否

- 査読の結果に基づいて編集担当が決定し、投稿者に通知する。

4.4 原稿の修正

- 査読照会事項について原稿の修正を行う場合は、旧原稿と査読所見に対する回答書を添えて、編集担当が指定した期間内に書類一式を再提出する。
- 著者校正は1回とし、再校以降は編集担当が担当する。

5. 著者校正

- 著者校正は1回とし、再校以降は編集担当が担当する。
- なお、マルチメディアの投稿原稿等については、配信上の加工が必要とされる場合、編集担当と著者との間で事前に協議することがある。

6. 媒体

- Communication-Design は、大阪大学学術情報庫（OUKA）を利用したオンラインジャーナルの形態で公開することを原則とする。

7. 著作権

- 本誌に掲載された内容については、投稿者に著作権があるものとする。
- また本誌は電子版も発行し、原稿は原則として大阪大学学術情報庫 OUKA に PDF ファイル又はその他の形式で掲載するため、著者はこれについての著作権上の複製権及び公衆送信権をコミュニケーションデザイン・センターに対して許諾することとする（これに掲載することを許諾しない場合は投稿時に申請するものとする）。
- また投稿において著作権者の存在する写真、図版、資料を引用する場合には、投稿者が責任をもって許可を得ておくこと。

附則

- この規定の改正は、2013年4月から施行する。

i 査読なしの場合でも、編集の観点から、原稿の改訂等を編集担当より依頼する場合がある。

ii 執筆要綱及びその他の書類は次の URL を参照のこと。 <http://cscd.osaka-u.ac.jp/data/orangebook/>

Communication-Design 14

異なる分野・文化・フィールド——人と人のつながりをデザインする

企画 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター

編集・制作 池田光穂
本間直樹
西川 勝
内野 花
内田みや子

表紙デザイン 清水良介

2016年3月31日 発行

発行 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター (CSCD)
〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-16
Tel. 06-6850-6111 (大阪大学代表) Fax. 06-4865-0121
<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/>

印刷所 能登印刷株式会社

© Center for the Study of Communication-Design and Authors. All Rights Reserved.

2016 Printed in Japan

本書における全ての著作権は、大阪大学コミュニケーションデザイン・センターとその著者に帰属します。無断転載を禁ず。

㊦〈日本複写権センター委託出版物〉

本書を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。

本書をコピーされる場合は、事前に日本複写権センター（JIRC）の許諾を受けてください。

JIRC [<http://www.jirc.or.jp> eメール：info@jirc.or.jp 電話：03-3401-2382]

ISSN 1881-8234

